いつのまにか腐ってた

第2号

R15

ノベル（掲載順）

吉田来世子／黒井誰何／一倉弓乃

対談『腐女子のお茶会』

一倉弓乃／黒井誰何

雛わに／吉田来世子

先輩・後輩 特集

いつのまにか腐ってた発行委員会

はじめに

　あけましておめでとうございます。

　昨年の一月一日、「いつのまにか腐ってた」は、「これっきりかもしれない」とつぶやきつつ、創刊号を発行いたしました。思わぬ数の閲覧や100を超えるダウンロードをいただき、感謝の限りでございます。そして今年の元旦に、第2号をお届けできることにつきまして、一同ありがたく、また嬉しく感じております。

　第2号は、我々が「腐コミュ」と呼んでおりますところで、過去に行われた企画をまとめた記事がメインとなっております。(他サイトで公開済みのものを多く含みます。)そもそも我々の活動の記念と申しますか総集編みたいなものをやりたいねという話から出発したわりに、創刊号は豪勢にオール新作でございましたが、第2号は、我々の活動の足跡に、少しの新作と、黒井さんの映画に関する読み物を加えてお届けしたいと思います。

　腐コミュでは過去、「お題」で短編を書くという企画を行っておりました。そのお題のなかに、最初の頃、「先輩後輩の甘い片思い」というものがありまして、そのとき作ったキャラクターを、その後のお題でも皆が生かして書いたため、自然とそれぞれシリーズが出来上がってゆきました。お題は他に、腰骨・手首・卒業式・アラザン・乾電池・炭酸飲料・金髪・白熊・夏の星座・永久歯・銀杏（イチョウ)・口紅、などがありました。今回第２号に掲載いたしますのは、それらのお題で書かれた作品群の傑作選となっております。どの話がどのお題か、さぐりつつお読みいただければなお佳きか、と思われます。なお、吉田さんが「公開済みのものばかりでは」と超絶ご多忙の中一念奮起してくださり、結果、吉田さんと当方(一倉)はシリーズの書下ろし新作を加えての掲載となっております。ちなみに黒井さんは小説新作の代わりに映画に関するエッセイを書き下ろしてくださいました。どうぞお楽しみいただけますように。
　また、月例の「腐コミュチャット」の緩く楽しくグダグダな様子を覗いていただけるよう、大ボリュームで、執筆者三名に鰐さんを加えた四人対談を掲載いたします。平均年齢やや高めの我々のおしゃべりの雰囲気を少しでも感じていただけたら、また同年代の方々には「そうそう!　あったあった!」といたいけなる少女時代を思い出していただけたら幸いです。
　今号は表紙をオカマツ様にお願いして描いていただきました。オカマツ様、素敵な表紙絵をありがとうございます。(≧▽≦)
　それではめくるめく腐コミュの世界へ、さっそくどうぞ!

一倉弓乃　拝

目次

・はじめに

・目次

・「恋は蜜より甘く」（吉田来世子）

・映画コラム「君の名前で僕を呼んで」（黒井誰何）

・「先輩と山下くん（抜粋）」（黒井誰何）

・「アンゼリカ」（一倉弓乃）

・映画コラム「映画泥棒の謎」（黒井誰何）

・貴婦人のお茶会（一倉弓乃・黒井誰何・吉田来世子・鰐屋雛菊）

・奥付

（表紙イラスト／オカマツ）

「恋は蜜より甘く」（吉田来世子）

１．『手首』
「はい、先輩」
　声と共にコーヒーの入った紙コップが目の前に置かれる。
「お、サンキュー」
　窓際の席で本を読んでいた久弥は、皆藤を見上げるとニッと笑った。
　大学の休憩フロアはほどほどに混んでいて、あちこちで話し声や笑い声が聞こえる。皆藤は久弥の隣の椅子を引くと、そこに自分も腰掛けた。
　奢りかと問うと、もちろん、という答えが返って来る。後で体で支払って貰いますから、という言葉に、久弥はハハハと笑った。

　皆藤は久弥よりも１つ後輩だ。同じ学部の三年次生で、時々同じ講義を受けていたので顔と名前は知っていたが、話をするようになったのは今年になってからだ。長身でスタイルも良くて顔もハンサムな皆藤は男にも女にもモテたが、それよりも人好きのする笑顔や性格の良さに惹かれていつも彼の周りにはたくさんの友人たちがいた。
　そんな皆藤に声を掛けられたのは、やはり今と同じように窓際の席で本を読んでいた時のことだった。
　『先輩、甘いコーヒーって飲めますか？』
　皆藤はそう言うと、間違って買ってしまったのだという紙コップに入ったコーヒーを久弥の前に置いた。
　『飲めるけど』
　飲めると言うよりも、甘いコーヒーの方が好きだ。だが仕送り前で金が無いので奢りかと問うと、もちろんです、という答えと屈託の無い笑顔が返って来た。
　その日から、久弥が窓際の席で本を読んでいると皆藤が声を掛けて来るようになった。後輩に懐かれるのは嬉しいが、どうして自分なんだろうとも思う。自分なんていつも一人で本を読んでいるような根暗だし、皆藤が太陽だとしたら月、いや、もっと存在感の無い新月のような存在だと思うからだ。しかし、皆藤は久弥の躊躇いになどまるで気付かない風で、先輩、先輩と懐いてきてはコーヒーや菓子パンを奢ってくれる。そして、その求愛行動のようなそれは現在も続いていた。

「先輩って本当に綺麗な髪してますよね」
　皆藤が言いながら、背中の中程まで伸びたサラサラの黒髪を指先で一筋掬う。面倒だから切らないだけで特に手入れもせずにいたのだが、皆藤に触られるようになってからは意識的にトリートメントなどもするようになった。
「顔も綺麗だから女優さんみたいだ」
「からかうんなら他所行けよな」

　女顔には自覚があったのでムッとして言うと、からかってませんよ、という答えが返って来る。
「本当に綺麗です」
　そんな歯の浮くような台詞を皆藤は素で言うのだから恥ずかしい。しかも、眩しそうな笑顔付きでだ。こんなまっすぐな瞳で見つめられて睦言みたいな言葉を囁かれたら、世の女性の大半が一瞬でメロメロになってしまうに違いない。斯くいう自分も皆藤の甘い言葉と優しい態度にどんどん骨抜きにされている。恨みがましい目で隣を睨むと、皆藤が目元を緩めた。
「コーヒー飲まないんですか？　冷めちゃいますよ？」
　皆藤が久弥の髪をサラサラと指で梳くようにして撫でながら甘い声音で問う。久弥は少しだけ赤くなると、体を引きながら紙コップを掴んだ。
「火傷しないでくださいね」
　言葉と共に皆藤の手が追いかけて来て、再び久弥の髪を撫でる。その悪戯な指先は久弥の耳殻をなぞると、その下の耳たぶをムニと摘まんだ。
「よせって」
　久弥は思わず笑うと、体を引いて皆藤の愛撫から逃がれる。
「だって気持ちいいんだもん」
　皆藤は楽しそうにそう言うと、再び久弥の耳たぶを指先で摘まんだ。感触を楽しむようにムニムニと揉まれて、久弥は更に赤くなる。
「やめろってば」
　さすがにこそばゆくてコーヒーを置いた手で皆藤の左手を掴んだ久弥は、腱の浮き出た男らしい手首に嵌められている銀色の腕時計に目を留めた。
「この時計、いつもしてるよね。カッコイイ」
　その腕時計は皆藤の愛用品らしく、手入れもよくされているようで、金属のベルトの境目にも汚れは無い。
「かなり古いですよ。高校の頃から付けてるから」
　久弥がその時計を外して自分の手首にはめると、皆藤はそう言いながらダブルロックの留め金をパチンと留めてくれた。腕時計が欲しいんですか、と問われて久弥は、うん、と答える。
「くれる？」
　斜め目線で見上げながら可愛くおねだりをすると、皆藤が笑いながら、欲しいのならもっとイイのを買ってあげるのに、と答える。
「やだ、これがイイ」
　久弥は首を横に振って答えると、その時計を見詰める。そのベルトは久弥の手首には大き過ぎて、手を離すと文字盤が自重でクルリと下を向いた。
「調整しましょうか」
　皆藤の言葉に久弥は再び首を横に振って、ううん、いい、と答える。ゆるゆるの腕時計を肘近くまで上げて『ね？』と言って見上げると、皆藤がその言葉に眩しそうに目を細めて笑った。
　皆藤が好きだ。同性を好きだなんて言ったら変態だと思われてしまうから言わないけれど、皆

藤が恋人だったらきっと幸せに違いないと思う。いっそ好きだと言ってしまおうか。優しい皆藤のことだ、もしかしたら久弥が変態だと知っても別に気にしないでくれるかもしれない。その衝動のような思いを、『男同士』という壁が引き止めた。
「このアナログの文字盤が好き」
　久弥は代わりにそう言うと、アラビア文字のあしらわれた文字盤にチュッと小さく音を立てて口付ける。途端に金属の臭いに混じって皆藤がいつも付けているトワレの匂いが微かにして、久弥の胸を甘い痛みがツキンと走った。いつの間にこんなにもこの男のことを好きになってしまっていたのだろうと考え、久弥は皆藤の端整な顔をジッと見つめる。
「先輩？」
　突然黙り込んでしまった久弥を、皆藤がどうしたのかと同じように見返す。久弥はコクリと喉を鳴らすと、思い切って口を開いた。
「皆藤、あのさ……」
　その時、休憩フロアの入口で『健人！』と皆藤を呼ぶ声がする。皆藤は声のした方を見ると、再び久弥に視線を戻して、じゃあ、と言って立ち上がった。久弥は、おう、と答えると、離れて行く後ろ姿をぼんやりと目で追う。そして、腕時計の無くなった左手に女の子が嬉しそうに腕を絡めるのを見ると、小さく溜息をついて再び本に視線を戻した。そう、皆藤には一年前から付き合っているカノジョがいるのだ。
「ハァ……」
　我知らず深い深い溜息が漏れる。腕時計ではなくその左手が欲しいのだとねだったなら皆藤はどんな顔をしただろうかと考えながら、久弥はぬるくなってしまったコーヒーを一息に飲み干した。

２．『腰骨』
「あれ、もしかして先輩もですか？」
　健人（たけひと）は集合場所の講議室の前で前方から歩いて来た人物に問う。
「そう」
　健人の１つ先輩で同学部四年次の原は頷くと、頼まれちゃってさあ、と苦笑混じりに答えた。
「オレなんて背も低いし力も無いし、何の役にも立たないと思うんだけど」
　原のぼやき混じりの言葉に、健人は、そんなことないですよ、と答える。同じ用具係だと言うので、一緒に組みましょうかと誘うと、原は目を細めて嬉しそうに笑った。

　原は男である。その証拠に名前も『久弥』だ。美人で華奢であろうと、長い艶やかな黒髪をしていようと、小さな赤い唇がどんなに美味しそうに見えようとも男である。健人はこの美しい先輩を大学の新入生オリエンテーションの受付で見かけてからずっと気になっていた。そして、何とか仲良くなれないだろうかと思い続けた２年後に、そのチャンスは訪れた。
『先輩、甘いコーヒーって飲めますか？』

　間違えて甘いコーヒーを買ってしまった健人は、原に声をかけることに成功する。原は、飲めるよ、と答えると、健人を見上げてニコニコッと笑った。その笑顔があまりにも可愛くて、健人はハートを鷲掴みされる。そして、その笑顔見たさに今もコーヒーを奢り続けていた。

「先輩、こっち」
　階段状になっている講義室の後ろ端の席を指差すと、原が、うん、と答えて付いて来る。前方の黒板には『第１回学祭実行委員会』と大きく書かれており、本部役員らしき数名の男女が教壇を囲んで打ち合わせをしていた。
「先輩は文化祭の実行委員って初めてですよね」
　確か以前話題に出たのを思い出して尋ねると、うん、という答えが返って来る。ちなみに健人は一年の頃から毎年委員を引き受けている。健人はその時に原が、じゃあ次はオレもやってみようかな、と言っていたのを思い出し、そっと隣を見た。
（もしかして、俺と一緒にやりたくて引き受けてくれた？）
　まさかとは思うが、だとしたら嬉しい。緩みかけた頬を咳払いと共に引き締めていると、入口で渡されたレジュメに目を通していた原が『風邪か？』と言って健人を見上げる。その拍子に長い黒髪が揺れて、甘い芳しい香りが健人の鼻腔をくすぐった。
「先輩、イイ匂いですね」
　顔を寄せてもっと近くで嗅ごうとすると、慌てたように体を引いて逃げられる。
「こらこら」
　苦笑混じりに叱られたが、甘く笑んだ瞳では全然効果が無かった。
「先輩の髪って本当に手触りイイですよね」
　背中の中程まで伸びた艶やかな黒髪を指先で掬いながら言うと、原が、普通だよ、と答えて少しだけ赤くなる。トリートメントとかしてるんですか、と尋ねると、気持ち悪いこと言うなよ、と言って頭をペシッと叩かれた。健人はその手首に自分があげた腕時計がはめられているのを見て少しだけ目を見開く。
「あ、それ」
　正確には『あげた』のではなく『取られた』のだが、自分の愛用の品を原が付けてくれていることが嬉しかった。
「結局、調整しなかったんですね」
　手を動かす度にその時計がブラブラ揺れるのを見て言うと、原が、うん、と答えて笑う。気になりませんか、と尋ねると、だからイイんじゃないか、と答えた。
「え？」
　尋ね返そうとしたその時、打ち合わせを終えた実行委員長が皆に向かって会議の開始を告げる。お陰で健人は原の言葉の意味を聞き損ねた。

「うわ、埃っぽいですね」

　学祭の注意事項の説明が終わり、用具係は本部役員が用意した収納場所別の一覧表を手に散開する。健人たちの担当は第二体育館だった。体育館の物置はステージの裏側にあり、物置兼通路になっている。更衣室代わりにも使われているようで、バスケットのユニフォームや大学の体操服が床の上の隅で埃まみれになっていた。
「これってやっぱ、箱から出して染みとか破れとかも確認するんですかねえ」
　収納棚の一番高い場所に暗幕や紅白幕と書かれた箱があるのを見付けた健人は、ちょっと面倒になって言う。
「とりあえずちょっと開けて見てみるか」
　原はそう答えると、近くにあった脚立を引き寄せてさっさと登り始めた。
「先輩、危ないですよ」
　慌てて交代しようとすると、三段目まで登った原が、平気だよ、と答える。棚の箱に手を伸ばしながら、ちゃんと押さえてろよ、と言われて、健人は仕方なく脚立の脚を掴んだ。
「うおッ、箱の上も凄い埃だ」
　頭の上で声がして、重い箱を引き摺る音がする。そして、次の瞬間『うわッ』という叫び声と共に原の体がグラッと揺れた。
「先輩！」
　健人は慌てて声を上げると、原の腰を両手で掴む。大丈夫ですかと問うと、ごめんごめん、という呑気な返事が返って来た。
「いや〜、思ったより箱が重くてさぁ」
　健人はその言葉に怪我は無いようだとわかってホッとする。その時、手の平に当たる硬い感触に気付いた。
（あ……）
　それが原の腰骨だと気付き、健人の心臓がドキンと跳ねる。原の体に触れているのだと言うリアルさに、途端に心臓が騒ぎ出した。その感触を確かめたくて掴んだ手に力を入れると、腰骨の際の窪みを親指で押された原が、アッ、と声を上げて腰を引く。
「やめろって、落ちる落ちる」
　棚の上から半分落ちかけた箱を支えながら、原が半ば本気で言う。健人は原の顔を見上げると、思い切って尋ねた。
「先輩……俺のこと、好き？」
　いきなり予想外のことを訊かれた原が、驚いたように目を見開いて健人を見る。その焦げ茶色の大きな瞳が一瞬戸惑うように大きく揺れた。途端に健人はここが密室だということを思い出す。薄暗い部屋に２人きりというシチュエーションに、更に興奮が煽られた。
「なに言ってんの、お前……」
　少しして、ようやく我に返ったらしい原がボソリと言う。
「カノジョいるくせに……」
　確かに健人は一年程前から付き合っているカノジョがいる。視線を逸らしながら責めるように言われて、健人の心臓がズキッと痛んだ。

「そうだね……」
　健人は思わず俯くと、原の体をそっと離す。ごめん、と小声で謝ると、突然頭を撫でられた。
「いくつなの、お前」
　笑いを含んだその声音に、健人はそっと顔を上げる。原は健人と目が合うと、可愛い可愛い、と言ってにっこり笑った。
「ほら、さっさとチェックしちまおうぜ」
　原が明るい声音で言って、健人と交替する為に脚立を降りる。代わりに脚立に登ろうとした健人は、原がそれとなく顔を逸らして目元を拭ったのを見た。途端に健人は原を抱き締めたい衝動に駆られる。しかし、今の自分にはその資格が無いこともわかっていた。

３．『卒業式』
「わかったわ」
　怒りで引き攣った頬がヒクヒクと震える。
「そのかわり、一発殴らせて」
　硬く握り締めたコブシが頭上高く振り上げられ、次の瞬間体重を乗せた素晴らしいパンチがガツンと左頬に命中した。

　『皆藤健人がレストランで女に殴り飛ばされたらしい』という噂は一晩で野山を、いや学部内を駆け抜けた。その噂は次の日には専攻内に広まり、更に次の日には担当教員や事務職員の耳にまで届いたらしい。
「もう大丈夫なの？」
　三日振りに登校した皆藤の、まだ腫れの残っている青黒い左顎を見て、教務担当の中年女性が休講届けの用紙を受け取りながら気の毒そうに問う。
「はい……」
　皆藤は本日何度目になるかわからない周囲の気遣いの言葉に頭を下げると、用を済ませて外へ出た。

「ハァ……」
　カノジョと別れようと思ったのは、第二体育館倉庫で原の涙を見た時だ。
　特に彼女には不満は無かった。１年次の時に互いに学祭実行委員だったのがきっかけで知り合い、彼女から告られて付き合い始めた。顔は毎年ミスキャンパスに選ばれるくらいだから可愛いし、スタイルもイイ。服のセンスもイイから当然男にもモテる。だから皆藤と付き合うようになってからも複数の男に誘われては食事やカラオケに行っていたが、トモダチだと言われれば、そんなもんかなと思うだけで、特に嫉妬も無かった。彼女はそれが不満だったらしく、よく『妬きもちくらい妬いてよ！』と言われたが、彼女自身がトモダチだと言うのだから妬きようがない。別れてくれと言った時にはさすがに驚いたようだったが、それは彼女のプライドの問題だ

ったらしく、相手が男だと話すと大笑いして、蔑むような上から目線で冒頭の言葉をのたまった。後は周知の様である。

「先輩」
　２時限が終わった後の休憩フロアは混んでいて、話し声や笑い声で満ちている。皆藤は窓際の指定席で本を読む原の後ろ姿を確認すると、いつものように自販機で甘いコーヒーを買って、その紙コップを目の前に置いた。
「あれ、皆藤！」
　顔を上げた原が驚いたように目を見開き、皆藤のまだ腫れている左顎を見て、もういいのかと問う。皆藤は、はい、と答えると、手を伸ばして原のサラサラの髪に触れた。
「もう全部終わりました。これで堂々と先輩の傍にいられます」
　原は皆藤の言葉の意味がわからなかったのか、一瞬『？』という顔をしたが、すぐに、良かったな、と言って笑う。その眩しい笑顔に皆藤も満足して、はい、と答えた。
「ところで、何で別れたんだ？」
　結構仲良かったろ、と無邪気に問われて皆藤は答えに迷う。
「実は……」
　皆藤は視線を合わせると、思い切って言った。
「卒業式の日程が貼り出されているのを見て……」
「卒業式？」
　皆藤の言葉に原がキョトンとした顔をする。
「そうです」
　休憩フロアの前には長い廊下があり、その壁一面が学生用の掲示板になっている。その左端が年間の行事予定になっているのだが、そこに先日今年度の卒業式の日程が貼り出されたのだ。原が４年次なのは知っていたが、卒業したらもう会えなくなってしまうのだという現実に気付き、皆藤は焦ったのである。なぜなら皆藤は原のアパートも実家も知らないばかりか、アドレスさえ交換していないのだ。そう言うと原が、そんなの早く言えばいいのに、と言ってポケットから携帯電話を出す。
「アパートは大学のすぐ裏の福寿荘103で、実家は長野市だよ。住所も言う？」
「いや、そういんじゃなくてですね……」
　皆藤は原のあっけらかんとした言葉に戸惑いながらも、せっかくなので赤外線通信で原の携帯番号とアドレスをゲットする。ついでに『福寿荘103』と『実家は長野市』を原のプロフィールに追加すると、勢いついでに血液型と生年月日もゲットした。
「ナニお前、オレのファンなの？」
　原にクスクス笑いながら問われて、皆藤は、はい、と答える。
「先輩が好きです。大好きです。先輩は俺のこと好きですか？」
　思わず直球で尋ねると、途端に原が赤くなって怒ったように唇を尖らせた。
「あのなぁ……お前、ここがどこだかわかってる？」

　拗ねたようなその言葉に、皆藤はようやくそこが休憩フロアの片隅だということを思い出す。
「こんなところで訊かれたって……答えられるかよ」
　視線を外してゴニュゴニョと言葉を濁す原の真っ赤になった耳たぶを見て、皆藤は湧き上がる歓びに震えた。それは、つまり、原も自分のことを好きだということだろうか？
「俺、決めたんです。もう絶対に先輩のこと泣かしたりしないって」
　原のことを誰よりも大切にしたくて告げると、その言葉に原が再びキョトンとした顔をする。
「オレ？　いつ泣かされたっけ？」
　憶えていないならそれでもいいかなと思ったが、問われるままに先日の体育館倉庫でのことを話すと、ようやく思い出したらしい原が『ああ！』と言って頷いた。
「そうそう、あの時は箱をズラした拍子に埃が目に入って……」
　そこまで言った原が、アッという顔をしてソロリと窺うように皆藤を見上げる。
「ご……ごめん」
　何も悪いことなどしていないのに困ったように謝られて、皆藤は開けたままだった口を閉じると、いえ、と答えた。別にいいのだ、泣かしたのでなかったのならそれで。
「とにかく、これで先輩が卒業しちゃうまでの４ヶ月間、俺はフリーになりましたので、これからは思う存分先輩の傍にいますからね」
　気を取り直して満面の笑みで言うと、原が嬉しそうに笑う。
　『４ヶ月間』
　言葉にした途端に切なくなり、目の前にある華奢な体を抱き締めようとすると、原が苦笑混じりに体を引きながら『あれ？』と言った。
「言わなかったっけ？」
　その顔と言葉に何となく含みを感じて、ちょっと身構えながら、何を、と問うと、原が、オレさ、と言いながらチロッと上目遣いに見る。
「教職取るから院に行くんだ」
「えッ？」
　媚を含んだようなその目に、皆藤は色んな意味でクラリと眩暈を覚える。だが、まだ原と一緒にいられるのだという幸福の方が何よりも勝っていたので、とりあえず諸々の苦情は腹の中に収めた。

４．『アラザン』
「はい、先輩」
　いつものように大学の休憩フロアの窓際の席で本を読んでいると、不意に目の前にピンク色のビニール袋が差し出される。可愛いレース柄がプリントされた小袋で、同色のリボンで結ばれていた。女の子が手作りのお菓子などを入れるような袋で、案の定、中には小さな銀紙の容器に入ったチョコレートが数個入っている。
「なに？　コレ」

　どうしたのかと思って尋ねると、後輩の皆藤がリボンを解きながら答えた。
「同じ専攻の女子が配ってたんです。チョコレート、好きですか？」
「ッ！」
　その言葉に久弥は驚いて目を見開く。
「お前、それってバレンタインじゃねッ？」
　いくら世事に疎い久弥でも、今日がバレンタインデーだということは知っている。そのチョコレートを他人と食べるとは何ごとか。そう言うと、皆藤は澄ました顔で、友チョコですよ、と答えた。
「でっかいペーパーバッグに同じのが何十個も入ってましたから」
「そ、そうなのか？」
　しかし、女の子が友達に友チョコを配っているのは知っているが、この『皆藤』に友チョコなんてあり得るだろうか。言っては何だが、皆藤は男の自分から見ても顔良しスタイル良し性格良しの爽やかイケメンなのである。その皆藤に友チョコなんて！
「５個入ってるから先輩に３個あげますね。どれがいいですか？」
　そのチョコレートにはそれぞれ違うトッピングがされているのを見て、皆藤が楽しそうに問う。久弥はテーブルの上に並べられたチョコレートを見ると、ちょっと引きながら、俺はいいよ、と答えた。トッピングは色鮮やかなドライフルーツを刻んだものやコーヒービーンズ、アーモンド、クルミなどで、仁丹に似た銀色のツブツブが載ったものもある。
「これって手作りだろ？」
　なんとなく手作りって怖い、と言うと、皆藤がプッと噴き出して笑う。そして、じゃあ、と言うと、小袋の中にこぼれていた銀色のツブツブを手の平に載せた。
「はい、トッピング」
　そして、そう言ってそのツブツブを久弥の上唇の上の窪みに載せると、顔を近付けてパクッと食べる。上唇ごと食べられそうになった久弥は、驚いて目を真ん丸にした。
「うわッ……！」
　皆藤がそれを見てニッと笑い、コソッと甘い声音で囁く。
「うん、美味しい」
「……ッ！」
　久弥はその言葉に思わず真っ赤になると、腕を上げて熱くなった顔を隠した。
「お前ッ……ここをどこだとッ……！」
「ははは」
　久弥の言葉に、皆藤が実に爽やかに笑う。
「先輩、意識し過ぎだって」
　自分たちのことなんて誰も見てませんよ、と言われたが、この見目の良い後輩はどこにいても目立つのだ。見られてないわけはない。
「いいから公共の場でこういうことはするな……！」
　小声でキツくお灸を据えたが、皆藤は聞いているのかいないのか。

「あ、もう１つあった」
　そう言って再び袋の中から銀色のツブツブを手の平に載せると、それを指先で摘まんだ。
「これってアラザンって言うんですよね。甘いんですよ。食べたことあります？」
　皆藤の呑気な言葉に、久弥は不機嫌な顔で、無い、と答える。皆藤はそれを聞くと、じゃあ、と言って言葉を継いだ。
「食べてみます？」
　そう言って、そのツブツブをあろうことか自分の上唇の上に載せる。久弥はびっくりして目を丸くすると、そのままの形でフリーズした。
「はい」
　皆藤が半開きにした口を動かさないようにして言いながら、久弥の方に顔を近付ける。そして、気を利かせたつもりなのか、目を閉じた。
（あ、睫毛長……）
　久弥は思わずドキドキしながら目の前にある整った顔を見詰める。思えば、こんな間近でマジマジと顔を見たのは初めてだった。
（うわッ……）
　途端に心臓がバクバクと騒ぎ出し、カァァッと耳まで熱くなる。久弥がフリーズしたまま見詰めていると、やがて皆藤が再び目を開いて笑った。
「失敗。キス出来るかと思ったのに」
　言った拍子に上唇の先に載っていたアラザンがポロッと落ちる。久弥は慌てて手を出すと、それを手の平に受けた。
「そうだ、コーヒー買って来ますね」
　皆藤はそう言うと、尻ポケットから財布を取り出しながら自販機の方へと歩いて行く。久弥はその後ろ姿を見送ると、手の平のアラザンを見下ろした。
「甘……」
　そっと口に入れると、舌の上に柔らかな甘さがフワリと広がる。初めて食べたアラザンは、甘いけれどなぜか切ない味がした。

５．『乾電池』
　追い出しコンパの帰り道。
「あ、しまった！」
　飲み屋街から少し離れた暗い夜道を肩を並べて歩いていると、不意に原がそう言って足を止めた。
「どうしたんですか、先輩？」
　先程の店に何か忘れ物でもしたのだろうかと思って問うと、原が首を横に振って、うんにゃ、と答える。
「乾電池買うの忘れた」

「乾電池？」
　健人は首を捻りながらも、コンビニ行きますか、と尋ねる。原は、う～ん、と唸ると腕組みをして言った。
「実は単２なんだよね。あるかな……」
　確かにコンビニエンスストアには売れ筋商品しか置いていないので、懐中電灯に使う単１や使い勝手の良い単３ならありそうだが単２は難しそうである。何に使うんですか、と問うと、目覚し時計、という答えが返って来る。
「ちょうど今朝止まったんだよ」
　なんでも、原の目覚し時計は年代ものらしく、電子音ではなくて内蔵されたベルを鳴らす式のものらしい。
「あれってさ、普通の時は動いてるのに、ベルが鳴る瞬間に止まるんだよな！　ズルいよなー！」
　きっとベルを鳴らす瞬簡に最も負荷がかかるので、電池の残量が足りないとそこで力尽きるのだろう。
「あと、真冬の寒い時なんかも秒針が重力に負けるみたいでさ」
　原が更に言い、健人は、へえ、と答える。秒針も上から下へ向かう時よりも、下から上へ上って行く時の方が力を使うということだろう。あまり考えたことがなかったので感心して言うと、原が腕組みを解いて道の前後を見た。
「この時間だと電気屋は無理だよな。やっぱコンビニしかないか……」
　どうやらコンビニエンスストアを当たってみるつもりらしい。しかし、既に住宅街に入ってしまっているので、生憎と見える範囲には無い。
「どうせ明日は休みなんだし、明日電気屋に行けばどうですか？」
　至極最もな意見を言うと、原が難しい顔で健人を見上げる。
「実は、教授に仕事頼まれててさぁ」
　お陰で土曜日だと言うのに、朝もはよから大学に行かなければならないのだと言う。
「俺、電子音って苦手なんだよね～。携帯のアラームで起きられるかな……」
　時刻は既に十二時を回っていて、これからすぐに風呂に入って寝ても明らかに寝不足である。
「ちなみに、何時に行くんですか？」
　健人が問うと、７時、という答えが返って来る。
「わかりました」
　健人は１つ頷くと、原の手首を掴んだ。
「じゃあ今日は俺んちに行きましょう、先輩。明日の朝は俺が起こしてあげますから」
「お前んち？」
　ちなみに健人は目覚し時計よりも早く起きる体質である。そう言うと、原が、うーん、と唸って思案顔になる。
「朝食も付けますよ」
　朝はご飯がいいですか、パンがいいですか、とダメ押しで問うと、原は暫く逡巡してから意を

決したように顔を上げた。
「メシはいい。その分、ギリギリまで寝かせてくれ」
「わかりました」
　健人は２つ返事で了解すると、原が心変わりする前にさっさと進路を変更する。ここからなら自分のアパートの方が近いので時間の節約にもなりますよ、と言うと、原は、へえ、と言って辺りをキョロキョロ見回した。
「こっちってあんまり来たことないんだよな。ちゃんと行けるかな……」
　大学への道を心配しているのだとわかり、健人は、大丈夫ですよ、と答える。
「明日の朝もちゃんと送ってあげますからね」
　そうだ、朝ご飯の代わりにサンドイッチでも作ってあげよう。仕事が大変そうだったら手伝ってもいいし。健人はそんなことを考えながら、上機嫌で原を自分のアパートへと誘導する。原が自分の部屋に泊まるのだと思うと、どうしても顔がほころんでしまう。
「いいよ。別に大学の近くなんだから１人で行けるし」
　あまり過保護にされるのは好きではないのか、原が唇を尖らせてちょっと拗ねたように言う。なんだろう、酔っている時の原は強烈に可愛い。
「お風呂、一緒に入りますか？」
　冗談交じりにお誘いをかけると、原は再びプッと頬を膨らませて怒った。
「だから子供じゃないって言ってるだろッ。風呂ぐらい１人で入れるッ」
　子供のように拗ねる原に、健人は、はいはい、と答えて笑う。だいたい、一緒に風呂に入って困るのは自分である。
「先輩、食べられないものとかありますか？」
　そっと手を差し伸べると、条件反射のように原が手を繋いで来る。
「う～ん、生野菜は苦手かなぁ。あと、内臓系も無理！」
　そういえば先程の宴会でも、モツ煮や砂肝の焼き鳥などは食べなかったような気がする。
「あとね～、あとは、え～と……」
　健人は原と手を繋いで歩きながら、笑顔でそれに相槌を打つ。原の旧式の目覚し時計と、タイミングよく力尽きてくれた乾電池にこっそりと感謝しながら。

６．『炭酸飲料』
　ふと夜中に目が覚める。喉の渇きを感じた久弥は頭の上に手を伸ばすと、コタツの上に置いてあったペットボトルを手探りで掴んだ。起き上がってフタを捻ると、プシッと小さく炭酸の抜ける音がする。途端に甘い香りがして、久弥はそれを喉に流し込んだ。
　暗闇に液体を嚥下する音がゴクッと響く。昨夜買ったジンジャーエールは程よく炭酸が抜けていて、実はあまり炭酸飲料が得意ではない久弥にとっては丁度良かった。では何故これを買ったのかというと、これで酒を割ると旨いからだ。
「ああ、そうか……」

　どうやら自分は酒を飲みながら眠ってしまったらしい。下半身はコタツの中で、体には毛布が掛けられている。頭の下にもフカフカの枕があてがわれていたらしいのを見て視線を向けると、コタツの右隣で同じ枕の半分を使って皆藤も眠っていた。
　電気は消されているので、光源はカーテンの隙間から差し込む僅かな光だけである。ようやく物の判別がつくくらいのその薄闇の中で、久弥は目を凝らして皆藤の整った顔を眺める。
「皆藤……」
　追い出しコンパの日に皆藤のアパートに泊めて貰って以来、久弥は週末のたびにここに押し掛けている。デートの時は言えよ、と言ってはあったが、皆藤は暫くはカノジョを作る気は無いらしく、大学が春休みになると『別に帰らなくてもいいじゃないですか』と言って久弥を自分のアパートに足止めした。着替えも無いし洗濯もしないと、と言うと、俺のをあげますよ、と言って未使用の下着やら服やらを出してくる。洗濯も一緒でいいですよね、と言われて久弥は帰る理由が無くなった。
「風邪ひくぞ、皆藤……」
　いくら春先でもコタツで寝るのは体に悪い。今は春休みだが、お互いにバイトがあるので体調管理は必須である。
「皆藤……」
　久弥はぐっすり眠っている後輩を見詰めると、少し躊躇ってから再び口を開いた。
「健人……」
　いつもは呼ばない下の名前で呼ぶと、ツキンと胸が甘く疼く。すると、よく眠っているように見えた皆藤が僅かに身じろいだ。
「先輩……どうしました？」
「『どうした』じゃねーよ。コタツで寝ると風邪ひくぞ」
　泊まる時はいつも狭いベッドで一緒に寝ている。最初はコタツでいいと言って断ったのだが、風邪をひくからダメだと言って強制的に寝かされたのだ。久弥が自分に掛けられていた毛布を抱えて隣の寝室に移動すると、皆藤も枕を抱えて大人しく付いて来る。ベッドに毛布と羽根布団を掛けて片側を三角に捲ってやると、皆藤は寝惚けているのか久弥の体を抱えてその上にドサッと倒れ込んだ。
「重い重い！　重いって皆藤！」
　思わず喚きながら自分の上に乗っかった体を押し退けようとすると、皆藤が膝を突いて跨る形に体を浮かす。そして片腕を久弥の腰の下にグイと入れると、グイグイ動かして久弥の体をベッドの真ん中に移動させた。
「わかったわかった。俺も寝るから上からどけって」
　降参して笑いながら言うと、皆藤が大人しく隣に移動する。そして退路を塞ぐように久弥を壁際に追いやると、首の下に腕を差し入れて抱き寄せてきた。
「俺は抱き枕か」
　初めて泊まった日の翌朝も、目が覚めると久弥はなぜか皆藤に腕枕されていた。その日から寝る時はいつもこの体勢である。別に寝易いわけではなくて、単に皆藤が当然のように腕枕してく

るからなのだが、きっとカノジョと付き合っていた頃もこんな風にして寝ていたのだろう。そう考えて、久弥はちょっとブルーになる。久弥は皆藤のことが好きだが、皆藤は自分のことを『好ましい先輩』としか思っていない。男同士なのだから当然なのだが、しかし、懐かれるのは嬉しいのだが必要以上に近付かれると体が反応してしまうので困る。今もぴったりと体がくっ付くように抱き寄せられているので、皆藤の体温に、体臭に、体が敏感に反応し始めてしまっていた。
「あ、ペットボトル持って来るの忘れた」
　久弥はわざとらしく聞こえないよう、努めて平静を装いながら言うと、ムクッとベッドの上に起き上がる。そしてゴソゴソとベッドを抜け出すと、『ついでにトイレ』と言いながら寝室を出た。用を足して再びコタツに戻り、置きっ放しだったペットボトルを掴む。そして再びフタを開けると、炭酸の抜けたジンジャーエールをひと口飲んだ。
「やばいよなぁ……」
　久弥は小さく呟くと、コタツの横に突っ立ったまま寝室の様子を盗み見る。そして布団から出ている皆藤の後頭部を見ながら、やるせない溜息を小さく吐いた。久弥も男だから肉欲が無いわけではない。だが、抱きたいのか抱かれたいのかは判らない。単純に好きだとは思うが、その先を考えると戸惑いの方が先に立つ。なのに体は勝手に反応する。
「やばいって……」
　こんなことを考えているなんて知ったら皆藤は軽蔑するだろうかと考える。だが、優しい皆藤のことだ。もしかしたら自分のことを思い遣って適当に付き合ってくれるかもしれない。中坊みたいに一緒に触りっこして出し合ったら結構すっきりして、このモヤモヤも消えるかもしれないとも考える。
「先輩……？」
　寝ているのかと思ったらまだ起きていたらしい皆藤が、なかなか戻って来ない久弥を心配してか、こちらを向く。
「おう……」
　久弥は反射的に答えると、残りのジンジャーエールをひと息に飲み干した。
「今行く」
　空になったペットボトルをコタツの上に置いて視線を戻すと、薄闇の中で皆藤が自分に向かって手を差し出すのが見える。久弥は諦めの溜息をつくと、裁きを受ける罪人のような心持ちでゆっくりと寝室に向かった。

７．『金髪』

　『ごめん、行けなくなった』
　朝まではいつもの楽しい金曜日だった。いや、午後のティータイムまでは普通だった筈である。一行だけの素っ気ないメールで原が週末の『お泊まり』をキャンセルしてきたのは、今日の夕飯は何を作ってあげようかと考えながら買い物カゴ片手にスーパーの中を歩いている時だった。
「えっ」

　何かあったのだろうかと思い、理由を問おうとした皆藤は、しかし中途でメールを打つ手を止める。原にだって付き合いがあるし、急な用事もあるだろう。それに、今日はダメでも明日には来られるかもしれない。以前にも教授の急な手伝いが入ったと言って土曜日の昼近くにヘロヘロになってやって来たことがあった。
「浮気しないでよ、先輩」
　皆藤は携帯電話に向かって呟くと、尻ポケットにしまう。がっかりして思わず深い溜息が漏れた。

　好きだと告白したのは付き合っていたカノジョと別れた後だ。しかし、原から好きだと言われたことは無い。呼べばいつでも泊まりに来るし、自分の腕枕で眠ってくれるがそこまでだ。
（好かれている……とは思う）
　スヤスヤと安らかな寝息をたてている唇に、我慢出来ずに口付けてしまったのは原が二度目に泊まりに来た時だ。以来、一度一線を越えてしまった皆藤はもう何度も原に口付けている。さすがに舌までは入れていないが、その我慢もそろそろ限界に来ていた。
「そういえば……」
　自分のことだけでいっぱいいっぱいで確認していなかったのだが、原には恋人はいないのだろうかとふと思う。休憩室ではいつも一人だし、毎週末のように遊びに来るが、学内ではなく地元という可能性もある。そのことに気付いた皆藤は腹の辺りがヒヤとした。
「ま、まさかね……」
　しかし、いったん芽生えてしまった不安はどんどんムクムク大きくなる。
「いかんいかん……」
　皆藤は胸中に湧き上がった黒雲を手をパタパタ振って追い払うと、翌日の食材も追加してレジへと向かった。

　『ごめん、今日も無理』
　相変わらずの素っ気ない文章に、メールを開いた皆藤はドドンと落ち込む。途端に、一度は払拭した筈の黒雲がムクムクと頭をもたげて来た。
「そうだ、買い物……」
　食材は昨日買って来たが、１リットルのパック牛乳がもう半分くらいになっていた筈である。
「それに、卵も半パックしかないし、食パン……はまだ１斤あるけど、そうだ、マヨネーズがそろそろ……」
　そのどれもが今日買わなければならないものではなかったが、皆藤は急いで財布を掴む。
「そういえば……」
　原が旨いと言っていた牛乳を置いているコンビニエンスストアは原のアパート近くにしかない。皆藤は『仕方ない』と自分に嘯きながら、大急ぎで玄関へと向かった。

「あ……」
　目的の店で原御用達の牛乳を購入し、大回りして原のアパート前を通りかかった皆藤は、福寿荘１０３号室のドアが開いているのを見て立ち止まる。
（先輩？）
　しかし、ドアが締まる瞬間に見えたのは背中の中程まである美しい金髪だった。
（え……？）
　そのドアがパタンと閉まった瞬間、思わず呆然としていた皆藤はハッとして我に返る。
（えええええッ……？）
　朝の８時に金髪美人が原のアパートに入って行く理由がわからない。混乱しながらも大急ぎで電話をすると、８回ほどコールしてから原が出た。
　『悪い、今取り込んでるから後で掛け直す』
　原は冷たい声音でそう言うと、ブチッと一方的に通話を切る。皆藤は再び呆然となると、単調な音を繰り返している携帯電話を見下ろした。
（どどどどうしよう……）
　今朝方の不安が急に現実味を帯びて来る。もしかすると、田舎にいるカノジョが急に会いに来たのかもしれない。皆藤は先程の原のイライラしたような口調を思い出し、目の前が真っ暗になる。今の原にとっては自分は邪魔なだけの存在なのだと思い、酷くショックを受けた。
「失敗した……」
　なぜもっと早くに恋人の存在を確認しておかなかったのだろうかと皆藤は悔やむ。しかし、声を掛けた切っ掛けは本当に偶然で、そして原がニコリと笑った瞬間に自分は恋に落ちていたのだ。そんな冷静な余裕など無かった。
　どこをどう歩いたのかわからないが自分のアパートに辿り着いた皆藤は、部屋に入ってベッドの上に倒れ込む。枕のいつも原が寝ている辺りに顔を押し付けて息を吸うと、微かに原の匂いがした……ような気がした。
「先輩……」
　もっと早くに押し倒していれば状況は変わっていただろうかと考える。いや、カノジョがいるということは原はノンケなわけだから、状況はもっと悪くなっていたかもしれない。だとすると、自分はこのまま卒業するまで『イイ後輩』でいなければならないのだろうか。胸の内にどす黒い欲望を抱えて？
「そうか……」
　告白したのにＯＫが来なかったのは、そういうことだったのかと思い至る。
「はは……」
　思わず力無く笑ったその時、携帯電話が再び着信を告げた。
「はい……」
　無意識に電話に出て耳に当てると、『皆藤か？』と聞き慣れた声が尋ねる。
　『いや～、妹が上京して来たんだけど、あのバカ、ゆうべ来る筈が今朝になってようやく来て

さあ！』
「……へ？」
　暫し呆然としていた皆藤は、言葉の意味がようやくジワジワと脳に滲みてきて我に返る。
「妹？　金髪の？」
　思わず尋ねると、受話器の向こうで原が『あれ、なんで知ってんだ？』と不思議そうに答えた。
　『あの不良、昨夜は不良仲間と一緒に一晩中遊び歩いてたみたいでさあ』
　そして、カラオケ屋で夜明かしした妹は明るくなってからタクシーを拾って来たらしい。もちろん着払いでだ。
　『まったく、自分が女だっていう自覚があるのかね』
　受話器の向こうで原がプリプリ怒りながら言い、それを聞いた皆藤は先程の怒り声も自分にではなく妹に怒っていたのだとわかってホッとした。
「まあ、無事だったんだから良かったじゃないですか」
　そんな寛大な言葉さえスルスルと出る。すると原が一瞬無言になってから言った。
　『ちぇ、オレの楽しい週末が台無しだよ』
　不満そうな呟きに、皆藤は思わず笑みを洩らす。そして受話器を握り締めたまま目を伏せると、心を籠めて囁いた。
「好きですよ、先輩」
　『う……え……？』
　途端に受話器の向こうで原がシドロモドロになる。やがてゴホンと咳払いすると、あー、と言ってから言葉を継いだ。
　『あれだ。明日の午後には行けると思うから、そしたら何か旨いもんでも食お』
　原の言葉に皆藤は微笑みながら、はい、と答える。そして、明日会ったら真っ先に恋人の存在を確認しようと心に決めた。もしいたとしても諦めることなど出来そうにないなあ、と胸の内で思いながら。

８．『白熊』
「う～～～っす」
　日曜日の夕刻に皆藤のアパートを訪れる。手に持っていたコンビニエンスストアのビニール袋をホイと目の前に差し出すと、夕食の仕度をしていた皆藤が嬉しそうに笑った。
「デザートですか？」
　ビニール袋の中身を問われた久弥は、そうそう、と答える。
「この間からＣＭでやってるみたいでさ、妹が旨いって言ってたから買って来た」
　袋の中には箱入りのアイスが入っている。そう言うと、皆藤が再びフライパンに視線を戻しながら笑った。
「それは期待出来ますね。女の子の舌は確かだから」

　妹が長野の実家から上京して来たのは昨日のことだ。正確には金曜日の夜だったのだが、その晩は悪友たちと遊び歩き、久弥のアパートに来たのは土曜日の朝だった。携帯電話で居場所はわかっていても心配で眠れぬ夜を過ごした久弥は、妹が現れた途端に雷を落とす。そこへ運悪く電話して来たのが皆藤だった。
（いや、『運良く』か……）
　電話に出た久弥の声音が明らかに怒りを含んでいたので妹が来たと聞いても会いたがりはしなかったが、もし普通の状態だったらきっと会いたがったに違いない。そう考えて久弥は胸を撫で下ろす。出来れば皆藤には妹を会わせたくなかった。
「今日は何だ？」
　ジュージューとイイ音をさせているフライパンを覗き込むと、皆藤が、パスタですよ、と答える。飯を炊くのが面倒だったので、これにソテーした野菜とチキンの香草焼きを載せるのだと言う。
「旨そうだな」
　聞いただけで生唾が溢れてくる。思わずウキウキして言うと、皆藤が目を細めて笑った。
「すぐに出来ますから、テレビでも観て待っててください。それとも風呂に入っちゃいますか？」
　皆藤のアパートに泊まる時は、いつも風呂も借りている。脱衣所にある下着やタオルを収納する引き出しにはいつの間にか久弥の場所が出来、皆藤が用意した下着やパジャマが入っていた。ちなみに、パジャマは皆藤とお揃いだ。他人が見たらどう思うかちょっと不安ではあるが、久弥の他には誰も泊まりに来ないし、密かに嬉しかったりしたのでそこにはツッ込まずにいる。
「風呂は後でいいかな。腹減ったし」
　それに、アイスはやっぱり風呂上がりに限る。そう言うと、皆藤が楽しそうに笑った。その笑顔に久弥の胸がキュゥッと締め付けられたようになる。皆藤が好きだ、誰にも取られたくない、そう思いながらも、そんな権利は自分には無いこともわかっている。皆藤が誰かを好きになったら、その瞬間から自分はこの場所をその『誰か』に明け渡さねばならないのだ。
「はい、出来ましたよ」
　皆藤が言いながら、皿に盛り分けたパスタの周りにソテーした野菜を彩りよく盛りつける。
「うわ、旨そう〜〜〜！」
　久弥は皆藤の手元を覗き込みながら言うと、料理の匂いに混じって微かに漂う甘い香をこっそりと吸い込んだ。嗅ぎ慣れたコロンの中に、一緒に寝起きするようになって知った皆藤の体臭を嗅ぎ分ける。途端に下腹部がズクッと痺れ、久弥は慌てて離れると、冷蔵庫のドアを開けた。
「お茶でいいよな」
　中から緑茶の２リットル入りペットボトルを取り出し、食器棚からコップを２つ出して居間に運ぶ。どうやら昨日の内に衣替えしたらしく、コタツはすっかり布団を剥がれて普通の座卓になっていた。

　皆藤謹製のパスタを食べ終え、皆藤が用意してくれた風呂に入る。居間に戻ると、食器を洗い終えた皆藤が冷蔵庫からアイスを持って来てくれた。
「あれ、コレって『白くま』ですか？」
　皆藤がアイスの箱を眺めながら言い、実は適当に選んで来た久弥は『白熊？』と問い返す。
「確か、鹿児島かどこかの名物ですよね」
　ちょっとしたブームになったので、今はカップ入りのものや箱入りが普通に売られているらしい。
「へえ」
　皆藤が箱を開けて６本入りの１本を久弥に差し出す。そして自分の分も取ると、残りを冷凍庫にしまいに行った。
「本物は練乳をかけたかき氷に小豆やフルーツをトッピングしたものらしいんですけど」
　皆藤はそう言うと、小包装を剥きながら嬉しそうに言う。
「これはアイスなんですね」
　皆藤の言う『アイス』とはラクトアイスの意味らしい。
「『ナンチャッテ』ってヤツか？」
　同じように小包装からアイスを取り出しながら皮肉のように言うと、アイスを一口齧った皆藤が言う。
「でも、俺はかき氷が苦手なんで、アイスで良かったです」
　一口齧った途端にパインの甘酸っぱさと小豆の皮のこそっぱさが口中に広がる。その味や舌触りをどう表現したらいいのか迷っていると、皆藤がニコニコと言った。
「旨いですね」
「そうか、『ナンチャッテ』でも旨いか」
　呟くように言うと、皆藤が、そりゃそうですよ、と答えて笑う。
「だって、本物かどうかよりも旨いかどうかの方が重要でしょ？」
　反対に言えば、旨ければ何でも構わないということらしい。
「そうか……」
　久弥はその言葉に思わずホッとすると、小さく笑みを返した。

　自分のことを『偽者』だと思うようになったのは妹が生まれた時だ。その容姿も相まって、娘が欲しかった母親から女の子の服を着せられ、溺愛されていた久弥は、妹が生まれた途端に髪を短く切られ、男の子の服を着せられた。そして、蕩けそうな顔で妹をあやしている母親を見ながら子供心に思ったのだ。ああ、もう自分は要らないのだ、と。『本物』が生まれたから『偽者』は要らなくなったのだ、と。
　皆藤を妹に会わせたくなかったのもその為だ。久弥の妹は高校の頃から読者モデルに選ばれるような美人で、自分に好意を寄せている皆藤が自分によく似た、しかも自分よりも美人の妹を見たら一目で気に入ると思ったからだ。だって、誰だって偽者よりも本物の方がいいに決まっている。皆藤が女のような自分の容姿を気に入っていたとしても、本物の女である妹に敵うわけは

ないのだ。
　だが、皆藤は偽者でも構わないと言ってくれた。それよりも自分にとって美味しいかどうかが重要だと言ってくれた。食べ物と恋愛では全く違うことはわかっているが、その価値観を久弥は嬉しく思う。なんとなく、ありのままの自分でいていいのだと言って貰えたようで、思わず小さく笑うと言った。
「これ、旨いな」
　思わずエールを送りたくて言うと、皆藤が、そうですね、と答えながら立ち上がる。どうやらもう１本食べる気らしい皆藤に、先輩ももう１本どうですか、と問われた久弥は、二カッと笑って答えた。
「俺はビールにするワ」
　そろそろ酒を飲みたくて言うと、皆藤が冷凍庫を開けようとしていた手を止める。そして同じようにニカッと笑うと、賛成です、と答えながら冷蔵庫のドアを開けた。

９．『夏の星座』
「暑い……！」
　酒の酔いを醒まそうと思ったのか、原が不意に立ち上がって窓を開ける。６月も下旬になると昼間は初夏の陽気だが、さすがに夜はまだ窓から吹き込む風は涼しかった。
「お、星が綺麗だぞ」
　健人の住むアパートにベランダは無いので窓から空を見上げて原が言う。つられて窓辺に歩み寄った健人は、同じように夜空を見上げて目を細めた。
「本当だ、綺麗ですね」
　夜空から原の横顔に視線を移すと、黒目勝ちの瞳に向かいのアパートの灯りが映って濡れたように輝いている。夜空の星々よりも原の瞳の方が何倍も綺麗だと思いながら半ばうっとりと眺めていると、原が星空を見上げながらポツリと言った。
「『夏の大三角形』って知ってるか？」
「あまり詳しくはないですけど、あの辺ですよね」
　夏の星座を授業で習った憶えは無かったが、教材の付録に付いていた星座盤を思い出しながら天頂付近を指差すと、原が、そうそう、と答えて言う。
「あれってさ、織姫と彦星なんだぜ。知ってたか？」
「へえ？」
　星にはあまり関心の無い健人も、七夕の夜にだけ逢うことを許された恋人同士の伝説は知っている。では三角形のもう一つは何だろうかと思っていると、その疑問に答えるように原が言った。
「もう一つの星は白鳥座のデネブだ。いつも天の川の中から恋人同士を羨ましそうに眺めてるデネブ」
　オレみたいだろ、と同意を求められた健人は首を傾げて原を見る。原は小柄だが、顔も綺麗だ

しスタイルもいい。きっと女の子にもモテるであろう原が恋人たちを羨む理由は無いと思うが、もし原にカノジョでもいて遠距離恋愛をしているのならわかる。
「先輩は……カノジョとかっているんですか？」
　先日の疑惑は『妹』ということで解決したが、反応を伺いながら尋ねると、原はちょっと驚いたように健人を見上げてからフッと小さく笑った。
「お前は彦星だねえ、皆藤」
「……？」
　健人は意味がわからずに原を見詰める。原は再び小さく笑うと、視線を夜空に戻して言った。
「言ったろ？　オレはデネブだ。織姫にもなれないし、彦星にもなれない」
「……？」
　どうやらカノジョはいないようだが、原の言葉は相変わらず謎掛けのようで、諦めたような寂しげな笑みの理由が気になった健人は尋ねた。
「先輩はどちらになりたいんですか？」
　何か糸口を見つけたくて尋ねたのだが、途端に原の瞳が揺れる。そして、再び健人に視線を向けると、口角を横に引いてニッと笑った。
「なにお前、オレに告らせたいの？」
「……？」
　揶揄するような言葉とは裏腹に、その瞳は笑んではいなくて、健人はジッとその目を見詰める。
「先輩？」
　いつものように手を伸ばして艶やかな髪を指先で掬おうとすると、原がスイと体を引いて、触るなよ、と低く言った。
「お前に触られると、困る……」
「……困る？」
　今までも髪に触れようとする度にそれとなく体を引いてかわされていたが、はっきりと言葉で拒絶されたのは初めてで、てっきりイヤがられたと思った皆藤は『困る』と言われて、それはどういうことだろうかと考える。すると原が再び言った。
「お前の匂いとか……体温とか……マジ困るんだ……」
「……？」
　それは自分とて同じだ。原が傍に来るだけで体が反応してしまい、困った状態になったことなど多々ある。そう考えた健人は、ちょっと驚いて原を見る。視線を逸らして俯いた目元が薄っすらと赤らんでいるのを見て、心臓がドキドキと騒ぎ出した。それは、原も自分のことを意識してくれているということだろうか？
「俺も同じですよ。先輩の匂いとか、体温とか感じるとマジ困ります」
「……？」
　原が言葉の意味を問うように健人を見る。健人はジッと見返すと、原が誤解しないように注意深く言った。

「先輩が好きだって何度も言いましたけど、憶えてますか？」
「だってアレは……」
　先輩として、と言い掛けて、原が言葉を詰まらせる。健人は思わず苦笑した。
「そんなわけないでしょ」
　そしてそう言うと、スイと屈み込んでツンと上向いた唇にチュッと小さく音をたてて口付ける。
「ちゃんと好きですよ。大好きです」
　健人の言葉に、驚いたように見開かれていた原の瞳が戸惑うように揺れる。健人は再び屈み込むと、薄く開かれたままの赤い唇にもう一度口付けた。今度はもっと長く原の唇の感触を確かめてから、チュッと軽く吸ってゆっくりと離れる。原はまだ目を見開いたまま、驚いたように健人を見上げていた。
「先輩は？」
　そっと囁くように尋ねると、やっと原が瞬きする。
「俺のこと、好き？」
　祈るような気持ちで尋ねると、その瞳がハッと我に返ったように見開かれた。
「す……」
　原が一言だけ発して、カアッと耳まで赤くなる。それを見て、つられて健人もカアッと全身が熱くなった。
「好き……に決まってんだろ」
　原が俯きながらぶっきら棒に言い、窓の下の壁をつま先でゴツゴツと蹴る。
「知ってるくせに……ズルイ」
　拗ねたようなその言葉に、健人はホッとして笑んだ。
「知ってましたけどね」
　そしてそう言うと、手を伸ばして華奢な体を抱き締める。
「言葉にして貰わないと不安なこともあるんです」
　好かれていることはわかっていても、それがどんな『好き』かは聞かなければわからない。と同時に、原のことも不安にさせていたのだと気付き、愛しさに胸が熱くなった。
「好きですよ、先輩……大好きです」
　思いの丈を籠めて告げると、原が背中に手を回して来る。原の洗いたての髪や耳の後ろに鼻先を擦り寄せると甘い香りがして、途端に体が反応した。
「……先輩を貰ってもいいですか」
　耳元で囁くように問うと、原の体がピクリと震える。嫌なのだろうかと思って伺うと、視線が合った途端に恥ずかしそうな困ったような何とも複雑な顔で笑った。
「いや……オレ、そういう経験ってあんま無くてさ……どうすんのかもわかんないし……その」
　ボソボソと言い辛そうに言うその顔があまりにも可愛くて、もっと別の原始的な衝動が頭をもたげる。健人はその情動に突き動かされるように再び屈み込むと、まだ何か言おうとしている唇を自分のそれで塞いだ。

１０．『永久歯』
　初恋は幼稚園の時だ。相手は隣家の『お兄さん』で、毎朝大学に向かう姿を窓からボーっと眺めていた。七五三のお祝いの時に一緒に写真を撮ろうと誘われたのだが、ちょうど永久歯に生え換わる時期で前歯が無かった久弥は恥ずかしくて断ってしまった。今でもその時のことを思い出すと悔やまれる。
　次に恋をしたのは小学六年生の時で、相手は新卒の教師だった。同性しか恋愛対象として見られないことに気付いたのもこの時期で、やはり見ているだけだった恋は卒業と共に終わった。
　三度目の恋は大学の後輩で、相変わらず遠くから見ているだけだったのだが、ひょんなことから声を掛けられ、好きだと言われた。それが皆藤である。

「う……ん」
　ベッドに横たえられ、熱く張り詰めた屹立を手の平でゆるゆるとシゴかれる。胸の尖りを愛撫していた手がおもむろに下方に伸ばされるのを感じ、久弥は慌てて身じろいだ。
「あ、こら」
　誰にも触られたことのない場所を探られて焦る。
「皆藤、皆藤やだ」
　制止しようとしても、声は甘えるように蕩けてしまい。
「本当にイヤなの？」
　胸の尖りを唇で啄ばんでいた皆藤が顔を上げて問う。男のくせにあっちもこっちも感じて堪らない久弥は恥ずかしさに死にそうになった。
「だって、恥ずかしいだろ」
　拗ねたように口を尖らせて言うと、皆藤が『ここは平気なのに？』と問いながら手の平で愛撫していた屹立を熱い口中に含む。熱い舌で包まれ、喉の奥まで呑み込まれて、久弥はアッと声を上げてのけぞった。
「んんッ……あッ」
　堪らずに上下に揺れる頭を押さえて指で髪を掻き回すと、不意に両足を抱え上げられて顕わになった後腔に指先をあてがわれる。
「んッ……！」
　ゆっくりと体内に入って来る感触に、久弥はギュッと目を閉じて息を詰めた。
「皆藤……あッ」
　どうしたらいいのかわからなくて必死に名を呼ぶと、皆藤が動きを止めて言う。
「健人って呼んで、先輩」
「何を呑気なことを……あッ」
　再び進攻を開始した指が狭い入口を解すように動き出す。
「力抜いて、先輩」

　抜き挿しされていた指が再び引き抜かれるのを感じ、久弥はその先を予想して焦った。
「無理だって皆藤……あッ！」
「たけひと」
　皆藤が甘く囁きながら、指の本数を増やして再びゆっくりと侵入して来る。
「健人健人ッ、あッ！」
　久弥は夢中で名を呼びながら、その圧迫感に耐えた。
「あぁッ、あぁッ、はぁッ、あぁッ」
　後腔を丹念に解していく指の淫らな動きにゾクリと背筋が震える。やがて頭の中が真っ白に蕩けて何が何だかわからなくなった頃、引き抜かれた指の代わりにもっと質量のある熱いものが侵入して来て、咄嗟に声を上げそうになった久弥は夢中で皆藤の背中にしがみ付いた。

「何考えてるんですか、先輩」
　嵐のような時間が去り、横たわったベッドの上でぼんやり窓の外を眺めていると皆藤が問う。四角い窓枠の下方に向かいのアパートの屋根が少しだけ見えていて、その上に夏の星座が先程より少しだけ角度を変えて光っていた。
「や、なんかさ……」
　皆藤が背後からスルリと腕を回して柔らかく抱き締めて来る。
「こういう風になれて凄く幸せだなーって思ったんだけどさ……」
　久弥はそう言うと、自分を抱き締める手を掴んで胸前で抱き締めた。
「その幸せもあと一年なんだなーって思ったら、なんかね……」
　寂しい、という言葉を飲み込むと、グッと胸が苦しくなる。涙ぐみそうになって慌てて笑うと、自分を抱き締める腕に力が籠もった。
「それって、一年したら別れるってことですか」
　皆藤が久弥のうなじに顔を伏せて少しだけくぐもった声で問う。
「え、だって……」
　自分は大学院に進んだが、皆藤は今年で卒業である。就職先が遠ければ引っ越さなければならないし、未来に『結婚』という目標があるならともかく、体だけの繋がりしかない男同士に遠距離恋愛など続くわけはないし、する意味も無い。そんなことをツラツラ考えながら黙っていると、皆藤が再びくぐもった声で言った。
「俺ね、今まで何人かの子と付き合ったけど、付き合うのも別れるのもいつも女の子からで……」
「へえ？」
　人気者の皆藤が女の子から告白されるのはわかるが、別れる時も相手からと聞いて意外に思う。
「恋愛に淡泊なんだと友達には言われました。実際、嫉妬とかもしたこと無かったし……」
　ああそれで、と久弥は得心する。だから女の子たちは愛されていないと気付いて離れて行った

のだ。
「でも、大学に入学してすぐの新入生オリエンテーションで、受付に凄く綺麗な人がいて……」
　皆藤の話は続く。
「その人の周りだけがパアッと光り輝いて見えて……一目惚れでした」
　同じ日に受付をしていた久弥は、そんな美人がいただろうかと記憶を辿る。
「名前はすぐにわかったんですけど、相手は上級生だし……だから毎日用も無いのに休憩室の前を通っては、窓際の席で本を読む後ろ姿を見てました」
「……ッ？」
　そこに至ってようやく久弥は皆藤の言う『美人』が誰かに気付く。
「あの日、間違えて甘いコーヒーのボタンを押してしまった時、これは臆病な自分に神様がくれたチャンスに違いないと思ったんです」
　『先輩、甘いコーヒーって飲めますか』
　久弥は皆藤が初めて声を掛けて来た時のことを思い出す。
「ニコッと笑った先輩は最高に可愛くて、すぐに夢中になりました」
　それはこっちとて同じだ。にっこりと微笑んだ皆藤は最高にハンサムで、そして久弥も夢中になった。
「いつも傍にいたくて、喜んで欲しくて笑いかけて欲しくて……正直、自分の中にこんな感情があるなんて知りませんでした」
　そして、皆藤は初めて彼女たちの気持ちがわかったのだと言う。
「人を本気で好きになるって、こんなにも不安になるものなんですね」
「皆藤……」
　そして、今皆藤を不安にさせているのは自分だ。そっと体を反して振り向くと、皆藤の真剣な眼差しとぶつかる。久弥はもう一度恋人の名を呼んだ。
「健人」
　そして、そっと唇に口付ける。
「一緒に考えよ……出来るだけ一緒にいられる方法を、二人で」
　久弥の言葉に、一瞬目を見開いた皆藤がフワリと微笑む。その柔らかな眼差しに、久弥もフワリと微笑んだ。
「名前で呼んでもいいですか、先輩」
　甘く尋ねながら再びのし掛かられて、久弥は思わず赤くなる。
「二人の時だけだぞ」
　偉そうなその言葉も、しかし肌を合わせただけで甘い吐息に代わってしまう。久弥は照れ隠しに笑うと、自分から皆藤を引き寄せて口付けた。

１１．
　心地よい眠りから浮上する。背中にぴったり寄り添う熱と、自分の体を抱き締めている腕に昨夜の記憶が蘇る。健人はいつも丁寧で優しいが、昨日は久し振りだったせいか少しだけ激しくて、こちらも２度もイかされてしまった。
　気怠い体とじんわりとした後腔の熱に半覚醒の頭で幸せを噛み締めていると、そこへ無粋なドアチャイムの音がピンポンと鳴った。
「誰だよ、日曜の朝に」
　ネットで購入したものはないし、疎遠にしている実家から宅配便が送られて来ることも無い。自分のアパートを知っているのは背後から抱きついている健人だけなので、大学の誰かが訪ねて来たとも考えられない。残るは有料テレビ局か新聞か宗教の勧誘であろうと推測し、居留守を決め込んで再び目を閉じたその時、再びドアチャイムがピンポンと鳴らされた。
　ピンポン、ピンポン、ピンポーン。
「誰……来客？」
　ドアチャイムの音で目が覚めたらしい健人が、首筋に鼻先を押し付けながらくぐもった声で尋ねる。こんな時だが、寝起きの掠れ声がメチャメチャ色っぽくてムラッとする。
　ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポーン。
　来訪者は諦める気は無いらしく、そろそろ近所迷惑になりつつある。
「しつこいからテレビ局だろ、断って来るから寝てろ」
　来客が来たとわかっているのに胸の飾りをいじり始めた手を残念に思いながら掴んで退かし、起き上がってベッド脇の床上に落ちている服を拾うと、とりあえずＧパンを穿いてＴシャツを頭から被りながら玄関へと向かった。
「はいはい、どちら様。ウチはテレビ無いし新聞はネットだし宗教は浄土真宗だよ」
　言いながらドアの鍵を開けると、ドアノブを回すより早くドアが勢いよく外側に開く。
「何言ってんの、ウチは般若心経でしょ」
　相手は言いながら入って来ると、さっさと靴を脱いで上がり始めた。
「ユカッ？？」
「おはよう、おにいちゃん。とりあえず寝かせて」
　その足がまっすぐ寝室に向かうのに気付き、久弥は慌てて妹の手首を掴む。
「ちょっと待てッ、寝室はダメだ」
「……何でよ」
　一瞬の沈黙の後、ユカがこちらを見て尋ねる。その目が次の瞬間、文字通り『キラッ』と光った。
「カノジョッ？　マジか！」
　喜々として寝室に向かおうとする妹の手首を久弥は必死に掴んで引き留める。
「違う、カノジョじゃない」

「ならいいじゃない！」
　ユカは久弥の手を軽々と振り払ってズカズカと寝室に向かうと、開けっ放しの寝室に一歩入ったところでピタリと止まった。
「うそ……」
　見られた。
　久弥はその場でがっくりと膝を突く。自分のベッドに全裸の男が寝ているのだ。言い訳のしようもない。しかし、ユカの次の言葉は予想とは違った。
「なにこのイケメン……メチャメチャ好みなんだけど……！」
「……え？」
　一瞬、言葉の意味を掴み損ねる。自分の兄が、よりによって男をベッドに引き入れていたのだ。軽蔑か嫌悪か、いずれにしても罵られることを予測していただけに肩透かしを食らったような気になる。しかし、言葉の意味を理解した途端にサアッと血の気が引くのを感じた。
「誰これゲーノージンッ？　なんでここにいるのッ？」
　あまりのショックに動くことすらできずにいる久弥を振り返り、ユカが幾分声をひそめながらも喜々として尋ねる。久弥は額に冷たい汗を感じながら呆然と答えた。
「だ……大学の後輩で……」
　つい、そう答えてしまったことを、久弥は次の瞬間に死ぬほど悔いる。
「マジか！　やった！　紹介して！」
「え……」
　一瞬、脳が言葉の意味を理解することを拒否する。ユカに？　健人を？
「だ……だめだ」
　ようやく絞り出した声の語尾が力なく震える。
「なんでよ？　大学の後輩なんでしょ？」
　後輩だが、単なる後輩ではない。
「おにいちゃんが家に泊めるくらいなんだからイイ人なんでしょ？」
　『イイ人』だが、意味合いが大きく違う。
「変な男に引っかかるよりもいいと思わない？」
　思うが、健人だけはダメだった。
「とにかく今日は帰ってくれ」
　よろめきながらも立ち上がって歩み寄り、手首を掴んで玄関まで引き戻そうとすると、ユカが足を踏ん張って抵抗する。
「痛い！」
　それほど強く引っ張ったつもりはなかったのだが、大きな声に思わず力を緩めると、ユカはその隙にサッと手を引き抜き、パッと身を翻して寝室に駆け込んだ。
「ユカ！」
「イケメンさん、隣に入れて～」
　言うなり毛布の端をヒョイとめくり、スルリと健人の隣に滑り込む。眠っている健人が無意識

に妹の体を抱き寄せたのを見て、久弥の中で何かが切れた。
「健人！」
「え……先輩？」
　久弥の叫び声に近い呼び声に、健人が目を覚ましてこちらを見る。そして、己が抱き締めているものを確認すると、ちょっと驚いたように目を見開いた。
「あれ……先輩が２人？」
　そうなのだ、久弥と妹はとてもよく似ている。特に今日は金髪のウィッグを付けていないので殊更に似ているはずだった。
「……殴るぞ」
　今すぐにでも寝ぼけたその頭を殴ってやろうとこぶしを振り上げると、それを見た健人がハッとしたように抱き締めていた腕を離して飛び起きる。
「うわ〜お」
　ユカが全裸の健人の股間を見て感嘆の声を上げる。
「イケメンさん、裸族なの？　素敵〜」
　語尾にハートマークまで見えそうなユカの言葉に、健人はようやく股間を手で隠したが、いかんせん朝なので隠しきれていなかった。
「誰？」
　訝し気な声音に、久弥は足元に落ちていた服を健人の股間部分に向かってバサリと投げながら答える。
「……妹」
「あ、へえ？」
　久弥の言葉に、途端に健人の顔から微かにあった警戒の色が解けた。久弥に妹がいることは知っているので、すぐに理解したらしい。
「また朝帰りなのか？」
　面白そうにそう言うと、手を伸ばしてユカの頭を小さい子にするようにポンポンと撫でてから、下着とズボンを掴んで部屋を出て行った。
「余裕〜」
　他人に股間を見られてもさして動じた風もない健人の後ろ姿を見送ってから、ユカがニヤニヤ顔で言う。すぐに浴室のドアが閉まる音がして、シャワーの水音に代わった。
「お尻の形も超好み」
　私も一緒にシャワー浴びて来ようかな〜、という本気なのか冗談なのかわからない言葉に、久弥のこめかみで再び何かがブチッと切れる。
「お前なあ！　嫁入り前なんだからいい加減にしろよ！」
　もっと自分を大切にしろと声を荒げたのだが、聞こえたのかどうなのか。
「背も高いし、足も長いし、細身なのにお腹割れてるし、声も良かった」
　ユカはうっとりとした顔でそう言うと、目をキラキラさせながら久弥を見上げた。
「ねね、性格は？」

「ユカ！」
「わかってるよお」
　オトンみたい、と言われて脱力感に襲われる。優しいかと問われて、少し迷ってから渋々、優しいよ、と答えた。
「優しいのか～」
　まさかこんな近くにこんな好物件がいるなんて、というユカの言葉に久弥の胃袋がギュッと掴まれたようになる。そうだ、ユカは『本物』なのだ。望めば何でも手に入るのだ。細い肩も柔らかな胸も、腰のくびれも丸みを帯びた尻も、何もかもが『偽物』の自分とは違う。そして、何よりユカには『未来』があった。健人と結婚をして家庭を作るという未来が。
「おにいちゃん？」
　絶望感で呆然となっていた久弥の耳に、ユカの訝し気な声が届く。それでも健人だけは諦めたくなくて、何か言わなければと口を開きかけたその時、不意に何かが頬に触れた。
「……？」
　反射的に払うと、なぜか指先が少しだけ濡れる。その指先を不思議に思いながら眺めていると、不意に背後から力強い両腕でグイと抱き締められた。
「朝食はフレンチトーストでいいですか、先輩？」
　耳元で甘い声がして、頬にチュッと音を立てて口付けられる。
「バッ……！」
　慌てて身を捩って逃れようとすると、逆にグイと力任せに抱き寄せられた。
「今さら隠そうとしても無駄ですよ。ベッドに全裸の男が寝ていたらすぐにわかるでしょう」
　ねえ、とユカに向かって尋ね、次の瞬間、ユカの目が大きく見開かれる。
「またか！」
　そして、大声でひと言そう言うと、ベッドの上でぐったりと脱力して目を閉じた。
「もう慣れたと思ってたけど、久し振りだとショックデカいわ～」
「え？」
　何が久し振りでショックを受けたと言うのだろうかと、久弥は思わず首を捻る。
「昔からそうだったのよ。私の周りにいる大人たちはみ～んなおにいちゃんのことが大好きで」
　ユカはそう言うと、『おにいちゃんはかわいかった』『おにいちゃんはいい子だった』『ユカもおにいちゃん似だから美人になるぞ～』と叔父さんだか誰だかの口真似をする。だが、言っては何だが天真爛漫で華やかなユカと違い、自分は子供の頃から根暗で万人に好かれるタイプではない。
「私の小さい頃のアルバムなんて観たことある？　どの服もみんなおにいちゃんのお古だから、いちいちおにいちゃんと見比べられて」
　母親所蔵であろうアルバムを観たことはないが、ユカのことは毎日見ていたので知っている。久弥のお気に入りだったワンピースやリボンを付けたユカは本物のお姫様のように可愛かった。が、その洋服たちもユカにとっては『お古』なのだと知って複雑な気持ちになる。
「まあ、確かにおにいちゃんの方が似合ってたんだけどね」

　ユカが久弥と同じ顔であっけらかんと言う。そもそも兄が女ものの服を着ていたことは不思議に思わなかったのだろうかと思って聞くと、ユカはキョトンとしてから笑った。
「赤ちゃんの頃は病気がちだったから、女の子の服着せるといいよって誰かに聞いたか何かで読んだかして着せてたらしいんだけどね」
　２歳くらいになると女の子の服以外は着たがらなくなり、さすがに幼稚園で女の子の服はマズいだろうと思った母は男児服を買い与えたらしい。
「マジか」
　そういえば、小さい頃はよく熱を出して寝ていたのを思い出す。
「でも、男の子の服を着ててもおにいちゃんはとにかく可愛かったから、ファンもたくさんいたわけよ」
　ユカはそう言うと、小学校の時の担任なんて私がおにいちゃんの妹だから受け持ったのよ、あのショタコン、と語気を荒げる。『先生』という単語に、ふと六年生の頃に恋をしていた新卒の教師を思い出したが、顔はよく覚えていなかった。
「それに隣のお兄さんも、いまだに会うたびにおにいちゃんのことばかり聞いて来るし」
「隣のお兄さん？」
　なぜ『隣のお兄さん』が自分のことを聞いてくるのかはわからないが、こちらも初恋の相手だっただけにちょっとドキッとしながら問い返すと、なぜかキッと睨まれた。
「とにかく！　みんなおにいちゃんのことが好きなんだから、たまには帰って来なさいよね！」
　大学に入ったきり一度も帰って来ないことにまで苦情を言われ、ユカも帰って来て欲しかったのだろうかと思ってちょっと嬉しくなる。するとユカが、そうだ、と言いながら、布団の中から何かをゴソゴソと取り出して構えた。
「はい、チーズ」
　オーソドックスな掛け声に、反射的に二本指を立ててピースする。パシャリという音とフラッシュの光に携帯端末で写真を撮られたこと気付いた瞬間、背中から抱きついている半裸の男の存在を思い出したが遅かった。見れば、健人も同じように右手の二本指を立ててピースしている。しかも、極上の笑顔付きでだ。
「お父さんもお母さんも、おにいちゃんのところに行ったら写真撮って来いってうるさいのよね～」
　ユカはそう言うと、ついでに友達にも送っとこ、と言いながら画面の上で忙しなく指を動かす。
「ちょっと待て！」
　慌てて止めようとしたその耳に、すぐにピロロンという着信音らしき音が届いた。
「反応はやッｗ」
「母さんかッ？」
　まさかこんな形でカミングアウトすることになろうとは、と冷や汗をかきながらユカの手から携帯端末を取り上げると、友達だよ、というニヤニヤ笑い付きの返事が返って来る。確かにチラと見たグループ名は家族のものではなかったが、『腐コミュ』って何だ。『ユカにクリソツ！』

は分かるが『リアル来たこれｗｗｗ』の意味がわからない。
「その写真、帰ったらお母さんにも見せるからね」
　だから正月には一緒に帰って来なさいと言われ、いつのまにか喋り方まで母親に似て来た妹にそら恐ろしさを覚える。
「いや、母さんには自分で言うから」
　だから言わなくていいというようなことを付け加えてゴニョゴニョと濁そうとすると、そこへ健人が久弥の肩に顎をのせて会話に加わって来た。
「確か長野でしたよね。いつにしますか？」
　正月なら今から新幹線取っとかないと並んだ席を取るのが難しくなりますからね、という言葉に、すっかり一緒に行く気だとわかって焦る。
「いや、こういうのには順序ってものがあってだな」
　カミングアウトするのは就職が決まってからと何となくは考えていたので大学院が一年残っている今は時期尚早である、そう自己弁護のようなことを考えながら言うと、健人が何かを思い出したように、ああ、と言って突然爆弾を落とした。
「ちなみにウチの親はもう知っていますので」
「はあっ？」
　慌ててすぐ横にある整った顔を見るが、健人は涼しげな顔で、そういえば正月に連れて来いって言われてたんでした、長野から戻ったらその足で直行しましょうか、実家のハシゴですねえ、アハハハ、などと呑気に言う。
「なんだって？」
「ですから実家のハシゴですねえって」
「そこじゃない」
「長野からそのまま」
「そこでもない」
「正月に連れて来いって」
「お前、わかって言ってるだろう！」
　すると、二人の会話を黙って聞いていたユカがブハッと噴き出して笑い出した。
「ウケる～」
　そして、ひとしきりケタケタ笑うと、目尻を指先で拭いながら健人を見上げる。
「おにいちゃんをよろしくお願いします」
　そしてそう言うと、ちゃんと連れて来てくださいね、と念を押してからごそごそと目深に布団をかぶって目を閉じる。徹夜で遊び回ったせいか、５秒と待たずに聞こえて来たスヤスヤという寝息に、枕が変わるとなかなか寝付けない久弥は思わず口をポカンと開ける。口は生意気になったが、まだ幼さの残る寝顔に、とろけるような眼差しで赤ん坊だったユカをあやしていた母親の姿が再び脳裏に蘇ったが、もう昔ほど鮮明ではなかった。
「どこまで自由人なんだ」
　健人もさぞ呆れたろうと思いきや、なぜか楽しそうにユカの寝顔を見ていて、はっきり言って

心中穏やかでない。
「腹減ったな」
　見えているのは目から上だけとは言え、いつまでも無防備な寝顔を見せておきたくなくて、それとなく寝室から連れ出すそうとすると、健人は、そうですね、と言って大人しく付いて来た。
「女の子がいるからフレンチトーストと思ったのですが、トーストの方がいいですか？」
　トーストならベーコンとスクランブルエッグも付けますね、と言われて心が動く。フレンチトーストも旨いが、健人の焼いたカリカリのベーコンも絶品である。
「そうだな、トーストの方がいいかな」
「じゃあ、先輩はコーヒー落としてくれますか」
「任せろ」
　家事の才能はゼロだが、一緒に暮らすようになってからコーヒーの淹れ方だけは覚えた。とは言ってもコーヒーメーカーに豆と水を入れてスイッチを入れるだけなのだが、健人が旨いと言ってくれるので嬉しい。そうだコーヒー豆は冷蔵庫だったな、と思いながら足取りも軽く冷蔵庫に向かうその背中に、健人が不意に言った。
「ところで先輩？」
「ん～？」
　生返事を返しながら、ついでにベーコンのパックも取り出して後ろ手に渡す。
「『隣のお兄さん』って誰ですか？」
「……へ？」
　予想外の質問に、一瞬だけ返事が遅れた。
「や……別に……」
　もちろんただの隣人なのだが、あながち恋心がなかったわけではないだけに思わず口ごもってしまい、イヤな汗がどっと噴き出す。いや、ここはさらっと流さなければ駄目だろう自分。
「後でゆっくり聞かせてくださいね」
　固まってしまった久弥の手から、健人が卵のパックを受け取りながら満面の笑みで言う。
「お、おう……」
　その笑顔が本物であることを久弥は心から願った。

了

映画コラム「君の名前で僕を呼んで」（黒井誰何）

とりあえず、「君の名前で僕を呼んで」日本語吹き替え版予告をどうぞ。
https://youtu.be/subZ54D_XcU

津田健次郎がオリヴァー！
誠実さのかけらもなさそうな、あの、ど変態が似合うナンバーワン声優が！！（超絶誉めてる）
要するに、津田健次郎が好きなんだけど、それはさておき、私が見たのは字幕版。
海外で数々の映画賞をかっさらいまくったそうだが、それとは関係なく、他の映画を見に行ったときに何度か見た予告は、美少年と美青年、イタリアの避暑地、青い空と光り輝く水辺……目の保養でしかない。「これは当たりだろう」と思った。
最初に言っておくが、ネタバレがあるので、嫌いな方はここでブラウザバックをどうぞ。
以下はWikipediaからの引用になる。

1983年、17歳のエリオ・パールマン (ティモシー・シャラメ) は、今年も両親と共に北イタリアの別荘で一夏を過ごしている。エリオは、アメリカの名門大学で教鞭をとるギリシャ・ローマ考古学の教授と、何ヶ国語も流暢に話す母親の一人息子だ。アカデミックな環境に育ったエリオは、他の同年代の子供に比べて、文学や古典に親しみ、翻訳（英語、イタリア語、フランス語を流暢に話す）や、音楽の編曲を趣味にする（ピアノとギターを弾く）など、成熟した知性豊かな子供に成長した。

毎年パールマン教授は、博士課程の学生を1人、アシスタントとして別荘に招待する。今年やってきたのは、課程論文を執筆中のオリヴァー (アーミー・ハマー) だった。エリオは、自信と知性に満ちたオリヴァーを、はじめは嫌厭するものの、徐々に彼に対し抑えることのできない感情に駆られていく。『君の名前で僕を呼んで』は、そんな2人に与えられた6週間の、情感と情熱溢れる恋模様を描き出す。
（以上、引用終わり）

こんな感じの話。
1983年が舞台なので、自分がエリオと似たような年齢なこともあり、使われる音楽も懐かしいものだった。
エリオの両親は知識人で、とてもリベラル。男性同性愛カップルを親しい友人として受け入れ、息子のエリオのオリヴァーに対する恋心に気付いても見守り、後押しさえしてくれる。
息子の経験を得難いものと捉え、突き放すでもなく甘やかすでもなく、経験による息子の成長をただ待つという、そのありようが、自分がゲイであってもなくても、こんな親だったらいいな、と思った。理想的な親たちといえる。

エリオもオリヴァーも、女の子と付き合ってみたりもしたけれど、お互いどうしようもなく惹かれあい、ついには結ばれる二人。
年上で優秀で自信家なはずのオリヴァーが、時折切なげな目をエリオに向ける。そこが妙に気になっていたのだが、ラストで冬の別荘に滞在しているエリオのもとに、オリヴァーから電話がかかってくる。婚約者と結婚することになったのだと。
エリオはオリヴァーと夏の北イタリアを小旅行して駅で別れるときまで、平気そうな様子だった。
オリヴァーの乗った列車を見送るエリオはずっと後ろ姿の映像で、彼の表情を観客は想像するしかない。俳優に号泣させるより、そういう演出のほうが個人的には印象が深くなる。
その後、エリオはあからさまに落ち込んだり涙したりもするのだが、微笑ましさも感じる。
夏の思い出がまだ熱を残す雪の別荘で、久しぶりにオリヴァーの声を聞いたエリオは、このときになってやっと、生まれて初めて、本当に恋を失ったことに気付く。お互い嫌いになったわけでもないのに……ってか婚約者いたんかい！　だからこうなることをわかってて、あんなに切なそうだったんだなオリヴァー。
それを、婚約者に対して、エリオに対して、不誠実だとは、私は思わない。長く生きていると、そういうこともあるかもしれないと思うだけだ。結婚してたって、若くても、年を取りすぎていても、運命の相手と出会ってしまうこともある。
エリオはガールフレンドとの初体験後、オリヴァーに入れあげて彼女を放ったらかしにするのだが、彼女がエリオを恨むでもなく、自立した女の子として自分できちんとエリオにガールフレンドではなく友達だとけじめをつけるシーンも良かった。

男同士であろうと、女同士であろうと、男女であろうと、この物語は成立するだろう。
初恋の、恋というものの普遍性を描いているからこそ、この映画は評価が高いのだ。
親密なもの同士の秘密の呼び名みたいなものがあるが、「君の名前で僕を呼んで」はその究極である。
エリオのことを、エリオくんとかエリたんとかえっちゃんとか呼ぶ人がいたとしても、オリヴァーと呼ぶ人は決していない。彼らは自らの名前を以て、相手に刻印を押すのである。

個人的にはオリヴァーの「later（あとで）」は字幕版のほうが好みであるが、ツダケンファンはぜひとも吹き替え版のほうも視聴していただきたい。
なお、「君の名前で僕を呼んで」は後日譚となる続編が予定されており、そのためＤＶＤでは映画にあったシーンがカットされているらしいので、もし、お近くの映画館で上映されることがあれば、映画館での鑑賞をお勧めする。

「先輩と山下くん（抜粋）」（黒井誰何）

違和感の焦点

「中村先輩。今日は受験の息抜きですか？」
　シャワーから出たところで、見慣れた後ろ姿を見かけて僕は声をかけた。
　大型連休を翌週に控えた土曜の夕方、灰色のロッカーが並ぶ市営プールの更衣室だった。
　僕たちは水泳部で、三年になった先輩はこの春、部活を引退したばかりだ。
「そんなところかな。他の連中は？」
　制服のシャツに腕を通しながら、先輩は周りを見回す。髪はまだ湿っていた。
「今日は僕一人です」
　先輩から四つ左のロッカーの鍵を開けながら答えた。
　僕らの高校は公立なので、温水プールなんて豪華な設備はない。六月まで、部活は筋トレやサーキットばかりになる。体をなでる水の感覚が恋しくなって、ときどき泳ぎに来ることがあった。
「そうか。山下は泳ぐのが本当に好きなんだな」
　急に名前を呼ばれて、僕は持っていた腕時計を取り落とした。
　仲が良かったわけではない、ただの部活の後輩で、顔はともかく名前まで覚えていてくれるとは思わなかったから驚いたのだ。
　間近であっという声がして、僕の足に何かがぶつかった。近くで着替えていた水泳教室の小学生が二、三人、同時に「すげー」と声を上げる。
「先輩……」
　現役野球部員ばりのヘッド・スライディングをかけた先輩が、僕の足下で周りの注目を集めているのだった。
「時計、落としたら傷がつくから」
　跪いた姿勢で時計を差し出す。ケガはないようでほっとした。礼を言って時計を受けとろうと右手を伸ばすと、がっちり腕を掴まれた。
「は？」
　そのまま僕の右手に腕時計をくぐらせ、ステンレスのベルトをぱちんと留めた先輩は、笑顔で立ち上がった。
「山下、このあと何か用事ある？」
　特には、と言いながら、僕は右手の慣れない感触が気になっていた。いつも時計は左手にしているのだ。
　だからって、先輩の目の前で時計をつけなおすわけにはいかなかった。
「腹減ってないか？　ハンバーガーでも食べる？」
　言われれば腹が減っていた。プールから少し歩いたところに黄色いMのマークの某ファーストフード店がある。というのは知っているが、僕は常に金欠で、バリューセットを食うくらいなら、コンビニでパンかおにぎりを買う。もしくは、この時間ならそろそろパン屋に総菜パンの

お勤め品が出回るので、そっちを狙う。
　だが、月はじめに遊びに来たジイさまからの臨時収入のおかげで、僕の財布の中には千円札がまだ三枚もあるのだ。
「たまにはいいですね、贅沢も」
　というわけで、十五分後、僕と先輩は某ファーストフード店にいた。
「奢るって言ったじゃないか。聞いてなかった？」
「すみません。自分で払うつもりだったから遠慮もせず……」
　僕の巨大バーガーＬＬセットは先輩のおごりだ。本人はというとシンプルなハンバーガーとホットコーヒーだけで、トレーを持った僕が恐縮していると、気にするな、と先輩は笑った。
　二階の客席にあがると、テキストを広げて勉強する大学生や、制服姿でおしゃべりに興じる中高生が点在している。窓際の席からは、日が暮れて暗くなった空と信号待ちでみっちり並んだ車のヘッドライドが見えた。
　改めて間近で見てみると、先輩は手入れが行き届いた感じのハンサムだった。髪だって千円カットじゃなくて、ちゃんと美容院に行ってるに違いない。そういえば部活の女子がバレンタインデー前になにやら騒いでいた気がする。
「山下のその時計、かっこいいけど、らしくないよね。自分で買ったの？」
　ハンバーガーを完食して紙ナプキンで口元と手を丁寧に拭いたあと、先輩は僕の右手の時計を指さした。
「あー、実はこれ、貰いものなんです」
　よく、似合わないと言われるのだ。僕は苦笑した。
「兄のだったんです。兄は自衛官なんですが、父に似てデカくてゴツくて、この時計も小さく見えてたんですけどね。カノジョからもらった時計使うからって、こいつを僕にくれたんです」
　兄はその彼女と去年結婚した。
「あら、弟くんはガチムチってわけじゃないのね」
　結婚前の挨拶に実家を訪れたとき、初めて僕を見た兄の婚約者は残念そうに言った。彼女が兄の身体目当てで結婚したことを僕は確信したが、まあ、二人とも幸せそうだからいいんじゃないかと思う。
「お古だから最初から傷はついてたんです。ミリタリータイプだからすごい丈夫で、少々ぶつけても平気だし、そこは気に入ってます」
「そう」
　ポテトを一本つまんだ僕の右手首を先輩は掴み、自分の方に引っ張った。そのまま僕の手をゆっくりひねるようにして、掌を上向かせる。時計の文字盤も上を向いた。ベルトが少し大きいせいで、盤面はいつのまにか、手首の内側のほうに回ってしまうのだ。、
　別に痛くはなかったけど、時計をよく見たいんだろうか？　それなら言ってくれればいいのに。
「俺の母は本を読むのが好きでね。家にたくさん本があったから、俺も自然と読んでたんだけどさ」

　先輩は意外なことを言い出した。
「ある小説に出てくる女の子が、好きな男の子の身体の、特に気に入ってる部分を食べ物に例えるんだよ。くるぶしは、サクサクのビスケット、なんだってさ。その描写がなんだかとても美味そうでね」
　そう言って、先輩は僕がつまんだままのポテトををくわえて引っ張り、奪って食べた。
「先輩、ポテトが食べたいなら好きに食べてくださいよ。Ｌサイズだからいっぱいあるし、もともと先輩がお金払ったんだし」
「この時計、さ」
　僕の手を握ったまま、先輩は、今度はもう片方の手でポテトをつまんだ。やっぱりポテトが食べたかったのだろうか。
「これがはまってる山下の手首って、ほんとにビスケットみたいに見えるね」
「確かに色は、スーパーに売ってる赤い箱に入ったあれに似てますけど、これは肉です。食べたら肉の味がしますよ。肉、食い足りないのならハンバーガーもう一つどうですか？　今度は僕が奢ります。甘いものがいいのなら、アップルパイにしますか？」
　本当に食いつかれると思ったわけではないけど、僕は先輩の手から逃げるように立ち上がった。
「じゃあ、アップルパイ奢ってよ、山下」
　そう言った先輩はとても楽しそうで、やっぱり甘いものが食べたかったらしい。
　レジのある一階へ向かう階段で、窓際の席を振り返る。先輩の手は、トレイの上の空間に取り残されていた。僕の掌を握っていた形で。
　何故か違和感を感じて、右手を見る。
　そうだった。時計、まだ右手のままだ。

褐色のファウンテン

　なぜ六月に文化祭があるのか、僕には理解できない。
　午前中かろうじて踏みとどまっていた土曜日の空は、昼過ぎになってやっぱりダメでしたというふうにしょんぼり降り出した。
　文化系の部活やステージのあるやつらは朝からばたばたしていたが、僕のクラスは教室を使った展示発表で、設営してしまえばそれでほぼ終わりだ。帰宅部や体育系部活の人間が交代で受付をすることになった。昼前に当番を終わらせていた僕は、撤収作業の始まる四時まで自由の身だ。
　友だちのいる別のクラスに顔を出し、普段何をやっているのかわからない文化系の部活の展示

をひやかし、ついでに中村先輩のクラスにも行ってみたが、先輩の姿は見当たらなかった。
　どの教室をのぞいても、大抵は面白みもやる気もない無難な展示発表ばかりだ。見ているうちに眠くなってきた。文化祭で授業がないのをいいことに、ゲームで夜更かししてしまったのだ。
　眠れるような場所を探したが、なかなか見つからない。それで、学校の隣のコンビニから目覚ましにコーラを買ってきた。校内の自販機は炭酸飲料を全く置いてないのだ。
「お、ちょうどいいところに山下！」
　来客用のスリッパの音が響く廊下を、あくびしながら歩いていたら声を掛けられた。半分脳みそが眠ったままとろりと振り向くと、小さな銀色のものが飛んできた。
　楽器のケースを背負った水泳部副部長の佐野が、同じように楽器や楽譜を持ったやつらに囲まれるようにして立っていた。背が低くく、よくて中学生。高校生にはとても見えない。元気ないたずら坊主の弟みたいで、女子部員や後輩たちにもよく「副部長かわいー」と頭をぐりぐりされている。
「どうしたの？」
　僕はとっさに受けとめた銀色の鍵と佐野を、交互に見ながら尋ねた。
「横田先生に鍵、返しといてもらえる？　部室に楽器置いてたんだ」
　見覚えのある鍵には、プールと書かれた青いプラスチックの札がついている。
「いいけど……僕も部室使っていい？　撤収が始まるまでには先生に返しとくからさ。仮眠場所を探してたとこなんだよ」
「もうすぐ俺たちの演奏始まるのに、見てくれないの？」
　拗ねながらも、佐野は了承してくれた。「部外者が入って来ないように、入口の鍵は掛けとけよ」と言い残すあたり、ちゃんと副部長してると思う。

　二階の体育館へ登る大きな階段と、プールへ入る階段は別のものだ。体育館の一階プールに横付けされた短いステップを登り切ったところに、先輩がいた。
　プールの入口ドアのあたりは踊り場のようになっていて、まわりを囲むコンクリートの壁が目隠しになっている。水泳部関係者なら、一人になれる場所としてここを思いつくのは自然かもしれない。
　目を閉じて、頭と右肩をコンクリートに預けていた先輩は、足を投げだし、腹のあたりで軽く指を組んでいた。左側には空になった紙コップ。夏服のグレーのズボンのポケットから耳までコードが伸びる。近づくと小さく音が洩れていて、片方のイヤホンが外れていた。寝てるんだな、と僕は思った。
「……恭平」
　目を閉じたまま、先輩が困ったように小さく僕の名前を呼んだ。先輩の夢の中で僕は一体何をやらかしてるんだろう？　気にはなったが、寝言に返事をしてはいけないと言う。先輩の前にしゃがんで起こそうか迷っているうちに、先輩は勝手に目を覚まして、まぶしそうに僕を見た。
「なんでこんなとこにいるの？」
　イヤホンのコードを巻き取りながら僕につっけんどんな質問を投げかける。あんまり機嫌はよ

くなさそうだ。やっぱり何かやらかしてたんだな夢の中の僕。でもそれ、現実の僕とは関係ないです先輩。
「眠くて。部室で仮眠しようと思ってきてみたら、先輩が寝てたんです。それだけです」
「……俺、何か言ってなかった？」
　ぶんぶんと勢いよく顔を横に振ると、先輩は失笑した。そのままカップに手を伸ばし、空だったことを思い出したように、コンクリートの床にまた置く。
「飲みます？」
　ビニール袋から出したペットボトルはまだ冷たい。先輩が頷いたので、カップに褐色の液体を注ぐ。
「じゃあ、お礼にアメを上げよう」
　少し機嫌が良くなったのか、先輩が笑ってズボンの左ポケットから細長い紙包みを出す。と、既に開いていた包みからこぼれ落ちて、褐色の液体に白い粒がいくつかダイブする。
　やばい。
「メントス爆弾！」
　僕は叫んで、褐色の飛沫から先輩を守ろうとした。勢い余って抱きついたような形になったのは事故だ。
「恭平？」
　戸惑うような声が耳元でする。息がかかってくすぐったい。じゃなくて！　予想された感触がない。つまりはシャツが濡れるそれの。
「……あれ？」
　先輩の首に手を回したまま恐る恐る振り返る。紙コップの中のコーラはまだ盛大に泡立っていたものの、噴出には至っていない。泡の収まり始めた紙コップを取って、「炭酸は抜けてると思いますけど、飲みます？」と差し出すと、先輩は軽く眉間に皺を寄せて首を横に振った。
「メントス爆弾って何？」
「動画で見たことありません？」
　ウィキペディアには「メントス」の項目に「メントスガイガー」と書かれている。人工甘味料の入っている炭酸飲料のペットボトルにメントスを投入すると、間欠泉のように勢いよく噴出するのだ。
　動画投稿サイトでも、他にどんなものを投入するとこの現象が起こるのか、飲み物の種類で噴出程度は変わるのか、検証していたりする。
　そう説明しても、「そんなこと言って、俺のこと押し倒したかっただけじゃないの？」とまるで冗談扱いだ。
「じゃあ、証明してみせますから。メントスください」
「上手くいったら今度はキスでも迫るつもり？」
と、あくまでもからかう先輩から白い粒を四つもらって、階段の下、雨のあたるコンクリートのたたきの上にペットボトルを置いた。もったいないけど、残りのコーラにメントスを全投入する。

駆け足で階段を昇ると、見計らったように噴出が始まった。やっぱり、口の細いペットボトルでやらなければ起こらないらしい。
二人で階段の一番上に座って、噴水のように吹き上がるコーラに歓声を上げていたが、ふと我に返った。
先輩にキスしてくださいって、言わなきゃならないんだろうか？　……いや、あれはいくらなんでも冗談だろう。
頭を振って、噴出の収まったペットボトルを取りに行く。まだ三分の一ほど残っていた。
「どうするのそれ？」
聞かれたので、答えは行動で示す。
「残った材料はスタッフがおいしくいただきました！」
空のボトルを片手に宣言する僕の耳に、先輩の爆笑が響いた。

藍に乱点　白くま実食編

「Ｓ？　先輩、Ｓなんですか？」
「……うん」
驚いた僕の声に、なんだか恥ずかしそうに夏服の中村先輩がうつむく。
「遠慮しなくてもいいんですよ？」
「いや、遠慮はしてないんだけど……」
「僕はＭです」
堂々と宣言する僕に、「がんばれ、恭平」と先輩は小さく拍手した。
「そんなに大変でもないですよ。あ、すみませーん」
繁華街の本店に比べると、駅ビルの地下の店は小さい。声をかけるとすぐに店員さんが来てくれた。
「普通の白くま、ＭサイズとSサイズ、ひとつずつ」
夏休み中とはいえ、平日の午後四時過ぎという時間帯のせいか、席はそれなりに空いている。注文を終えて見回すと、駅ビルらしく、出張帰りの列車待ちのようなスーツのおじさんや、いかにもバカンス中というようなカップルがぽつぽつと座っている。食べているのは、みんな、フルーツやいろんな色の寒天が載ったかき氷ーー白くまだ。
白くまといえば、この店が有名だが、実はあちこちの食堂や喫茶店でも食べられる。それぞれにトッピングや練乳シロップの味に違いがあるらしく、夏になると地元局のテレビ番組でも特集が組まれるほどだ。白くまといっても、チョコレート、ストロベリー、ヨーグルトに宇治金時など、種類はたくさんあって迷いそうなのだけど、なぜかいつも頼むのは普通の白くまばかりだ

。
　八月に入ってすぐのある日、駅ビルの上の階にある書店で英語の参考書を選んでもらうお礼という名目で、先輩を誘って地階のこの店にやってきた。そうでもしなければたぶん、先輩は僕におごらせてなんかくれない。
「恭平、英語苦手なんだ？」
　冷水の入った僕の目の前のグラスよりも涼しげに先輩が笑う。その後ろのクリーム色の壁には、青地に店名と七匹のクマが白ぬきされた絵のプレートが飾ってある。
　左手の通路側から先輩の後ろまで、壁や窓の側にカウンター席が並んでいる。一人で来るお客も多いんだろうかと思った。お好み焼きを頼むわけじゃないから、向かい合わせの二人席じゃなくてそっちの席でもよかったかな、と一瞬思ったけど、この席を選んだのは先輩だ。後輩としては逆らうわけにはいかない。
　通路側のカウンター席の前には大きな窓があって開放感もあるし、駅地下を大勢の人がぞろぞろと歩いていく。窓には目隠しも兼ねて、壁と同じ細い竹の棒が縦向きに飾ってあって、地下の狭い店なのにさっぱりと明るい雰囲気だ。
「国語も苦手ですよ。特に現代文と古文」
　なかでも、詩とか短歌とか俳句とか、苦手だ。昔からあの世界はよくわからないので苦労してきた。
「どの教科が得意なんだっけ？」
「数学は、割と。あと、化学かな」
「ほんとに理系だね」
　先輩と同じクラスの姉を持つ、水泳部副部長・佐野の情報によれば、中村先輩はオールラウンダーで、数学も得意らしい。経済学部志望だし。
「そういえば先輩、来週、十日の夜って予定ありますか？」
「……特にないけど」
「あの、うちに遊びに来ませんか」
　三年生は忙しい。断られるかもしれないと、どきどきしながら言うと、先輩は少し驚いた顔をしながらも「大丈夫だと思う」と答えた。
「でも、なんで夜？　ご両親が旅行に行ってひとりきり、とか？」
　ひとりで留守番するのが怖いの？　とでも言いたそうに、先輩の目が細くなった。
「そうじゃなくて！　うちの母が、あの、いろいろお世話になってるから、お礼をしたいと言っておりまして……浴衣も借りたし、なんかほら、今日は参考書も選んでもらったし、食事をしに来ないかと」
　冷や汗が出そうだった。
　実は違うのだ。先日の六月灯の画像を見た母が、どうしても実物の先輩を見てみたいと言いだしたのだ。
「母が餃子も作るって言ってますので」
「餃子？」

　先輩が怪訝そうな顔をする。
「あ、うちの母の餃子、美味しいんです。めんどくさいって滅多に作ってくれないけど」
　先輩ごめんなさい。
　餃子のために、先輩を売ってしまいました！
　後ろめたさのあまりうつむいていると、楽しそうな声が聞こえた。
「ふーん、恭平んちの餃子か」
「嫌いなら無理にとは」
「いいよ。餃子大好きだから」
　慌てて顔をあげると、先輩はにこにこしていた。
「ありがとうございます！　帰りは送っていきますので、母が！」
「わかった。俺もうちの家族には話を通しておくよ。あ、ほら、来た」
　先輩が僕の後ろを見ながら、あごを上げてみせた。
「白くま、Ｓサイズのお客様〜」
　はい、と先輩が手を上げた。先輩の目の前に、こじんまりサイズの、僕の前には見覚えのあるサイズの白くまがそれぞれ置かれる。
　伝票を置いた店員さんが行くと、先輩はスプーンを手にした。
「じゃあ、今日はごちそうになるね」
「はい、どうぞ」
　僕もスプーンを手にする。白くまは、年に一回くらい、家族で繁華街の本店のほうに食べに行くけど、今年はまだだった。
　白い平皿の上のガラスの鉢に、こんもりと盛られた練乳がけのかき氷。それが白くまだ。
　てっぺんに赤い缶詰のチェリーが、その周囲に三粒置かれた干しぶどうが白くまの顔に見えるから、とも言われているが、僕にはそうは見えない。小さく切ったメロンとスイカがボリュームのある山に一切れずつささっていて、白い側面には赤や緑のカラフルな寒天と、缶詰のみかんやパイナップルのオレンジや黄色が万遍なくちりばめられ、かなりにぎやかだ。
　僕はチェリーを最初に口に入れ、久しぶりにこれを食べたなと思った。次にメロンとスイカを片付ける。先輩を見ると、チェリーは残したまま、やはり生フルーツから手をつけている。食べなれた地元民ならば先鋒・生フルーツは定石の戦略だ。重みのあるフルーツがささったまま本体に手をつけると、バランスを崩した壁面が決壊し、下皿へと氷がなだれ落ちる可能性があるのだ。もったいない。
　そっと側面にスプーンを入れると、軽い手ごたえと一緒にたっぷり練乳のかかった氷が銀色のスプーンの上に落ちる。それを口に入れると、練乳とシロップを調合しているのだろう、練乳だけとは思えない軽やかな甘さが、冷たさと一緒に広がった。
　どんどんスプーンを進めると、エアコンでも消せない暑さが引いていくのがわかる。
「恭平、食べきれそう？」
　ふう、と体の中にたまった冷気を吐き出すように、先輩が息をついた。
「大丈夫です」

　途中の寒天や缶詰フルーツで冷たさも一時中断されるので余裕だが、サイズが小さいせいか、食べるペースは先輩のほうが速かった。もう、ガラス皿の底のほうを探っている。
「白くまって一個だけ豆入ってるじゃない。大きいやつ」
「ああ、十六寸（とろすん）ですね。あれ、うちの母が大好きなんですよ」
「俺、好きなんだよねこれ」
　見つけたクリーム色の大きな豆を、おいしそうに先輩はほおばった。和菓子より洋菓子党に見える先輩だが、意外と和菓子派かもしれない。
　十六寸は二、三センチくらいの白い豆を甘く煮たもので、母方のばあちゃんの作るおせちにも必ず入っている。僕はといえば、母の実家に行くたびにばあちゃんがもたせてくれるので、嫌いではないが、年に一度、正月に食べるだけで十分な感じだ。
　それより、早く白くまを食べてしまわないと、もうすぐ食べ終わる先輩を待たせてしまう。
　と、焦ったのがいけなかった。
「う……」
　スプーンを置いてこめかみを押さえた僕に、「あったかいお茶もらおうか」と先輩は声をかける。
「いえ……いいです。それより、先輩、これ食べてください」
　氷の中からわずかに顔をのぞかせた豆を指さす。
「いいよ。恭平が食べなさい」
「先輩、食べてくださいよ。好きなんでしょ」
　どうぞ、と鉢ごと押しやるが、先輩は首をふる。
「はい。あーん」
　仕方ないのでスプーンですくって先輩の口元に持っていくと、思わず、というように先輩は食いついた。そんなに好きなら遠慮しなくてもいいのに。
　少し恥ずかしそうな、困ったような、微妙な顔で黙ってもぐもぐしている先輩を見ていると、なんだかおもしろくなってきた。鳥の雛にえさをやるのってこんな感じかもしれない。
「僕まだ頭痛いんで、もうちょっと食べてください」
「え、いいよ」
「はい、あーん」
　問答無用でスプーンを差し出すと、先輩ははむっと食べた。
「もうちょっとお願いします。はい、あーん」
　ごくんと飲み込んだあと、「あーんはやめて、恭平」と先輩はささやいた。僕はなぜかおもしろくて仕方なかった。
「じゃあ、あと三口くらいお願いします」
　先輩は黙って口を開いてくれた。
　白くまのすごいところは、氷の途中にも底にもたっぷりとちょうどいい量の練乳シロップがかかっていることだ。あと、底のほうにも寒天や缶詰フルーツが埋まっている。
　さて、頭痛もとまったことだし、白くまの残りを食べようかな。

先輩の顔を見ながら、ゆっくりと。

砂糖漬けの地獄

「うあーえーいおうわー」
「…先輩、人間の言葉しゃべってください。」
「…終わりそう?」
「…あと一時間くらいかな。」
「…俺あと二時間かな。
ああ、午前様じゃねーかくそっ。」

　綾人はそういうとヤケになってネクタイを緩め、腕時計をはずした。孝道は苦笑して、横目で綾人を見た。

「…コンビニ行きますけどなんか買ってきましょうか。」
「たのむ。薄皮クリームパンと無糖のコーヒー。
あったかいやつな。」
「ラージャッ。」
　孝道は椅子の背から背広をとり、羽織って出かけた。
　外は名残雪だった。空気はもうあたたかい。
　綾人は大学時代の三級上の先輩だ。
　卒業したとたん、青田刈りにやってきた。
　孝道は青いうちに収穫され、卒業して綾人のいる会社に勤めた。
　ブラックというほどの悪い会社でもないが、ときどきむかつく残業がある。それ以外の不満は特になかった。
　綾人も、孝道をすごく可愛がってくれる、後輩として。

　…後輩として。

　首をひとつ振る。
　いいじゃないか。それで。
　キスでもしてほしいってか?馬鹿をいうな。

　注文の品を会社の近くのコンビニでそろえ、自分はそろそろシーズンオフな中華まんを買った。飲み物はジンジャーエール。

「おお、サンキュ。」

　会社に戻って注文の品を手渡すと、綾人は眼鏡もはずしてクリームパンの袋をあけた。
　小さな丸いクリームパンが５～６個入っているなかから、一個をとりだし、それにまふっと食いつく。
　…二口で食べた。

「やー三十過ぎると徹夜がつらくてなあ…昔は平気だったのに。」
「そんなもんですかね。二十代と三十代ってそんなに違いますか。」
「ちーがうちがう。ああ肩こった。」
「…もみましょうか。」
「いいよ、お前も仕事途中なんだろ。」
　綾人はそういって自分で自分の肩をもんでいる。
　孝道は残念に思った。
　中華まんをくわえたままパソコンの画面にもどった。ジンジャーエールのプルダウンを押し込む。本当はここは缶ジュース禁止だが、そんなこといったら、サービス残業だって禁止のはずだ。とっとと終わらせたい。薄暗い部屋で綾人と二人っきりで残業なんて、砂糖漬けの地獄だ。
「…タカちゃん、来月に入ったら焼肉いかね?なんかもう栄養つけなきゃやってけねーわ俺」
「いいですね、いきましょう。」
「レバさしが食いたいナーッ。」
「俺は骨付きカルビ。」
「いいねえ!」
「焼肉にはコーラですよね。」
「えーっ、ビールだろーっ。」
「コーラですよ。」
「ビール、ビール!」
　…こうして綾人が甘えてくれるだけでいいじゃないか。
　ジンジャーエールで頭を覚ましながら、孝道は綾人の声に目を伏せた。綾人はまだ何個目かのクリームパンを食っている。
　いつかこの人の結婚式に出席する日が来るんだろうか、と、最近孝道は思う。
　それは辛いだろうな、と思った。
　泣くかもしれない。
　泣いたらなんて言い訳すればいいだろう、と思った。
　感動したっていえばいいか、と思った。
　俺も結婚したくなりました、とか、嘘でも言っとけば…。
　結婚しても会社は辞めないだろうし、こうしてまた二人で残業する夜もあるだろう。

　それでいいじゃないか、と孝道は思った。

社員旅行

　社員旅行でスパリゾートへやってきた。
　中堅以降の社員たちはぶつぶつお約束の不平を漏らしていたが、若い連中はまだ社員旅行が楽しい時期で、同期入社の友達や、仲のよい先輩たちと盛り上がった。
　そうした若い一派が、こうした行事を支えているといっても過言ではないのだが、社員旅行で伝説を残すのは、なぜかたいてい中堅以降の連中だった。
　綾人の記憶がたしかなら、去年は先輩のAが入社したてのBという女子と夜中にランデブーし、今年のはじめに結婚した。Aには妻がいたのだが子供がなく、莫大な慰謝料を払って離婚し、子供ができたBと再婚したのである。
　おととしはコブツキ未亡人のCが、京大哲学科中退、中途採用、まじめなだけが取り柄のDという独身男に迫り倒し、旅行の数ヶ月あとにこれもまたでかして結婚した。
　一昨々年は…
　ええい、もう思い出したくもない。
　独身の綾人はため息をついて眼鏡をはずし、眼鏡拭きでこしこしと磨いた。
「先輩。」
　…可愛いのが寄ってきた。
「おうタカミチ。泳ぎにいかないのか。」
　孝道は大学の後輩で、当時大学中でいちばんかわいい男だった。
　だからとっとと青田刈りに志願して、綾人が刈り取ってきた。
　人事の上司も「なるほど可愛い、忍耐強く素直で真面目な男だ」と評価してくれて、面接一発で入社が決まった。
　綾人の超自慢・超お気に入りなのだ。嫁にしたい。男だが。
「行きますよ。先輩もどうかと思って。」
「俺泳げないんだよ。」
「泳げなくても大丈夫ですよ。足付きますって。それに俺も25メートルくらいしかおよげない。しかもクロール。」
「りっぱなもんだよ。」
「行きましょうよ、宴会のまえに少しウォータースライダーで遊んで、風呂もついでに終わらせましょう。そしたら思う存分飲める。俺は下戸ですけど。」
「…まあ、どうせ風呂はいくわな。」

　孝道にさそわれて、深い考えもなくでれでれとついていくと、なるほどスパの遊具は泳げなくてもそれなりに楽しいものだった。
　綾人は大きな浮き輪をレンタルして、上に乗ってぷかぷかと浮かんでみた。たいそうゆかいだった。
　ウォータースライダーでひとしきり楽しんだあと、孝道が浮き輪につかまってきて、言った。
「そろそろ風呂行きましょうか。」
「そうだな、あんまりバタバタするのもいやだし。」
　ふたりはゲートを通って入浴施設に移動した。
　脱衣場でぱっぱと水着を脱ぐ孝道の後ろ姿をまじまじみて、綾人は軽いショックをうけた。孝道はまだ高校生のように、胴にくびれがあった。周囲はおっさんの裸ばかりである。すごく初々しく見えた。
　化石海水という珍しい泉質の温泉で、ヨードに良く似た茶色をした湯だった。綾人が先に漬かっていると、前を隠してじゃばじゃばと孝道が近寄ってくる。
　…またまじまじみてしまった。こいつ、細いっていうのとも違うけど、なんなんだ、体が出来上がってなくて若い、と思った。腰骨が、指で辿りたいほどくっきりと突起している。
　みているうちに孝道はじゃぼんと綾人のとなりにすわった。…茶色の化石海水に隠れて、その体はもう見えない。
「先輩、また舞茸のてんぷら出たらたべてください。」
　孝道はこうした宴会でよく出る舞茸のてんぷらがたべられない。綾人は舞茸がすきだった。
「ああ、いいよ。」
「よろしく。注ぎに行くとき持って行きます。」
「オッケー。…あれうまいのに。おまえ駄目なんだもんな。もったいない。」
「舞茸もうまいと思ってくわれたほうが成仏しますよ。」
「きのこって成仏したり地獄におちたりすんの。」
「しますよ?」
　孝道はそうこたえて笑った。
　可愛いんだけど、男なんだよなあ。まあ俺は男でも別にいいんだけど、孝道にも気持ちというものがあるだろうしなあ…。いっぱし中堅社員として伝説を残したいのはやまやまだが…。
　綾人は水に沈んで見えない孝道の腰の辺りを見て、少し苦笑した。
「…俺の×××そんなに気になります?」
　孝道がさりげなく言ったので、綾人は目をあげて、
「…まあ、男は一生中二魂を忘れちゃいかんからな。」
と、応え、ニヤリと笑いなおした。

花見の準備

「本州は、桜だな。」
　自作のなかなか器用な弁当を食べながら、綾人は言った。
　食堂のテレビでは花見のニュースと満開の桜が放映されている。孝道は綾人の向かいでコンビニのおにぎりとサラダを食べていた。
「…ですね。本州は爛漫なんだろうな。うらやましい。…先輩これピカチュウ?」
「かわいいだろー。」
「…朝、時間ないのによくやりますね。」
「時間あるよ。俺けっこう早起きだから。じじいは早起きなのよ。」
「やめてください、三年後俺もじじいになるのかと思うとこわいじゃないですか。」
「四年後だろ。俺一浪だよ。…それはさておきさ、タカちゃん、今年の新入社員の川辺くん、誰か世話してるみたい?」
「…どうだろう。」
　川辺はむっつりした無口な新人で、作業のスピードははやく、数少ない台詞ははっきりと大きな声をだす。悪いやつではないし真面目なのだが、とても扱いにくい。とっつきにくいのだ。
「…五月二日に恒例の花見があるでしょ、川辺くんが場所取りとか準備やるじゃない。大丈夫かな。だれかいろいろてつだってやらなくて。」
　孝道の入社した頃より会社の業績はおちている。今年の新人は川辺だけだった。
　孝道のことも新人のころ綾人はあれこれいろいろ世話してくれた。それを思い出して孝道は川辺に嫉妬した。綾人は面倒見が良すぎるとおもった。あんな新人ほっときゃ誰かが…だれもいなかったら課長が面倒みるだろと思った。
「…タカちゃんおせっかいしてあげなよ。」
　綾人が言った。
「…だれかみるでしょ、俺がやらなくたって。」
「意地悪。俺はタカちゃんのことあんなにいろいろ見てあげたのに。」
　…だからいやなのだ。大切な思い出にミソがつく。
　「先輩が俺をかわいがってくれた」が「先輩は先輩社員としての義務を果たした」になってしまう。
「…じゃいいよ、俺がおせっかいやくから。」
「や、それは駄目です」
　孝道はおもわず綾人を制止した。
「…なんで。」
　孝道はしどろもどろになって言った。
「…だって…先輩は…先輩だし…新人の世話みる…えっと…世代じゃないです。…わかりました、俺がやります。」
「なんっ、急にそんなおおげさに決意表明して。」

「…俺がやります。」
　綾人が川辺にべたべたして川辺に嫌な顔をされるのをみるのは嫌だった。川辺がいい顔を見せるのはもっと嫌だった。
「…いやなら無理しなくてもいいよ?」
　綾人はあきれて言った。
「いえ、いやじゃありません、ちょっとめんどくさいなとおもっただけですから。」
「そう?じゃあ、たのむよ。川辺はあのとおり、山親父(※エゾヒグマのこと)みたいな迫力あるからさ、とっつきにくいと思うけど、うちの会社に受かったくらいだから、真面目さと誠実さは間違いないと思うよ。」
　孝道はうなづいた。
　こうなったらなんでもやったるわい、と思った。
「…俺けっこう桜好きなのよ。楽しみだな、花見。」
　綾人がそう言うなら何でもしよう、と孝道はおもった。
　熊っぽい新人くらいなんだというのだ。
「…俺も花見好きです。川辺にがんばらせますよ。楽しみにしていてください。」
「うんうん、楽しみにしてるよ。」
　綾人が眼鏡の下でにっこり笑うのをみて、孝道は、まあ、それもありか、と思った。

延期

五月の二日は休日でない限り、花見を行う、場所は円山公園、料理はジンギスカン…それは札幌ではとても多くの集団で、毎年の決まりごととなっている。ジンギスカン屋に相談すれば、ジンギスカンの材料や使い捨ての鍋はもとより、ブルーシートやカセットコンロまでセットでレンタルできる。
　孝道の会社も毎年そうしていた。
　孝道が入社した年は先輩社員の綾人がいろいろ教えてくれた。毎年世話になっているジンギスカン屋、場所取りのコツ…。おかげさまで寒かったが晴天にめぐまれ、孝道の評価は大いに上がったものだった。
　今年、そんな敬愛する綾人先輩に、後輩の川辺の花見のしたくを手伝ってやれといわれて、孝道はしぶしぶ了承した。
　ところが、なんとしたことか、お約束の五月二日、いや、前夜一日の夕方から、激しい雨が降

った。気温も一気に5度を下回り、咲きかけだった花も完全に開花ストップのありさまだった。
「…」
「…」
　川辺は口数のすくない男だ。
　社屋の窓からしばらく外をみていたが、ふいと孝道をふりかえると、一こと言った。
「…中止ですよね。」
「…僕らが決めるわけにはいかない。課長に相談して中止にしてもらおう。」
「…どう考えても中止でしょう。」
「そりゃそうだけど僕らがきめるわけにはいかないから。それに今回中止にしたとして、振替日を設けるかどうかも考えないと。僕の年は問題なくやったんだ。どうしたものかわからないよ。…課長んとこ行こう。一緒にいくよ。」
　腰の重い川辺をぐいぐい押して、孝道は課長のところに連れて行った。
　結局花見は中止になり、会社はゴールデンウィーク後半に突入することになった。
「なーんだ、残念。でもこの雨じゃあなあ。」
　帰りに綾人が孝道を誘ってくれたので、二人で居酒屋で飯にした。孝道は飲めないのでウーロン茶だが、綾人はビールだ。
「…桜も散ってしまいそうですね。咲いたとしても休み明けまで持ちそうにない。でも課長が、もしできるなら休み明けに仕切りなおせというんですよ。」
「ああ、まだまだ八重桜って手があるよ。」
「八重桜、」
「そう、咲くのが少し遅いし、花は長持ちする。休み明けでも十分だよ。ただ円山公園にはないんだ。」
　〇×公園てとこ、バーベキューもできるよ、と綾人はのんびり言った。
「そうだったんだ…先輩アウトドア詳しいんですね。」
「あはは、俺が入社した年は雪が降って流れたんだよ。もう大慌てでさ。しりあいというしりあいに電話かけまくって調べた。」
「雪?!…それは大変でしたね…。でも、おかげさまでたすかりました。」
「先達はあらまほしき、だろ?川辺に電話してやれよ。あいつも熊みたいなむっつり男だが、きっとあれこれ悩んでいるだろうよ。お前はうんと恩をうっておけ。あとでまとめてかえしてもうんだぞ。うひひひ。」
　綾人は少し酔っ払って、品のない笑い方をした。
　孝道は苦笑した。
「…川辺、腰重くてなかなか使えない奴です。」
「初めはみんなそんなもんだよ。初めからバリバリだったら嫌じゃないか。俺とか首んなっちゃう。」
　孝道は心外に思い、抗議した。
「…俺も使えなかったですか?一生懸命やったんですよ。」

　すると綾人は急に優しい目になって、言った。
「…孝ちゃんはいい子だったよ。うんうん、いい子いい子。」
　そして手を伸ばすと、孝道のおでこをぽんぽんと撫でた。
「……おい、酒ものんでねーのに赤くなってんじゃねーよ、お前。」
「す…すみません」
　孝道はあわててウーロン茶をあおり、そこにあった料理を口にかき込んだ。

川べりの桜

　ゴールデンウィークがあけてから、綾人の会社は花見をやった。
　このあたりでも普通はゴールデンウィークのなか日あたりにはおわらせてしまうものだが、たまたま豪雨で予定が流れたためだった。
　花見の手配をするのは毎年新入社員の仕事で、これが最初の大きな…まあ、初仕事といってもよかった。
　今年の新入社員は一人だけで、少し無愛想なので、どうなることか心配していたが、手伝いにつけた社員が良かったらしく(孝道は綾人自慢の、有能な後輩なのだ)、無事、花見の宴開催とあいなった。
　川べりの公園は南区の奥にあって、バーベキューもできる。少し高みのあたりに八重桜が見事に咲いて、そよ風がふくとちらちらと花びらがジンギスカンの鍋に届いた。
　川縁なので肌寒い。みなでぎゅうぎゅうと火の周りに集まって、震えながらビールをのみ、羊肉を食べる。こんな風景がこのあたりの花見だ。
　いそがしく働く手伝いの孝道が、少し手のあいたのをみはからって、綾人は声をかけた。
「タカちゃん、ご苦労さん。よかったね、晴れて。桜もいい感じだし。」
「…また雨がふったらと思うと昨日は眠った気がしませんでしたよ。」
「…でも寝たのね。」
「…先輩、一つお聞きしてもよろしいですか。」
「なーに。」
「…男はなぜよっぱらうと、ネクタイを頭に巻くのでしょう。」
「これは『病気の殿』だ。」
　綾人は胸をはって応えた。
　孝道はそっと目を伏せた。

「…質問の仕方が悪かったです…男はなぜよっぱらうと『病気の殿』になるのでしょう。」
「楽しいからだ!」
　綾人は満面の笑みで即答した。
「お前もやれ。楽しさがわかる。」
「…残念ながら下戸です。」
　孝道は本当に残念そうに言うと、呼ばれて立ち去った。
　…ここで本当に残念そうに言うのが孝道の可愛いところだと綾人は思う。
　そこそこ腹いっぱいになったので、焚き火を離れ、川を見に行った。
　すきとおったエメラルドグリーンの水が、岩盤の上をごうごうと流れている。このあたりは中流というよりは上流に近い。豪快な眺めだった。心が洗われるとか、その辺を通り越している。自然のパワーみなぎる絶景だった。
「すげえなあ、ながされたら死ぬな。」
「あんまり近づくと泥にはまりますよ。」
　振り返ると孝道が心配してついてきていた。
「お前、よばれてたじゃん、いいの?」
「雑用ですよ。…それより石の上なんかのっかってひっくりかえらないでくださいよ?」
「だーいじよーぶだーいじょーぶ。」
「大丈夫じゃないですよ、よっぱらって。」
　孝道は手をのばすと、綾人の頭から丁寧にネクタイをほどいた。
「もう少しこっち来てください。あぶないなあ、もう。」
　綾人はおとなしく孝道の言葉に従った。すると孝道はネクタイを綾人の襟にくぐらせ、慣れない手つきながらも最後はきゅっとしめた。
「…自分の結ぶのは簡単なのにな。」
「逆だからね。」
「そうですね。」
「…ありがとう。」
「どういたしまして。…ここ寒いですよ、焚き火のほうに戻りましょう。」
「そんで目白みたいにきゅうきゅうおしくら饅頭すんのね。課長と。」
「ご希望なら女子社員とどうぞ。」
「セクハラだから、それ。」
「どうしても課長がよければおとめしません。」
「んなー、俺タカちゃんがいいなあ。」
　酔った冗談でそう言って孝道に抱きつくと、孝道は黙り込んだ。
　あっ、しまった、怒ったかな、と思い、綾人が孝道の顔を見上げようとすると、孝道は突然綾人の眼鏡を取り上げ、さっと身を振りほどいて距離をとった。
「わーっ、なにすんだ、かえせよ、俺めがねないとなんも見えないんだ、危ないじゃないかこんなところで」

「鬼さんこちら。」
　孝道はなぜか嬉しそうに笑って言うと、眼鏡を持ったまま焚き火のほうに走り出した。
　綾人はあわてて追いかけた。

下戸のもだえ

　孝道は酒が飲めない。
　だが飲みたいと思うときがある。
　いや、飲めたらいいのにと思うときがある、というべきかもしれない。
　みんなで飲み会をやっているときは不思議と感じない。ノンアルコールでも十分楽しいし、車の運転手もやれば感謝される。
　飲みたいと思うのは一人で部屋にいるときで、たとえばふとした読書の合間などに、そう感じる。
　作中で美人の女が、命がけの勝負にでかけていく男の背中にたまらず声をかける。
「駿河さん…!」
　男は背中越しに少しだけふりかえり
「大丈夫さ。待ってな。」
などと言う…
　そんなシーンにさしかかると、ふと余計なことを考える。
　ここで姓でよぶのはどうなんだろうということだ。
　普段は姓でよんでいても、こんなときだからグッと近づいて、名で呼んでもいいんじゃないか、と思ってみたりする。
　これはこんなこととはちがうのだ。
　たとえば俺の失敗ではないにしろ、俺にはどうしようもないことで先輩が呼び出される。
俺はたまらず声をかける。
「…春日部さん…!」
　すると先輩は背中越しにふりかえり、ニヤリと笑う。
「心配するな、日向、まかせとけ。」
　眼鏡がキラリと光って…
　ここなら「春日部さん」でもいい。
　男同士、先輩後輩で、しかも仕事がらみで、命はかかっていない。
　…しかし、と考える。

　多分俺は「春日部さん」じゃなく「先輩」というだろうな、と。そもそも大学をでてから春日部綾人以外の先輩に会っていない。そして先輩は「日向」ではなく「タカちゃん」と言うに違いない。
ちょっと冗談みたいな言い方で…。
　で、逆にここで俺が「綾人さん」なんて言うのもグッと距離が近すぎる。それではなんだか…。それで先輩が「孝道」なんてよんだら…それはなんだか近すぎていかがわしいような…
　…
　…
　…
　ナニを考えてるんだ!!
　孝道は頭をぶんぶん左右にふって立ち上がり、ウロウロと歩き回った挙句、コーヒーかなんかをのみ、頭がさえてますます変なことを考えてしまう。
　…俺あの人のこと「綾人さん」てよんだことないけど、あの人おれのことたまに「タカミチ」って呼ぶよな…たまによっぱらって抱きついてきたりするし、頭なでたり、アニキって感じともちょっとちがう…
　でもなんか嬉…
　そこでまた頭をぶんぶん振って残りのコーヒーを飲もうとすると、すでにコーヒーはカップにない。
　しかたなくそのカップに水をいれてだらだら飲むと、その水はなぜか甘いのであった。
　…こんなとき、ああ、俺も酒が飲めたらなあ、と思うのである。

砂浜のロープ

　孝道たちのすむ北国に、短い夏がやってきていた。
　海水に入れるほど暑い日は少ない。だから海水浴といっても、テントをはって寒さ対策をし、その表で焚き火をたいてジンギスカン(ジンギスカンはとにかくアウトドアとセットなのだ)をしながら、ガタガタ震えてビールやコーラを飲む。
　どこかでみたような風景だが、ロケーションが違うし、衣装が違うし、一応、海の家もある。
　海の家には「みそおでん」という具材がバラエティにとんだ味噌田楽のような食べ物がうっていて、ホットなのだが、これがうまい。
　綾人はカナヅチで、孝道は下戸。
　これで二人で海水浴に来るというのだから大したものだ。

　綾人が夏の初めに、ネッシー型の浮き輪(？)を衝動買いして、どうしても使いたいというので、孝道が付き合うことになった。
　浮き輪に穴が開くから岩浜は嫌だ、あそこは潮が速くてこわいから嫌だ、あそこにしよう、と、カナヅチのわりに意外に詳しい綾人だった。
　ネッシーにつかまって波にぷかぷかゆられたあと、寒い寒いと引き上げて、二人で味噌おでんをたべた。
「味噌おでんて、なんか、…海水浴のとき足りないものをバッチリ補給してくれる味なんですよね。」
「これ北海道限定ってしってた?俺しらなくてこのあいだネットであやうくケンカしそうになったわ。」
「ああ、よそにはないらしいですね。うまいのに。」
「ほら本州は暑いからさ、海からあがっても寒くないんだよ。」
「だからおでんがないんですね。」
「風がでるまえに火起こそうかな。」
「そうですね。」
　綾人はネッシーを大切にテントに押し込むと(人間のはいる隙間がほとんどなくなった、)バーベキューセットに炭をいれて、着火剤をのせ、火をつけた。
　孝道がパーカーを羽織ると、何やらじっと見ている。
「…火傷しますよ、よそ見してると。」
「…肉とって。」
「先輩もなんか着たほうがいいですよ。」
「いいの俺すこし灼くの。」
「今時、皮膚癌になりますよ。」
「そうか。」
　孝道は綾人の上着をネッシーの隙間から探し、みつけたＴシャツを引っ張りだして手渡した。
「…なあタカミチ、俺さっきから気になってんだけど…」
　綾人はシャツを受け取りながら、じっと孝道を見つめた。孝道はどきっとした。
「え…なんですか…」
「…あそこにころがってる長ったらしい縄と黒いものなんだと思う?」
　綾人は孝道の腰の辺りを指した。孝道はどぎまぎしながら後ろを振り向いた。
　…たしかになにか、ロープのようなものと、その途中に１メートルおきぐらいにロープに絡んだ黒い塊がある。
「…見てきます。」
　孝道はなぜか無性に恥ずかしくなって身を翻し、その謎の物体の方へ行った。
　近づいてみると、ロープはロープだった。そして黒いものは…
「これは…」
　孝道は驚いて、周囲をさっさっと見回した。…何箇所かで焚き火がたかれ、テントもざっと10

はあったが、だれも気づいていない。
　孝道は10センチほどの黒いものを二〜三個むしりとって(かなりがっちり絡んでいた)
綾人のほうへ走って戻った。
「先輩!」
　シャツから出てきたばかりの綾人の手に黒いものを押し付けた。
「…なんだこれ…ムール…」
「しっ」
　孝道は綾人の口を思わずふさいだ。
「…養殖のロープが切れて流れて、打ち上げられたんですよ…!まだ口ひらいてません!」
　綾人はがばっと立ち上がり、ネッシーの隙間からスーパーのビニール袋を引っ張り出して、ロープの方へかけていった。孝道もすかさずあとを追う。
　二人は素早く黒いものを全て回収し、ビニールにつめると、何食わぬ顔で、自分たちの火を挟んですわった。
　羊肉や野菜とともに焼き網のうえに黒いものをのせる。
　綾人はわくわくした顔でビールをあけた。
　孝道はコーラだ。帰りは孝道が運転する。
「…俺、これ好きなんだよな。スパゲティとかにはいってると、たのんじゃう。」
「僕もすきです。殻が黒くてグロテスクですけど、身がオレンジできれいですよね。」
　くろい物体はやがて、すこし震えてから、耐え切れなくなったように、ぱかっぱかっと次々二つに割れた。
　中には孝道がいったとおり、オレンジ色や白の身がふんわり詰まっていた。
　二人は小声で歓声をあげた。
「うわーうまそう。」
「おおきいですね!」
　割り箸を割って食べる。
　海の香りがして、スパゲティにはいっているものより断然うまかった。
「…意外とみんな気づかないものなんですね。」
「砂浜にいるやつらは、からす貝で足切ったことなんかないんだろな。」
「痛いですよね。…からす貝ってよんでました?」
「うん、俺らんとこはね。…ビールに合うんだ、これが。」
「コーラにも合いますよ。」
　二人はご機嫌でムール貝とジンギスカンをつついた。
　…こんなに楽しんでいる男二人の海水浴はほかに見当たらないことに、当の二人だけが気づいていなかった。

炭酸

　盆もすぎて九月も目前の水曜日、日は照り付けていたが風は涼しく、日陰を伝って歩けば、それほどつらくもなかった。
　暖簾をくぐった定食屋は具合の悪いことに満席で、孝道はあきらめて店を変えようとした。
「タカミチ。」
　呼ばれて顔を上げると、先輩社員の綾人が四人席にたまたま三人で座っていた。
「来いよ、あいてるぜ〜」
　残りの二人も綾人の同期の馴染みの顔だ。これは助かったと思い、孝道は相席させてもらうことにした。
　せかせかとやってきた店員からお絞りと水を受け取ると、
「日替わり定食A、のみものはコーラ」
と短く頼み、冷たい水を半分ほど飲んだ。美味い。
「コーラでいいの、日向。ここ、先週からラムネが入ったんだぜ〜」
　先輩の一人がいった。
「え、ラムネ。なんか懐かしい。」
「それもビン入りのやつ。ペットボトルじゃなく。ちゃんとビー玉がはいってる。」
「へぇ、レトロ。しゃれてますね。」
「まあそんな俺らは食後はアイスコーヒーだけどな。飲んでたのはよそのひとだけど。」
　もう一人の先輩が笑って言った。
「いつも一緒に昼食べてらっしゃるんですか。」
「時間が合うときはな。四人になったり六人になったり二人になったり。忙しいときは無理だけど。」
「日向もよかったら時々まざれよ。」
　そのときだまっていた綾人が口をひらいた。
「…タカミチはコーラかジンジャーエールが多いよな。好きなんだろ。」
「好きです、コーラの赤いやつ。ダイエットコークはあまり好きじゃない。パンチがたりないですよ。」
「人口甘味料って結局体は糖分とみなすらしいぜ。だからダイエットなにがしとかは意味ないらしい。」
「人口甘味料はおいしくない。やっぱり砂糖ですよ。飲みすぎなきゃ大丈夫です。」
　先輩たちの定食の盆が先に届いた。綾人は焼き魚定食だ。魚はアジの干物だった。
「…これ今日のA定だよ。」
「魚久しぶりだな。食べたかったからよかったです。」
　少し遅れて孝道の定食がとどいた。綾人と同じだ。一緒に、四人分の飲み物が届いた。二人の

先輩はアイスコーヒー、綾人はアイスティー、そして孝道のコーラ。孝道のコーラと綾人の紅茶には、レモンが入っていた。
「…お、レモンおそろいw」
　綾人はニヤニヤ言った。
　二人の先輩は孝道のコーラを覗き込んだ。
「コーラにレモンて合うのか」
「たまにみかけるけどね。」
　孝道は応えた。
「…入っててもあまり味はかわらないです。まあ、すずしげってだけ。」
「そうなんだ。」
「ここの店いろいろサービスいいよな。」
「もうけでてるのか心配って話もある。」
「でも客の回転も速いよな。」
　その言葉どおり、もう先輩たちの定食は半分まで減っていた。

　店を出て、二人の先輩の前を、綾人と並んで歩いた。
　綾人がコソっと言った。
「…派閥なんだよ。女子高生みたいだろ、一緒にご飯、なんて。わらっちゃうよな。」
　孝道はびっくりして綾人の顔をみた。
「…たまにつるむかは好きにしていいけど、炭酸好きの自分をなくすなよ。」
　綾人はひそひそそう言って、孝道の肩を自分の肩でちょい、と押した。
「なーに内緒話してんだよ。」
「お前ら仲よくて気持ち悪いぞ!」
　不機嫌そうに後ろから野次がとんだ。
「いつからそんなに仲いいんだ。大学時代からか。」
「いや、青田刈りしてから。大学時代はタカミチは同期の友達と遊ぶのにいそがしかったもんな?」
「あまり遊ばなかったですよね、今のほうが遊びますよね。」
　そういって二人、申し合わせたように手をつないで大きく陽気に振ると、
「やめろーこのホモーっ!」
「仲良くてきしょいーーー」
と後ろの二人はげらげらわらった。

白熊

「暑い!　もう九月だぜなんだよこの暑さは!」
「昔『私達は日本の避暑地に住んでいる』っていう丸井今井札幌のCMありましたよね…時代が変わったんでしょうか…」
「丸井今井も三越と合併しちゃったからな…」
　孝道と綾人はふーふー言いながら、取引先からの荷物を運んでいた。
　車で来ればよかったのだが、荷物を運ぶ予定ではなかったので、一方通行が入り組む道の向こうにある取引先まで、車で行くより歩いたほうが楽だとふんだ結果がこれだ。
　荷物はダンボールに二つだった。それぞれ一つずつを抱えながら秋らしくない灼熱の太陽に焼かれる、スーツの二人だ。
「…なータカちゃん忙しくないだろ。さぼっちゃおうか。」
「え」
　突然の申し出に孝道はドキっとした。
　こういうとき、綾人は妙に甘えた声をだす。
「さぼっちゃう、んですか。」
「いいじゃんこんなクソ暑い中やってらんねーよ会社冷房切ってるし省エネするならクールビズしろってんだスーツ着せやがってクソ支社長」
　そういうと、綾人はくるりと方向転換して、こっちこっち、と孝道を呼んだ。
　孝道はいろんな意味でドキドキしながらついていくと、綾人は裏通りにあるマンションの階段を上り始めた。
「ここいーだろー近くて。八時までに起きればぜってー遅刻しないんだこれが。」
「えっ、…って、ここ…」
「俺んち、俺んち。」
　孝道は心臓が飛び出すほどびっくりした。
　綾人の家に招かれたのだという認識が突拍子もない妄想を呼び、頭の中をいろんなことがぐるぐるかけめぐった。
「だっ…い、いけませんよ!先輩、…し、仕事中に。」
「俺たちがいなくてもだれも気にしねーよ。あー暑い。わりぃな、エレベーターねーんだわ。」
　最上階の5階まで上がると変なことは考えられないほどへとへとになった。
　綾人は慣れているのだろう、汗こそ流していたが涼しい顔をしている。
「鍛え方が足りないねえ、タカちゃん。さ、入って入って。」
「…はー…はー」
　…返事にならない。
　そのまま玄関に荷物を置き、かすむ視界のなか綾人の背中を追って部屋に上がった。
　綾人が窓をあけると、おもわぬ涼しさの風が部屋を通り抜けた。
「涼しいだろ、これだけ高さあると虫も入ってこないんだぜ。網戸不要。上着脱いでネクタイ緩めてその辺に座んなさい。」

　そのへん、とソファを指差す。
(ああっ、先輩ネクタイとってソファで何するんですか)
とぼんやり思った。
　息が落ち着いてから見回すと、きれいに片付いた小ぢんまりした部屋だった。
ドアは4つ、入ってきたのが玄関のドア、トイレのドア、風呂、…あともう一つは寝室だろう。
(…寝室…。)
　壁は文庫本が並ぶ本棚、背の低い食器棚の上には電話と酒とコンポ。ソファの向かいには薄型テレビ。
「…一緒に白熊食おうぜ。」
「はいっ?!」
　一瞬何をいわれたかわからなかった。
　ベッドに誘うときの隠語にしては何かおかしい、と妙なことを考えた。暑いせいだ。
「白熊。」
「あっ、旭山動物園から逃げ出した…」
「それはフラミンゴでしょ。熊が逃げ出したら戒厳令だよ。」
　そういいながら、綾人は冷凍庫から白く冷えた煙をあげる小さめのどんぶりほどのものを二つ取り出し、電子レンジにいれた。数十秒ですぐとりだす。
「大学の、俺の同期の有水ってやつしってる?あいつがさ、夏になると白熊くいてぇ白熊くいてぇって言ってたから、あの動物園のでかいやつ食うのかよっていって、いつもからかってたんだよ。…卒業して実家の鹿児島に戻って以来、毎年送ってくれるんだ。まあ、食ってくれ。たくさんある。」
　スプーンとともに出てきたのは、かき氷だった。
　白熊というのはどうやら商品名らしかった。
　かき氷の上にドライフルーツと缶詰のみかんが凍っていた。
　蓋をあけて勢いよくスプーンを突っ込んだら、意外なことにさくっとささった。口に含むとふわっとしている。
「レンジにかけたからね、やわらかいと思うよ。」
「かき氷にレンジ…カルチャーショックです。」
「だろ。俺も最初は驚いた。説明書にそうしろと書いてあるんだよ。冷凍で送ってきてるからね、硬くなってるんだろう。」
　冷たくてうまい。ずっっっしりと、甘い。練乳の味だった。そのわりに後味はさわやかだ。汗をかいた体に糖分が染み渡る。
「うまいっ!」
「鹿児島の暑さと戦うにはこのくらいのパワーが必要なんだろうなあ。」
「あついんだろうなあ、鹿児島かぁ…」
　二人で茶漬けを食うような勢いで食べた。
　頭がキンキンするのも気持ちいいくらいだった。

「ああウマー。…タカちゃん涼しくなった?」
「汗、引きました。今日みたいな日には最高ですね。」
「さーて、それじゃお仕事にもどりますか。」
　二人は再びネクタイを締めて上着をはおり、ダンボールをもって階段を下りた。
　相変わらず地上は暑かったが、気分はさわやかだった。
「タカちゃん」
「はい」
「ウマかった?」
「はい!」
「気が向いたらそのうち帰り寄っていいよ、まだあるから。」
(帰りって、帰りって、帰りって!!)
　クールダウンして収まっていた妄想が再びぐるぐるまわりはじめた。
「ね。」
「はっ…はいっ!!」
(寝室!　寝室!)
もはや自分が何を考えているのか把握できない孝道だった。

本社からの客

「遠いところご苦労様です。わたしは春日部綾人です。鞄持ちます。札幌滞在中なんでも命令してください。」
　綾人は千歳空港の駐車場に本社からの出張社員を案内しながら、極力面倒な敬語などを省いて言った。
　というのは、お世話を申し付かったこの本社の上司は、金髪のアメリカ人だったからだ。
「綾人、お世話になりまス。ディーン・ホワイトでス。ディーンでイイ。ホワイトさんやめてくだサイ。さびしいでス。仲良くしましょう。友達。綾人、奥さんいまスか。」
「いえ、独身です。」
「独身の人、良いでス。一緒に遊べまス。ススキノ憧れありまス。世界一北の歓楽街。雑誌で読みまシた。」
　やたら人懐っこく本社の外人上司は綾人に抱きついてきた。
　なんとなくアメリカ訛りだったが、有難い事に日本語はぺらぺらだった。
　支社につれて帰ると、みながその見事な金髪に、一瞬目を奪われた。ディーンは日本の基準で

はイケメンだった。アメリカではどうなのだろう。細すぎる気もする。
　一通り案内してお偉いさんとの挨拶が済み、座って一休みしていると、なにやら恨みがましい目をして孝道がアイスコーヒーを持って来た。
「コーヒーをお持ちしました。」
　目を伏せていうと、丁寧にコーヒーを置いた。
「あ、彼は日向孝道です」
「綾人の部下でスカ」
「いいえ、でも同じ大学なんです。年下です。」
「おお、後輩でスね。」
　孝道はいつもと違い、愛想もふらずに一礼して立ち去った。挨拶させるつもりだったので綾人は奇妙に思った。そもそもコーヒー…だれか女子はいなかったのか。
　ディーンは言った。
「…日本人らしい美しい青年でス、目がきれいで雄弁でス」
　綾人はドキっとした。
　なぜここで孝道の容姿批評がでてくるのだろうと思った。
　するとディーンは不敵に笑った。
「フフフッ、わかりまスよ綾人。心配ない。」
「は?」
　ディーンはいいよいいよ、と言うように手を動かした。

　ホワイト氏は一週間ほど札幌支社に滞在し、海外支社との面倒なやりとりをすべてひきうけてくれた。新しい部署の立ち上げがなんとか形になり、ホワイト氏が帰京する日まで、綾人は主に毎晩ススキノで活躍した。
　アメリカ人はやせていてもパワフルで綾人はフル稼働を余儀なくされた。
　連日へとへとになったが、そんな日々もじきに終わった。
　帰りの便は夕方だった。
「すっかりみなサンと仲良くなれて楽しかったでス。東京帰るの名残惜しい。」
「またきてください、まだまだ行ってない店が沢山ありますよ。」
「そうでスね、今度はジョソコのいる店いきたいです。」
　綾人は思わず両手を上げてバンザイしそうになった。
「え、ジョソコって、あの、おかまバー?」
「おお、そうでス、おかまバー。綾人も好きでスね?わかりまス。札幌支社は人選がウマい。」
「ちょっ、まっ、俺は…」
「隠さなくてもはずかしくナイ。美しい孝道、綾人のハニーね。わたしがいた間寂しい思いさせてすまなかったでス。」
「いや孝道は大学の後輩で…」
「日本の先輩後輩はスイートな仲でス。東京で知りまシた。心配ないわたしは差別しナい。今度

わたしも孝道と遊びたいでス。つれてきてほしいでス。何もしません。大丈夫でス。」
　本社に怪しい先輩後輩がいるらしい。
　綾人は慌てたが、慌てれば慌てるほど、ディーンに宥められるだけだった。
　そして搭乗ゲートから満面の笑みで手をふる金髪を、綾人は手を上げて呆然と見送った。
「…そうか、俺とタカちゃんて…外人から見るとスイートなのか…ひとことも口きかなくても…」
とても複雑な思いのする綾人だった。

凶夢

　孝道は、田舎で野菜と牛乳をおやつに育ったので、都会の甘いものをふんだんに与えられて育った人間より、歯がきれいな自信がある。幸か不幸か、孝道に虫歯をうつした女性も今までの人生にいなかった。キスをしたことがないという意味ではないが、向こうも牛乳と野菜で育っていたのであろう。というわけで、歯医者に行ったことが一度もない。
　そんな孝道だったが、ある日の明け方、奇妙な夢を見た。きれいにそろっている白い歯が突然一本抜けるという夢であった。あまりの衝撃に飛び起きた。
　すると恐ろしいことに、まだ薄暗い部屋の中で突然電話に着信のランプがつき、けたたましい音を立て始めた。なんというタイミング。孝道はかすれる声を振り絞って電話にでた。すると、懐かしい故郷の声が、受話器の向こうで、疲労していた。
「…孝道かい。お母さんだよ。
…急だけどね、お父さんが夜中にトイレへいこうとして、たおれてね、…脳卒中だって。…ポックリ逝っちまったよ。床が冷たいからスリッパはけってあれほど言ったのに…きかないんだから…」
　母はフウとため息をついた。孝道は来たか、と思った。父は年だったし、自分は大人だ、もういつ別れが来てもおかしくないと思っていた。
「…と…とにかく今日中に帰るよ!」
「…そうしとくれ。…母さんあちこち電話するから、話は会ってからゆっくりね。」
　母のほうから電話は切れた。
　歯の一本抜ける夢は身内の死の前兆というが、まさしくそれだった。
　まだ未明であったので、帰省準備をする時間が十分にあった。孝道は押入れからトランクをひっぱりだし、中に入れっぱなしのものを点検し、足りないものやら下着やら携帯食やらをつめた。

(事務が開いたら会社に電話して…えっと、忌引き、だな。一親等だから…数日休めるはずだけどな…)
　そう考えて、孝道はふと、綾人の顔を思い出した。
(…先輩に電話…する…ことじゃないよな…。会社のミーティングでわかるだろうし…ミーティングで…)
　そうしたら、綾人はどうするだろう、と思った。
(もしかして、もしかして、上司と葬式にきてくれたり…とか…それで…「孝道!」とかいってかけよってきて…「大丈夫か、孝道」「先輩、大丈夫です、親も年なんで覚悟はしてたし…」「水臭いな!どうして俺に電話くれなかったんだ」「急だったから…」そんで「孝道、安心しろ、俺が何でも手伝うから…葬式大変だからな」とかいってぎゅーってだきしめて…「キスはダメだな、虫歯がうつる…」「そんなこと…先輩…なんでも手伝うって今言ったのに…」って…)
　…そこまで妄想して孝道はざざーっと青ざめた。
(何考えてるんだ俺は!!おやじが死んだっていうのに)
　思わずトランクのふたをばん！と閉めて、わきからパンツの柄が覗いてるのをみてあわててまた開け、しまいなおして再び閉め、閉めたトランクに両手をついて孝道は
「…こんな息子で…悪かった…ごめん…おやじ…」
と、本気で詫びた。

故郷

1

　葬式というものは死んだ者のためではなく、生き残った者たちのための儀式だ。忙殺することによって、沈み、混乱しがちな近親者の死という事件から気を逸らす。
　雪の道をレンタカーで田舎の家にたどり着いたとき、すでに家の中は戦場と化していた。室内円筒が赤くなりそうなほどごうごうと燃えるストーブの居間に、葬儀会社が出入りして、喪主である母に次から次へと営業を仕掛けたのだ。母はメモを片手に、せかせかしていた。
「おかえり、孝道。早速で悪いけれど、遺影にする写真を選んでくれないかい？その間にあたし飯でも作るから。…ついでに電話番もしといとくれ。」
「忙しそうだね。遅くなってごめん。」
「なに、早いさ。まだだれも来ちゃいないよ。」
「何も食べてないの？大丈夫？」
　何かすぐ食べられるものを途中で買ってくればよかった…。田舎にはコンビニがない。気の利かない自分を悔やんだ。だが、母は気丈で論理的な女であった。
「あまり空腹は感じないんだけどねえ。でも動けなくなるといけないし。気が滅入ってもいけないし。おにぎりと味噌汁だけでも、食事はしないとね。」
「可奈は？」
「まだ役にたたない。…いいスーツケースじゃないか。買ったのかい。」
「うん。出張用だよ。」
「四十九日がすんだら旅行に行きたいから、そのとき貸しとくれよ。」
「…買ってやるよ。若くて華やかな、元気の出るやつ。…写真、出してある？どこ。」
「そこ。テーブルにあるよ。」
「ん。分かった。…ちょっと可奈に声かけてくる。」
「ほっときなよ。そのうち泣きやんで出てくるだろうさ。」
「…まだ高校生だから。」
「女の高校生は大人だよ。」
「…うん。ちょっとだけ。」
　妹は、寒い階段をのぼった先の二階の自室にこもっていた。無理もない。ただでさえ未来のないド田舎なのに、こんなに突然、父親に死なれるとは思わなかったのだろう。…これからは俺が仕送りすることを考えなくてはならない。
　親父はない金をかき集めて、俺を大学にいれてくれた。可奈も大学にいかせてやりたい。俺の給料で妹を大学にいれてやれるだろうか。…わからない。俺は結婚する予定もないし、高級車にのる趣味もないから、俺自身が多少苦しいのはかまわないが…。はたして学費というものは、俺

の給料で手が届く額なのだろうか。どこかから融資を受けなければ足りないだろうか。学校にもよる。成績が良くないと学費の安い大学には入れないはずだ。可奈は勉強しているのだろうか。それもわからない。田舎の小さな高校では、それほど落ちこぼれてはいないはずだと思うのだが、男勝りといやがらせを言われるほどの勉強家でなければ、安い大学には入れない。
　部屋のドアをコンコン、と叩いても返事はなかった。
「…可奈、にーちゃんだぞ。入るからな。」
「…」
　部屋の鍵はかかっていなかった。この部屋の歪んで開きにくくなっているドアを開けるには、特に冬場はコツがいる。幸いまだ手が覚えていた。
「…にーちゃん、お帰り。」
　俺の顔を見て、可奈は目をこすった。涙のあとで顔が汚れている。
「…急で驚いたよ。大丈夫か。」
　可奈は俺の顔をみて、キリっと顔を引き締めた。
「うん。」
「…今戻ったところなんだけど、かーちゃんに、写真選びと電話番、さっそく仰せつかったんだ。…お前も手伝ってくれる？」
「…それはいいけど…にーちゃん、畑とか、どうなるの？」
「お前も俺も手伝わないなら手放すしかないだろうな。かーちゃん一人じゃ無理だろう。…その金で街にでたら。」
「…売れないよ、こんな田舎。」
「売ってみなきゃわかんないだろ。…そういう話はあとでいい。今はとにかく、葬式を出すことを考えないと。」
　可奈はおずおず頷くと、ベッドから立ち上がった。
　可奈をつれて居間に戻ると、電話がかかってきた。可奈は自分から手を伸ばし、電話を受けた。どうやら親戚のようだった。明日には行ける、という話らしい。田舎の風情がする親戚のでかい声が受話器から漏れていた。可奈は顔をしかめている。
　親父は生真面目な顔で冗談をよく言い、そのギャップに魅力があったのか、広大な村の、たまに行われる小さな寄合では人気者だった。人柄がいい、とよく言われた。真面目顔の写真が多かったが、中に一枚破顔している珍しい写真があったので、電話の済んだ妹に見せると、「これがいいよ」と妹も同意してくれた。
「孝道、可奈が電話番してくれるなら、あんたはちょっと買い出しにいっとくれ。雪かき手伝ってくれているご近所がそろそろ作業から上がるから。お茶とか、つまみとか。…車借りてきたんだろ？まあうちのトラックで行っても、お前がいいって言うならかまわないけど。」
「ああ、わかった。」
「ほら、これ食べてから行きな」
　母は昆布ののった握り飯に海苔を貼りつけながら差し出した。
「食べられる時に食べないとね。」

母のくれた握り飯を食べながら、車にむかった。
とにかく人が死ぬと忙しい。母は供え物やら棺桶やら花やらをまたぞろやってきた葬儀屋にぼったくられながら選び、検死の済んだ遺体を葬儀屋と一緒にひきとりに行った。近所(といっても半径5キロだ)の人たちが、何人かで大きな除雪車を出して、うちに至る道路の除雪をしてくれた。進行形で大雪が降っていなかったのは幸いだった。
親父が死んで悲しいという気持ちは、不思議なことにあまりなかった。死んだという実感がなかったというのが正解かもしれない。俺はけっして親父が嫌いではなかったはずなのだが、不器用に属する親父にさほど可愛がられたという記憶もない。だが、可奈は可愛がられていた。可奈は、あの親父とこの母の間に生まれたとは思えないほど、かわいらしい娘だった。母はやりくりして、可奈のためにいつもきれいでしゃれた服を用意してやっていた。俺も可奈のことはかわいい。ただ、可奈が親父の死を悼んでいるのをみると、気分が妙に冷めてしまった。あたかも自分が部外者であるかのような心地がした。
自然死の診断書つきで検死から帰って来た親父とようやく対面したが、「きれいに洗うと意外と二枚目だったんだな」という間抜けな感想しか出てこなかった。生きている間、親父は辛抱強くよく働き、いつも泥だらけだった。死に顔は苦しそうではなかった。少し笑っているようにさえ見えた。これは天国行きだな、と思った。
通夜は明日、と言って、ドライアイスを首の下にいれ、葬儀屋は一旦ひきあげていった。あっというまに夜になっていた。
「かーちゃん、花多すぎじゃない？一個十万て…。ぼられてる。しかもそれを二つ？」
「そうなのかい？相場がよくわからなくてね。…でもピンクがないと、少し祭壇が寂しいだろう？」
「白だけで良かったと思うよ。」
「今更間に合わないよ。」
「まあかーちゃんの好きにして良いけど…。金大丈夫なの？」
「香典がくるだろうさ。」
「…のんきだなあ。坊さんにも金出さなくちゃいけないんだよ？足りるの？」
「うるさいね、黙っとくれ。」
母はぴしゃりと俺をはねつけた。
…多分金は足りてない。香典頼みなのだろう。
俺の金は可奈の今後のために少しでも取っておかなくてはならない。それでも二〇万くらいなら今出せるだろうか。ボーナスを残しておいてよかった。
母は、棺も布張りのしてある良いやつにしてしまったようだ。どうせ燃やすだけだというのに。坊さんなんか呼ばずに音楽葬等にすれば安く上がるのだろうが、寺と檀家というのは田舎ではつながりが強い。なかなか断るわけにもいかなかった。墓誌に刻む戒名も必要だろう。キリスト教が安いと聞いたこともあるが、そもそもこんな田舎に教会はない。俺は溜め息をついた。
「…孝道、農協の共済にはいっているから、葬式代のことは気にしなくていいよ。」
母が何を思い直したのか、静かに言った。

「あっ…そうなの。…よかった。ちょと心配してたよ。」
「…可奈が上がったら風呂に入って寝ておくれ。明日も忙しいだろ。通夜だし、あのクズの親戚共が集まるからね。」
「かーちゃん先に入れよ。」
「うるさいね、最後にはいったら風呂掃除があるんだよ。つべこべ言わずにいうことを聞きな。」
「…風呂洗って床拭いて雑巾干せばいいんだろ。そのくらいやっとくよ。自分とこではちゃんとやってるし。」
「いいからいうこと聞いとくれ！」
　母は怒鳴った。
　母はもともとカッとなりやすいほうだ。そして今はさらにそうだった。精神的に余裕がないのだろう(あるはずがない)。布団に入ってもすぐには眠れそうにないから、最後にゆっくり風呂にはいって一人の時間を持ちたい、と思ったのかもしれない。つくづく、俺は気が利かないな、と思った。
「…わかった。じゃあ先に入るよ。」
「…」
　母は顔をしかめたまま　ぷいっと向こうへ行ってしまった。

2

　翌日は午前中から親戚が到着し始めた。父方の親戚は勿論だが、母の姉も来た。田舎の朝は早いので、皆すでに一仕事終えての到着だった。冬は畑仕事がないので、町からの委託で公道の除雪などをして現金を稼いでいる。父の二番目の兄に当たる健司伯父が、尊大な態度で母に指図を出し始め、母はけんかになりそうなぎりぎりの精神状態で仕事をさばいていた。健司伯父は偉そうに仕切っているような素振りではあったが、その実は何もしないで茶席でくつろいでいるだけだった。せめて会場まわりの雪かきをやってほしいと俺たち家族は思っていたのだが、誰も伯父に言って伯父の気持ちを損ねる勇気が出なかった。伯父は怒るというよりはふてくされるタイプだ。葬式でもめ事になるのもみっともない気がした。
　そのうち父の弟が、義姉さん、ビールはないの、と言い始めた。母はさすがに腹に据えかねたのか、「辰っちゃん、自分で買っといで。あんた車だろ。近所の人が除雪してくれたから、車で行けるよ」と、かなり強い語調で返した。すると辰也叔父は「店に電話して配達してもらえばいいじゃない」とあっけからんとした様子で言った。それこそお前が自分でやれよ、と俺が言いかけた時、母の姉が「あたしが買ってくるよ」と割って入った。「少し待っててね。」とにっこりすると、出ていった。そして玄関の外で「だから男は」と大きな声で言った。乱暴に車のドアを閉める音が、ばん！と鳴った。

…アホが何人かまざっていると、男だというだけで、俺まで立場が悪くなる。しかし言われた当人は澄ましたものだった。そして健司伯父が嘲笑って言った。
「気が利かないねえ、理子ちゃんは。お姉さんも苦労するわな。」
…理子(りこ)ちゃんというのは母のことだ。
母はぐるりと向きを変えてどすどすと台所へ消えた。伯父の奥さんがハラハラしたようすで母のあとを追った。
ところで、辰也叔父の色っぽい嫁さんは、そのとき夫のとなりでスリムメンソールの煙草をふかしていた。この人は愛さんという。
「…ねえ孝道、あんた可愛くなったわねえ。ちょっとこっちへ来て話し相手しなさいよ。…ところで灰皿ないの？この皿使っていい？」
この皿、というのが客用の良い小皿だったので、俺は慌てて戸棚をかき回した。
…父方の親戚は万事この調子なので、母は以前から嫌っていた。親戚の集まる盆暮れは母のヒステリーアワーである。まだ父の一番上の兄が生きていたころは少しましだったのだが、彼が農機具の事故で亡くなって以来、残りの伯父たちのダメっぷりが顕著になったように思う。とくに素養もなく突然家長に躍り出た次男の健司伯父のポンコツぶりといったらなかった。三男の父がなまじ忍耐強かったのもいけなかった。父方は男ばかりの四人兄弟だった。
「…あらわざわざ出してくれたのね、灰皿。ありがと。あたしはこの可愛いお皿でもぜんぜん良かったんだけど。まあいいや。…ところで孝道、あんた女はいるの？…いるんでしょ、こんなに垢ぬけて可愛くなっちゃって。女にお世話してもらっているんでしょ？…いつ結婚するの。どうして連れてこないのよ。」
…親戚というものはどうして顔をみると結婚の話しかしないのだろうか。その件に関して俺は(とくに田舎の価値観では)不治の病にかかっているようなものだというのに。
「いや、とくにそういう女性は。」
「嘘おっしゃい。あんた札幌で大学まで出してもらって、相当遊んだんでしょ？あたしの目はごまかせないわよ？女の世話なしでこんなに垢ぬけるわけないじゃないの。畑のジャガイモみたいな坊主だったくせに。」
…女がいないと垢ぬけてはいけないのだろうか？
「…ハハーン、アレね？今、新しい女とは微妙な時期で、親戚に紹介するタイミングじゃないのね？そんな重いことしたら逃げられちゃうかもしれないってわけ。それならいいわ。…どんな子？」
「…いや、だからそういう女性は、いないので。」
「隠さなくてもいいじゃないの。」
「隠してるわけじゃなく、本当にいないので。」
「…ひょっとして、まだつきあい始めてないのかしら。…好きなひと、ってやつね？」
どきっ、として一瞬詰まった。可奈の視線が突き刺さってきた。まずい、と思った。得たり、とばかりに愛さんはソファで足を組み換え、すり寄ってきた。
「孝道ィ」

　ニヤニヤ笑ってからかうように言う。
「…どんな女よ。おばさんに言ってごらーん。どうしてモノにしないの。あんたみたいな可愛い子に言い寄られていやがる女なんかいるはずないじゃなーい。…それとも、人妻？職場の美人年増？年上でも気にすることないわー。人の物なら略奪すればいいのよ、あたしみたいに。」
　…愛さんは辰也叔父の二人目の妻だ。一人目のもと妻は今、辰也叔父との間に生まれた娘と一緒に旭川で暮らしているときいている。別段父と仲が良かったわけでもないので、勿論来ていない。
「…いや、あの、本当にそういう女性はいないので。」
「とって食ぃやしないわよ。もう、可愛いわねえ。」
「おい、そのぐらいにしといてやれや。孝道は父親が死んだばかりなんだ。女の話する気分じゃねーべよ。」
　珍しく辰也叔父が常識的なことを言った。
　愛さんが一瞬気をとられた隙に、俺はその場からするりと抜け出した。
「…すみません、母を手伝わなくちゃいけないので。」
　そう言って寒い台所方面に逃げた。
　…可奈の視線が痛いほど追いかけてきた。

3

　通夜と葬儀の会場は、自宅では狭いので、町内会の集会所を借りることになった。父の遺体はすでに葬儀屋が納棺してくれて、集会所に運んでくれていた。我々も車に分乗し、会場へ到着した。葬儀会社の人たちが、ポンコツな親戚どもを控えの間に案内した。部屋は暖房で暖まっていて、つまみや飲み物も準備されていた。…助かった。俺みたいに気の利かない人間は、葬儀屋にはなれないな、大変な仕事だ、と思った。
　きれいに化粧されて納棺された親父の顔をみていると、可奈が忍び寄ってきた。黙っていると、隣に立って、にーちゃん、と言った。
「…にーちゃん、好きな女の人、居るんだね。」
　突然の爆撃に俺は思わず
「えっ」
と、大きな声を出してしまった。
「…、そ、そんなことはないよ。」
「あたしに嘘つかなくてもいいじゃない。」
　可奈も親父の死に顔をぼんやりと見つめた。
「…にーちゃん、たとえその人が、たとえばお水の人だとか、もっとあれなら、ほら、ええと、風俗の人だとかでも、あたしは、にーちゃんがその人を好きなら、応援するから。…だからあた

しには嘘ついちゃやだよ？あと、子供が出来たら結婚してあげて。堕胎させないでね。堕胎って女の人の体にすごく良くないの。学校で保健室の先生に習ったんだよ。」
　…妹の想像の中では、俺はどうやらススキノの女性にいれあげていて、そしてすることもとっくにしてしまっているらしい。
「…わかった。もしそういうことになったときは、きちんと責任とるから。…でも、俺、好きな女性、今、本当にいないから。」
　本当である。…今は女性云々の状態ではないのだ。そもそも実家に帰ってくるまで俺が女ともつきあえるなんて可能性は思い出しもしなかった。
「嘘だ。」
　可奈は少し口をとがらせた。
「どうしてあたしに嘘つくの？」
　可愛い子供だったはずの妹に鋭く責められて、俺はたじたじになった。
「嘘じゃない。」
「じゃなんでそんなに必死になるの？」
　それは…
　…俺の現実が田舎の常識をはるかに凌駕しているからだ。
　…可奈、と俺は心の中で妹に語りかけた。に一ちゃんの好きな人は男なんだけど、それでもお前は応援してくれるかい？…と。
「…に一ちゃんは札幌で大人になっちゃって、もうあたしとは違う世界の人になっちゃったの？だから話せないの？」
　…うん、そうかもしれない。それはある意味、当たっている。
「…そんなことはないよ。」
「嘘つき。」
　ああ、これは嘘だ。ごめんな、可奈。…俺は心の中で妹に詫びた。
「…可奈、大学行きたいだろ？四十九日が済んだら、なるべく早くいくらくらいかかるか、調べて教えてくれないか。学校の先生に聞いて、パンフレットを見せてもらえばいい。に一ちゃん、金用意するから。」
「に一ちゃん話そらした！大学なんていきたくない！あたし畑できる人と高校出たらすぐ結婚する！その人とあたしとおか一ちゃんで畑やる！ひいじいちゃんが開拓したお父さんの畑売るのなんかやだからね！」
　思わぬことを言われてびっくりしている間に、可奈はぷいっと向こうへ行ってしまった。俺はあっけにとられて親父の死に顔に目を戻した。
「…だとさ、と一ちゃん。…どうする？」
　思わず話しかけたが、父はもう応えぬ人になってしまっている。

　通夜が始まる1時間半ばかり前に、みな喪服に着替えた。俺も黒いスーツに着替えて、黒いタイを締めた。ちょうど着替えが終わったところへ、葬儀会社の女性がやってきた。
「孝道様、…でよろしかったですか？」
「はい、故人の長男です。」
「会社の方とおっしゃる方がお見えになられていらっしゃいます。ええと、春日部様とおっしゃる方です。」
「あっ！」
　自分の顔がぱああっと明るくなって気持ちがふわぁっと色めき立つのを感じ、我ながら不謹慎に思った。ウソだろ、本当に来たよ先輩、夢みたいだ…。多分幾分赤くなって、俺は「行きます」と応えた。葬儀会社の女性は義務的ににっこりして、さして気にしたふうもなく、俺を先輩のところに案内した。
　会場はむせかえるような花の香りがしていた。先輩は暖房のきいた会場の、入り口のそばに立って俺を待っていた。まるでそこだけ切り取った上手い写真を子供の落書きにコラージュしたかのように、先輩は別次元になっていた。黒い礼服を着た体は引き締まって見えてそのくらい美しかった。
　どこからかぎつけたのか愛さんがさっそくウッフンウッフン絡んでいたが、先輩は俺の姿を見ると、軽く会釈して愛さんを放り出し、こちらに歩み寄ってきた。
「すまんタカミチ、遅くなって。昼ぐらいにはこっちについてたんだが、会社にもらった地図が家で、家はカラで、役所に行って葬儀会場を聞いて探してた。道に除雪が入ってて助かったよ。会社からは何でも手伝ってこいと言われて来たんだが、手伝うにはちょっと遅くなったな。」
「あ…村広いですからね。除雪しても道は滑るし。…大丈夫です、だいたい準備できました。葬儀屋さんがなんでもしてくれて…。あちこち走らせてかえってすみません…すごい田舎でびっくりしたでしょう？」
　俺は急に恥ずかしくなって下をむいた。先輩は札幌の育ちだ。
「ちょっと街を離れればどこもこんなもんだよ。おれの死んだじいちゃんとこもこんな感じ。道南の山奥でジャガイモ作ってた。…それより、突然で大変だったなタカミチ。驚いただろう。お前は大丈夫か？お母さんは？」
　先輩はそういって俺の腕のあたりにぽん、と軽く触れた。
　ふわ…と体の緊張がほどけた気がした。思わず先輩にすがって泣きだしそうになり、自分でも驚いた。…急いで気持ちを引き締める。それでも誤魔化しきれなくて、ちょっと下を向いた。
「俺は、全然…。親父は歳だったし、そのうちにと覚悟はしていたので…。母はちょっと気が立ってるみたいです。まあ、いつものことだから、元気と言えば元気です。…妹がちょっと参ってるかな。まだ高校生だから。」
「妹いるのか。」
「…両親がトシいってからの娘で、親父にすごく可愛がられてたんで。…あ、」

　知らない声を聞きつけたのか、制服をきて、真新しい黒いタイツをはいた可奈が出てきた。俺は可奈に手招きし、可奈は会場のスリッパをひっかけておそるおそるこちらへやってきた。
「…妹の可奈です。…可奈、大学の先輩で会社でも先輩の春日部綾人さん。」
「う、うををををを、眼鏡男子なンまらイケメンンンンンンン！」
「可奈！」
「あっ、あっ、ごめん！つい本当のことを！！！！」
「何言い出すんだよお前は！俺を殺す気か！」
　俺と可奈が赤くなって言い合うのを涼し気に見て、先輩は小さくぷっと笑った。
「妹さん元気そうじゃない。」
「す、すみません。」「すみませんっ！」
　俺と可奈がぺこぺこすると、先輩はさわやかに可奈に話しかけた。
「俺、兄さんと同じ会社で仲いいの。よろしくね、可奈さん。」
「かっ…可奈さんいわれたあああああああ！！！」
「可奈！」
「こちらこそっ、うちの可愛いけど畑でとれた泥んこのジャガイモみたいだった兄を、ここまできれいにしてくれてアリガトウゴザイマッッッス！！！」
「可奈！」
「まっまっ真面目で優しいだけが取り柄の兄ですが、ホントよろしくお願いしますっっっ！！！大変だ、お母さんよばなくちゃ！ああっ、お母さん今喪服に着がえてる！」
「おちつけよお前は！」
「真面目で優しい以上にいいことなんてあるの？…いいお兄さんじゃない。」
　先輩は面白そうに可奈に言い、俺の顔を見てにっこりした。
「妹さん可愛いね。顔、兄妹そっくりだね。二人ともお父さんに似たんだ？」
と、ちょっと遺影に目をやる。菊の花の真ん中で、父の写真は楽しそうに笑っていた。
「…す、すみません。…可奈、もういいからあっちいけ。に一ちゃん恥ずかしい。」
「ご、ごめん…」
　可奈は真顔で俺にあやまると、ささささっと小走りに逃げていった。
「…今夜ここに残って明日の葬儀も出る予定だ。ホテルとかないからこの会場にでもいさせてくれ。なんでも言って。手伝うから。」
「ありがとうございます…」
　…な、なんか俺の妄想と同じこと言ってる、と思って、不謹慎だがどきどきした。
　少し立ち話していると、黒い着物に着替えた母がやってきた。後ろで可奈が隠れたり覗いたりしていた。先輩は母には型どおりの丁寧な挨拶をして頭を下げた。母もそこは型どおり返し、孝道がいつもお世話になりまして、かなんか言ったが、そのあと幾分ポカンとして俺に言った。
「…どおりであんたが垢ぬけるはずだわ。」
「…やめてくれよかーちゃんまで…。ホントうちの家族恥ずかしい。」
「…こんな素敵なセンパイにお使いとかさせろっていうの？あんたらの会社は。」

「下足番か受付でもしましょうか？会計とか。なんなら台所を手伝うこともできますよ。」
　先輩が困ったように笑って言うと、母は慌てて手を振った。
「いえいえ、そういうことは、葬儀会社がやりますので…あの、よろしかったら向こうの畳の暖かい部屋で皆とお茶でも飲んでいてください。バカの親戚ばっかりで申し訳ないですが…」
　かーちゃんそこで謙遜がわりに本当の事言わんでいい、と思って、俺は目をおさえた。

5

　時刻になると馴染みの坊さんがやって来て、通夜のお経をあげ、そのあと少し親父との思い出話と、軽い説教をした。近所の人たちや可奈の同級生達、農協の人や昼間働いているいとこ達も駆けつけてくれて、母が喪主を務め、それなりの通夜になった。
　食事がすむと、親戚は「家で寝るわ。明日の朝またくる。」と言ってとっとと帰ってゆき、会館には母と妹と、俺と先輩だけが残った。
　俺は母に、
「布団あるし、寝てよ。線香番、俺がやるから。」
と言った。母はイラっとしたようで、何か言いかけたが、先輩がのんびりと
「私も孝道君と起きていますから、どうぞお休みください。」
と言うと、ちょっと困ったように、
「そうですか。では休ませていただこうかしら。」
と、使い慣れない礼儀正しさでもごもご言った。可奈は畳の部屋のテーブルを片付けて、布団をしいてさっさと制服のままもぐりこんだ。人が少なくなった会場はハイカロリーで暖房をいれていても、なんとなく少し寒かった。
　葬儀屋が棺を手前にだして、渦巻き型の長い線香を用意してくれていた。俺と先輩は暖房器具の近くの椅子に座り、少し離れたところから線香の火を見ることにした。
　母と可奈が眠ってしまうと、静かになった。
　そして先輩と俺は、妙に「いつも通り」な気分になり、会社で話すような他愛ない事を小声で話して、笑ったりした。
「…先輩がきてくれて、なんか嬉しかったです。」
　話の間が空いたので、俺が言うと、
「…助かりましたじゃなくて嬉しかったですかよ。」
と、先輩が苦笑した。俺はちょっと慌てて、
「いや、助かりました。俺高校でてからずっと札幌なんで、親戚の中にいると妙にアウェイ感ていうか…。落ち着かなくて。…なんか親父が死んだっていう実感もないし。手持無沙汰っていうか。」
そう言って頭をかいた。

「実感わかないんだ？」
「わかないですね。…これから母や妹のこともあるし、土地の処分とか相続とか、大変だと思うけど、なんだか他人事みたいです。」
「そっか。」
「…まあ、これから嫌でも実感わいてくるんだろうから…。今はいいかなって思ってます。」
「ウン」
　先輩は相槌をうったが、特に賛成も反対もしなかった。しなかったが、なんとなく許された気がして、俺はほっとした。
「…タカミチ、今まで仕送りってしてたの？」
「…ボーナス月とかは少し。親父には自分のために貯蓄しろ、うちは大丈夫だから、って言われてました。…でもこれからはそういうわけにはいかないでしょうね。」
「…お母さんに年金出るまでは、かな。あ、でも寡婦年金がでるかな？」
「そうですね。それ以前に妹を大学にやりたい。…でも本人はあまり行く気ないみたいで…。結婚して男と畑やる、とか言ってたけど…。親父の畑手放したくないって。」
「…そうか、むずかしいところだな。…タカミチはなんで妹さん大学にやりたいの。」
「俺も親父に行かせてもらったから…親父が死んでも可奈に同じようにしてやりたい。」
　それに…
「…さっき先輩にまとわりついてた色っぽい年増の奥さんいたでしょ、あの人愛さんていうんだけど、叔父の二人目の奥さんなんですよね。叔父の浮気相手。一人目の奥さんは、離婚して子供連れて出て行った。
　…まあ恋愛沙汰そのものは当事者たちの事情だし、しょうがないとは思うんだけど、その出て行った奥さんと、連れて行った子供…俺のいとこになりますけど、…その二人のこと、時々心配になるんです。どうやって食べてるのかな、って。
　それで…可奈が結婚したはいいけど、愛さんみたいな人に旦那取られたらどうするんだろうって思っちゃうんですよ。下手したらその女に土地もとられて、可奈は放り出されるんじゃないのかなって。そのとき、可奈は自分で生きていく力があるのかなって。今その力がすでにあるんなら、それはそれでいいんだけど…。
　大卒だったら同じ仕事しても給料少し多めにもらえるし、在学中に資格とかもとれる。世界が広くなる。コネクションもできるでしょう。農家以外の知り合いとか、いたほうがいい。」
　「…なるほど。愛さんてそうなんだ？…身近に例があると、心配だよな。…北海道は離婚率高いしな。」
　俺は頷いた。すると先輩は言った。
　「…もう少しおちついてから話してみた方がいいよ。お前の気持ちもちゃんと話して。本人の気持ちもちゃんと聞いて。あとお母さんに隠し財産ないかきいてごらん。タカミチのうち、車で走ってみたけど、かなり土地広いよね？農業収入思ってるよりあるんじゃないの？…おかあさんが大事に貯蓄してるかもしれないよ。」
「…そうか、そうですね。」

　俺は不安に思っていたことを聞いてもらえて、少し安心した。
　そして思わず口を滑らせた。
「……俺は親父があの大学に行かせてくれなかったら、先輩に会えなかったし、もしそうだったら就職もほかの会社になってた。それ考えると…」
「……」
　先輩が黙っているので、しまった、と気づいた。緊張していた気持ちが緩んで、先輩に甘えている。普段でもこんなことは言わない。先輩が引くではないか。
「…あっ、先輩、お茶でも飲みます？確かあっちに柳月の菓子が…」
　俺は慌てて立ち上がり、その場から逃げ出そうとした。しかし先輩に手を掴まれた。
「…そこで逃げなくてもいいだろ。」
　ドキっ、とした。
「…まあ、座れ。」
　引っ張られて、どぎまぎしながら、先輩の隣の椅子に戻った。
「…なあタカミチ、タカミチは、俺と会えてよかった？」
　先輩は静かな声でたずねた。
「…はい。」
「そうか。嬉しいよ。」
　先輩はそう言ってにっこりした。
「…俺タカミチのことすごく可愛いの。たとえ血のつながった弟がいてもこんなに可愛くはないだろうなって思ってる。」
「…」
　顔が熱くなった。こんなことを先輩に言われたら死んでしまうではないか。親父の通夜に息子が原因不明の突然死を迎えたら笑えないではないか。何を考えているんだ、先輩は、と思って、下を向いた。下半身が落ち着かないし心臓が止まりそうだ。
「…ねえタカミチ、赤くなって下向いてないで、センパイのこと好き、って言って。」
「…言って、って…言ったらどうするんですか。」
「キスするよ。」
　先輩はそう言って、掴んでいた俺の手を組み替えて握りなおした。
　…え、と思った。
　まさかそんなはずがないと決めつけていたが、そういえば確かに先輩はずっと俺のことを可愛がってくれてたじゃないか。なにかとほめてくれたし、撫でてくれたし、抱きしめてくれたし、笑いかけてくれたじゃないか。仕事も手伝ってくれたし、家にも入れてくれたし、一緒に海にも行ったじゃないか。先輩、そうだったんだ、俺、先輩に好きって言っても良かったんだ、キスしてもいいんだ、と、だしぬけにいろんなことを俺は理解した。
　そうしたらもう、何も無理に堪えなくていいのだとわかった。
　俺は先輩の手を握りかえし、顔を上げた。
「…先輩のこと、好きです。」

「…俺も好きだよ、タカミチ。」
　先輩はそひそひと言うと、予告通り俺を抱き寄せて唇を重ねた。

6

　翌日は告別式のあと、バスを仕立てて火葬場へ行った。古い火葬場はのろのろ走る冬のバスで一時間ほどかかる隣町の海辺にあり、その日は予約が多かったらしく、妙に混みあっていた。
「あの晩は冷え込んだから、よそ様でも不幸があったんだね。」
　通夜の晩ぐっすり眠った母は、幾分機嫌がよくなっていた。母の隣には可奈がついていた。可奈の寝癖の髪を、母と可奈は何とかしようと隙を見ては二人でいじっていた。
「ちょっとここ喫煙所ないのぉ？おなかもすいたし。」
　愛さんが辰也叔父に言うと、叔父は
「外で吸って来いや、雪降ってねぇし。骨上げが済んだら初七日の繰り上げ法要だ、終わったらなんか食いに行くべー。」
と、億劫そうに言った。
「…あー寒いしめんどくさ。…ちょっと孝道、付き合いなさいよ。」
「俺は煙草は吸いませんし。外寒いからいやです。」
「いいから来なさいよ。ちょっと話がある。」
　愛さんはダウンのロングコートを羽織って俺の耳をひっぱると、外に付き合わせた。外は寒かった。
「寒いわねえ。」
　愛さんは煩わし気に、昔流行ったのであろうブランド入りの、洒落た婦人物ライターで、スリムのメンソールに火をつけた。
「…あんたさ、そうだったの。…ごめんね、気がつかなくて。」
「…は？」
「…いいのよ。」
　愛さんはメンソールの吸い口を親指でピンピンとかるく弾いて灰を落とした。
「…線香番を、…喪主でもない息子の、会社の同僚がやるなんて聞いたことないわ。…そのうえ骨上げまで付き合うつもりなの。」
　うっ、と思った。
　…確かに俺も聞いたことがない。
「…責めてるんじゃないのよ？」
　愛さんは煙を吐き出すと、化粧した美人顔で振り向いた。葬儀にはふさわしくない、真っ赤な口紅をしていた。
「二十人に一人くらいいるって雑誌で読んだわ。べつに、親戚に一人くらいいても珍しかない

わよ。…いろいろ言う人もいるだろうけど、困ったらあたしに言いな。何十人だろうと返り討ちにしてやるわ。今更へっちゃらよ、そのくらい。」
　そう言って、一口しか吸っていない煙草を地面の雪に落とし、ギュっと踏みつけた。そしてニッコリ笑った。
「…きれいな男じゃないの。ああいうの、なかなかいそうでいない。どうせ大卒のインテリなんでしょ。まあ、仲良くやりな。」
「…あの…」
「ああ寒っ。風がでてきた。中へ戻ろう。」
　返事を待たずに愛さんは玄関へ向かった。
　今まで愛さんをいい人だと思ったことは、ただの一度もない。複雑な心境だった。だが…
「…ありがとうございます。」
　先にドアに消えてゆく後ろ姿に、俺は小さく礼を言った。
　建物の中に戻ると、可奈が先輩と並んで写真を撮っていた。
「…なにやってんの。こんなトコで写真撮ったら霊が写るぞ。」
「あっ、ごめんっ、てへっ。」
　可奈は俺を見ると慌てて逃げて行った。
「…先輩。」
「…タカミチとは結婚できないから妹と結婚してタカミチの親戚になるのもいいなと思って。」
「先輩！！」
「…冗談だよ。やいイケメン、写真撮るべ、って言われたから。タカちゃんの妹、面白いよね。」
　先輩はクスクス笑った。俺は恥ずかしくて両手で顔を覆った。

7

　忌引きは四日間取れたので、先輩を先に札幌に送り返して、残りの時間、俺は役所や銀行の手続きに奔走した。その間、大雪が降らなかったのは幸いだった。
　母が通帳を預けてくれたのでわかったが、父の口座にはかなりの預金があった。俺の行ったクラスの大学の学費だけなら、奨学金とあわせて、なんとかなりそうだった。これなら可奈を大学にやれる。あとは本人の気持ちだけだ。
　母は、やはり土地を手放すことを考えていた。これから若くはならないし、田舎の暮らしはいささか自分でも心配で、医療や福祉の充実した町場に住みたいと言っていた。なんにせよ、雪が解けなければ不動産屋も呼べないので、話は春になってからだと言った。
「…可奈にもそれまでにどうしたいか考えておくように言っておく。あんたは心配しなくていいよ。」

「何なら俺が可奈をあずかってもいいと思ってるから。」
「…可奈にいっておくよ。遠慮するとは思うけどね。」
「可奈が俺になんで遠慮なんか。」
「…あの子はお兄ちゃん大好きだからね。お兄ちゃんの邪魔になるくらいなら居酒屋で働くというだろうさ。」
「別に邪魔じゃない。」
「…言ったろ、女の高校生は大人だよって。」
「…」
　…俺の小さくて可愛かった妹も、兄貴のシモの事情を考えるようになってしまったのだと、どうやら母は言っているようすだった。…なんとなく、恐縮した。
　できる限りのことをやって、四日目の日没前に俺は札幌にもどることになった。小雪がチラつき始めていたので、早く出発するよう母にいわれ、まだ明るいうちに出張用のトランクを車に積んだ。レンタカーの窓から氷を剥がしていると、可奈が出てきて手伝ってくれた。
　「…雪道、気をつけてね。」
　「ああ。」
　「…にーちゃん。」
　「ん」
　「…あたしはいつでも、にーちゃんの味方だからね。…兄がもう一人ふえたって、いいんだよ。イケメン歓迎。」
　可奈はそういうと、返事を拒むかのような勢いでリアウィンドウの氷をブラシの後ろでガキガキと砕いた。
「…ありがとう。」
　可奈がどうして先輩と俺とのことを察したのかはわからなかったが、こんなことを言うからには、多分察したのだろう。或いは愛さんと同じような思考をたどって気づいたのかもしれないが、…もしかして俺と先輩ってただ普通にしていても、傍からみるとイチャイチャしているように見えるのだろうか、と、少し恥ずかしくなった。
　折角はらってもらった窓に新しい雪がつく前にと、車に乗った。
「じゃあ行くよ。また来週あたりにでも手伝いに来るから。」
「うん、かーちゃんに言っとく。でも無理しなくていいよ。電話してから来て。」
「ああ。風邪ひくなよ。」
「にーちゃんもね。」
　ギシ、と雪を踏む音を立ててタイヤが動いた。クラクションを短く鳴らし、手を上げて可奈と別れた。可奈の姿が見えなくなってから、窓を閉めた。バックミラーの中はあっというまにどこまでも何もない平らな雪景色になった。
　もう忌引きは終わって、早速、明日は会社だ。
　札幌に帰れば先輩がいる。親父の初七日も明けていないが、この週末は、先輩とあのキスの続きをしよう。…俺はそんな不謹慎なことを思いながら、雪の故郷をあとにした。

終

20181108

THANX FOR YOUR READING.

FROM 19RA WITH LOVE.

映画コラム「映画泥棒の謎」（黒井誰何）

　映画館に足を運んだことがある方なら、「NO MORE 映画泥棒」のＣＭを見たことがあるだろう。
　これである。
https://youtu.be/89U5Sva2qdc

　これを見ていて、腐女子としてピンと来るものがないだろうか？
　私も割と最近気づいたのだが、これの違法ダウンロード編（0：25あたりから）を注意して見てほしい。
　ポップコーンとジュースが２人で部屋でくつろいでいる。
　服装を見るに、どう見ても２人とも男性なのだが、お揃いのハートマーク柄のカップなのである。
　なんなんだこいつらは！？
　二人の関係が気になって仕方ないので、裏設定などご存知の方は、ご一報お願いします。

貴腐人のお茶会　第一回 20180916

毎月一回行われている腐コミュチャット。今回は我々の古きよき時代を彩った白泉社の花とゆめ・LaLaといった雑誌周辺についての対談…というか、まとまりなく、雑談♡です。※文中敬称略

■男性作家の醸し出す少年漫画感

一倉弓乃(以下イクラ)●我々がいたいけな少女だったころって白泉社の黄金時代だったんじゃないかってきがするんですよねー
雛わに(以下わに)●白泉社というと、花とゆめにLaLaか
黒井●もともとは『花とゆめ』ではＳＦ的な作品が好きだったので。柴田昌弘とか。同時期に成田美名子にはまる。
吉田来世子(以下来世子)●好きだったわー、成田美名子 。
わに●あー柴田昌弘や和田慎二は買いあさりました
黒井誰何(以下黒井)●『ピグマリオ』も好きでしたね『スケバン刑事』より
わに●『赤い牙』シリーズですね　＞ 柴田昌弘
来世子●私もスケバン刑事はイマイチだったけど、あれが好きだった。わー、なんだっけ、飛騨の山奥から出て来た女の子が家政婦する話＾＾　前髪おろしてるとチンチクリンなんだけど、前髪上げると絶世の美女になるというｗｗ
わに●あー、あったね 。『超少女あすか』シリーズだっけ
来世子●それだ！！＾＾
黒井●あー、あったあった！明日香、だよね？
イクラ●それだ！明日香ララバイ!　でもあれマーガレットだ!
黒井●白泉社は集英社の子会社だから問題ない。
イクラ●まあそうだ。赤い牙ももともとはマーガレットだ。
黒井●マーガレットとは客層違うよね絶対
来世子●え、明日香は花とゆめじゃなかったっけか？　←マーガレットは読んでない
わに●コミックスはマーガレットコミックスで出てますね 。出版社で限定するとむずかしいね
黒井●私もマーガレットは読んでいない。
イクラ●別マはときどき姉のお下がりを読んでいた。週マは売ってなかった。
来世子●そうか、移籍か。
わに●明日香シリーズはまたがってたかもしれない 。赤い牙とのコラボとかやってたし
黒井●またがってるとか多かったですよ当時は

わに●あ、やっぱりまたがってるわ。Wikiによると別冊マーガレット、花とゆめ、コミックフラッパーで執筆されたってあった 。
イクラ●私が花とゆめ読み始めたころは和田慎二は『スケバン刑事』をかいてましたねー。読んでるうちにおわって、『ピグマリオ』が再開しだした。
わに●私もそんな感じです。だからピグマリオはよく知らない。花とゆめって、ちょっと少年マンガテイストがあったよね
イクラ●ありましたね。柴田昌弘が醸し出していた。男性作家おおかったですよね魔夜峰央とかもいたし。

■『はみだしっ子』

来世子●好きな作品は『はみだしっ子』で、今思えば二次的なもの描いてたｗ
イクラ●『はみだしっ子』ははまったなー。とくに二次はやってなかったけど多分心はグレアンでグレマでしたよ
黒井●『はみだしっ子』は中１で仲良くなった子に薦められてはまったんですよね。友達はグレアンで二次やってましたが、私は割と反応薄く（笑）
来世子●私もグレアンだったけど、今思うとグレアムがアンジーに勃つとは思えないから、アンジーの襲い受けかなあｗ←ひどい
イクラ●アンジーの襲い受け!　それあるかもしれない。
黒井●日の高いうちからこのテンションですよ！
来世子●おまえそのまま寝てろよ、とか普通に言いそうｗ(*´艸｀)＞アンジー
黒井●ぶっちぎりだなおまいらｗｗｗ
来世子●私と弓乃さんは皆さんよりウォーミングアップ長かったから～ｗ
(*´艸｀)
(※編集註・このとき来世子とイクラは集合時刻がわりと早めだった)
イクラ●グレアムとアンジーはすごく良い仲なんだけど、グレアムはアンジーのこと好きとかじゃない感じ。仲のいい兄弟みたいな。アンジーはグレがすきだったけど、サーニンのほうが仲良かった気もする。

■吉田来世子のとある嗜好

来世子●作者不明の作品なんだけど『～のメタモルフォーゼ』って漫画が読み切りであって。『～』の部分が思い出せないんだけどｗ←だめじゃん
聖子だったかなあ。番長だったのが、女の子だってことがわかって女の子の恰好で高校に通い始めるんだけど、って話。あとで気付いたんだけど、あれが私の嗜好の原点だったのよねーｗ

黒井●あー、女装もの……
来世子●女装ものっていうんじゃないんだけど。中学生くらいの頃にも、ある香水を吹きかけられると美女になっちゃうって話があって。
わに●むしろ男装もの？
来世子●あれにめちゃくちゃ萌えたんだけどｗ
イクラ●男性と女性のカテゴリーからはみ出して戸惑っている性別というのがツボなんですかね?
来世子●実はロデムも大好きでｗ
わに●ロデムwww
イクラ●ちょ　そこでロデムとか!
わに●さすが来世子さんはお目が高い。そのころから触手責めとか
(編集註・以前のチャットでわにさんが昔遭遇したバビル二世本について盛り上がったことがあり、なんかすごい本だったという。ロデムがバビル二世様を「お世話」してあげるといった薄い本だったようだ。触手ものであったとか。)
来世子●ちがうｗｗｗ　男性なんだけど女性の、しかも美女になっちゃうってところに萌えを感じるのではないかと・＿・
黒井●なるほど。触手責めか。
来世子●ちがうｗｗｗｗそういえば、小説ウィングスでも好きな作品が。
イクラ●ちょっとまって話題についていけてないおいらｗｗｗｗ
来世子●あ、ごめんｗｗｗ
わに●あはははははは
来世子●話を戻そう・＿・ｂ

■『ツーリング・エクスプレス』とか『羽根くんシリーズ』とか

黒井●どこに話を戻せばいいの？　ねえｗｗ
イクラ●みなさんは『ツーリング・エクスプレス』とか『羽根くん』のころはもう卒業してたの?花とゆめ。
わに●読んでましたよー
黒井●『ツーリング・エクスプレス』は途中まで読んでるはず
わに●『ツーリング・エクスプレス』は途中までは読んでたんですけど
イクラ●いや私も途中まで。なんか自分のなかで「ツーリングは3巻までが花だったな」みたいなのがあって。4巻からさきは手放してしまった。
黒井●羽根くんも読んだ覚えはありますが、ほとんど覚えてない。
イクラ●羽根くんて「ストーリーよりキャラ」だったからね。ただただ羽根くんと曽我部とジュリーが可愛いっていう。
わに●羽根くんは、スピンオフっていうの？なんか友達が主人公の話があって、あれがわりとは

っきりＢＬだったような記憶がある
イクラ●『ピエタ』ですね。那智のやつですね。
わに●あー、そうそう那智くんて名前だった
黒井●その名前は何か記憶にある
わに●いま思ったけど、キャラの名前ってけっこう重要だよねw
わに●『ツーリング・エクスプレス』は友人がコミックスをずっと買ってて、雑誌買わなくなったあとも借りて読み続けてました。たぶん10何巻かまで読んでた。でもよく覚えてない
黒井●あの頃って、風木とか読んで「これも有りなんだ！」と思った作家たちがＢＬっぽいものを書き始めたのかなーって気もします。
わに●これも有りなんだwww
イクラ●わたしは当時青池保子のファンでじりじりしながらプリンセスの発売日まってるクチだったんだけど、その空き時間にツーリングを読み始めて、はまってしまったんですよ。
わに●私も同じく。青池ファンというか、エロイカファンはちょっと引っかかりやすい造りでしたよね、『ツーリングエクスプレス』て
来世子●ツーリングはあまり好みではなかったんだけど、妹がなぜかコミックス１巻だけ持ってて意外だったわー・＿・
イクラ●旧じゅねの読者欄に河惣益巳のイラストがのっていたのをわたしは知っている。河合って苗字だった。
わに●ホントに？！∑(￣Ｏ￣;)
来世子●それは凄いｗ＾＾
黒井●そうなんだ
イクラ●当時は冷戦時代ですから、なんかスパイものってわりと最前線感あったんですよね。＞エロイカとツーリング
黒井●まさかあんなに簡単に壁がなくなるとは思わなかったですよねー＜伯林
イクラ●ほんとベルリンの壁は驚きましたね。テレビで中継みましたよ。

■『パタリロ!』とタモリ

イクラ●あと『パタリロ!』も私的にはその系列だったんですが。
わに●「その」とはどの？
イクラ●スパイ系というか。＞その
わに●ああ……言われてみれば
来世子●あれは腹を抱えて笑ったわーｗ＞パタリロ
でも親と一緒にアニメを観るのは恥ずかしかったｗ
イクラ●親と一緒に見ていたら、パパンがはずかしがって逃げていったのおぼえてる＞パタリロ!
来世子●ｗｗｗｗパパンｗｗ

イクラ●うちのパパンこっそりルビー文庫よんでたからね! 文学青年の成れの果てだからわりとなんでもありよ。
わに●当時は無茶やってたよなあw　あれを19時台に流すんだから
黒井●ほんとにねえｗ＜ゴールデンタイム
来世子●うんうんｗ(*´艸｀)
イクラ●すごい時代でしたよね。今なら深夜アニメにもなるかどうか。
黒井●でも舞台化はしてるのよね
来世子●深夜ですね、間違いなくｗｗ(*´艸｀)
わに●まあバンコランがいなけりゃ、別に19時台でも、何だったら朝っぱらからやってたって問題なかったとは思うけど
来世子●マライヒ妊娠しちゃうしタマネギ同士で恋愛してたしｗｗ
わに●タマネギたち、実は美形ぞろいだったからねえ
来世子●うんうんｗｗｗ
黒井●マライヒの妊娠は悩みましたけどねえ。どこから出てくるのかと。
イクラ●今考えると魔夜峰央すごいよね。巨匠だよね。
わに●飛んで埼玉が映画化だったっけ 。実写化？　映画なのかドラマなのか
黒井●まじですか？！
黒井●監督誰よ？ｗｗ
イクラ●監督はたしかのだめの監督ではなかったか。ちがったらごめん。 あ、調べたら監督は武内英樹さんだって。麗さん役、ガクトさんでしょ、たしか。
黒井●のだめとテルマエの監督かあ。まあ、なんとかしてくれそうな。
わに●コミック原作の作品をよく撮ってる監督さんなんですね
黒井●コミック原作の切りどころと生かしどころはわかってる監督さんだと思いますよ。思い切りもいいと思うし。
わに●実はあれ読んでないんだよ。読みたいんだけど、いつも本屋で忘れちゃうの。何かの呪いかな
来世子●呪いｗｗ
イクラ●わたしはリアルタイムで掲載誌読んだけど「…これいいの?」てちょっと思った…当時でも。
わに●魔夜峰央ってーと、実はホラー作品から入ったから、パタリロをはじめて読んだとき
はちょっとびっくりした覚えがある。こういうのも描くんだーみたいな
来世子●いや、たまにホラーでしたよねｗ　マンドラゴラとかｗ
わに●いつこわくなるんだろーみたいな
イクラ●ＬａＬａでホラーやってましたよね。あれはあれでなかなかよかった記憶がある。
わに●ホラーに合う絵柄でしたしね。原画展を観に行った方のツイートで、これが魔夜峰央のベタだ、みたいなのがあって、ああわかるわかるってなったw
黒井●いいですよね。ところで、魔夜先生といえば、自画像がタモリそっくりってことで、別冊

の巻頭でタモリと対談やってたの覚えてるんですけど。
わに●ありましたねw
イクラ●おぼえてる!　その別冊花とゆめは買いました。＞タモリ
黒井●ほんとに似てるｗｗ　って思った。
イクラ●タモリも当時はただのエロ芸人で、わりと気安く乗ってくれたところありましたよね。
わに●タモリをリスペクトしてああいう自画像なんかなと思ってたら、実際にああいう感じの方だったというw サックス芸人だったんですよね。タモリって。…セックス芸人とちがうよ、来世子さん（名指し）
来世子●え？？(゜o゜)キョロキョロ
イクラ●わたしの印象ではいつもエロいこと言ってるアイパッチ芸人だったタモリ。
わに●キャバレーとか演芸会とか、そういうところからの叩き上げ芸人だったそうです。関西人の私はタモリをはじめて観たとき、これが関東の芸風なのかーと思いました。…大いなる誤解だったわけですが
イクラ●はははははは
わに●タモリはタモリだった。豊かなオリジナリティ！ …っと、話がタモリに逸れた
黒井●それるのはいつものことよ
わに●ふへへ

■影響を受けた漫画・１　白泉社だけじゃ語れない

イクラ●みなさん影響うけた漫画とかって、あるんですか？ あるなら、どんな影響をうけたんでしょうか。
わに●前出の作家さんだと、柴田昌弘の絵をかなり模写した
イクラ●そうか、わにさんは当時は絵師ですね
わに●そうなんです。小説書いてなかった。…柴田昌弘は男性作家だったこともあって、動の描写が上手いというかかっこよかったから。あと女性の身体がエロかった
イクラ●わにさんの文章はすごく「絵」をかんじますよね。
わに●どうしてもそういう書き方になりますね。小説よりマンガのほうがたくさん読んでるし
来世子●私はやはり三原順かな～＾＾
イクラ●来世子さんは三原順ですか。
来世子●でも『１１人いる！』も好きだった！・＿・　白泉社じゃないけどｗ　でもさー、今思うとわかるじゃない？　＞男が女の子になる
イクラ●萩尾望都さんはアロイスっていうのをたしかＬａＬａでかいてたような…
黒井●影響受けた漫画って、幅広すぎるわあ……
イクラ●黒井さんは、「この漫画はバイブル」みたいなのないのですか。
黒井●バイブルとまではいかないけど、ありすぎて困る、みたいな。

イクラ●五人あげろといったらだれですか。
黒井●三原順は好きですけど、『ムーン・ライティング』とか『SONS』も好きなので。うわーうわーうわー５人かよ 。……萩尾望都は鉄板ですね。やはり三原順も鉄板。清水玲子（『竜の眠る星』で泣いたから）
来世子●え！　樹木希林が亡くなったって！(゜Д゜;)
黒井●ええっ？！
来世子●今、家人が(゜Д゜;)
イクラ●えー突然の訃報に動揺する貴腐人の茶会。……樹木希林、ずっと重いガンでしたからね…惜しい人を、ですが、ここ2年くらい覚悟していました。
わに●樹木希林……まあがんだったからねえ。いつ亡くなってもおかしくなかった

イクラ●樹木希林は名優でしたね…。
わに●一部で、いつまで樹木希林の遺作を作り続けるのか、とか言われてたしなあ

黒井●大友克洋（『童夢』捨てられない）
イクラ●萩尾望都、三原順、清水玲子…わりとこう、かちっとした路線ですね。あと二人はどうしますか♡
黒井●なるしまゆりか、よしながふみか……ひらがなで悩む
イクラ●よしながふみはすごくわかるけど、なるしまゆりはちょっと意外です。どういう影響受けましたか?
黒井●作品の完成度でいえば、よしながふみなんですよ。でも、なるしまゆりもどうしようもなく、刺さる部分がありまして。
いやいや、古林海月あげとこか、ここはー。『麦ばあの島』よろしく。高いから図書館で読んでね☆彡
来世子●清水玲子も好きだったわ～＾＾　なるしまゆりも好きだった＾＾
わに●清水玲子、好き好きー
来世子●てか、なるしまゆりは白泉社か？？・__・
黒井●結局『万引家族』が遺作かな……　あーーーーーっ
わに●んどした
黒井●獣木野生だよ。ラストワン……
イクラ●来世子さんの文と清水玲子の絵はなんかリンクしますね、少しわかる。でもあのダークな残酷さは来世子さんにはないですよね。 …黒井さんの獣木野生ね!　それはなんかすごくわかります。白泉社じゃないけど…
来世子●来世子さんにはない→来世子さんには出せない、ですねｗ・__・
黒井●高橋葉介とかもすごく好きなんですけどねえ！！！
イクラ●高橋葉介いいですよね。白泉社じゃないけど。
来世子●あと、樹なつみの『ＯＺ』が好きだったのだが、あれは白泉社か？？

黒井●白泉社です！
来世子●よし・__・←なにがよしだ
イクラ●わたしはやっぱり青池保子の昔のエロイカとかよむと恐ろしいほど影響受けててわらいます。ああ、わたしエロイカかきたかったんだろうなあ、みたいに思う。 白泉社じゃないけど。あ、『Ｚ』は白泉社ですね。
わに●獣木野生て、名前が途中で変わったから、いつも見る度に一瞬だれ？てなる
黒井●旧・伸たまき、っす。
イクラ●伸たまきのほうがよかったよね。名前。
黒井●画数多くて書きにくい。しかも獣は旧字体で変換出ないし。
来世子●パームシリーズ＾＾ あれは白泉社かい？？・__・
黒井●パームシリーズは違いますけども、新書館からも私、影響大なのでｗ
わに●やっぱり出版社で区切るのきびしいね。私は森脇真末味が外せない
黒井●あっ、吉田秋生……
来世子●あーーー
わに●ぞろぞろ出てくるw
イクラ●森脇真末味はいいですよね! わたしもだいすき。今でもよみたくなる。絵が好きなんですよね。
黒井●ああっ、森脇真末味！！！ 早川から再販されたのは結構持ってるかな
イクラ●『おんなのこ物語』とか読んでくらーい気分になるの好きでした。
黒井●こいつらー（笑）
イクラ●ダークなブロマンスだった。
わに●森脇真末味は「絵」そのものより、構図とかストーリーの運びとか展開とか、物作りの観点ですごい影響大きいんですよね
イクラ●なるほど
わに●このあいだTwitterで流したんですが、森脇真末味の『おんなのこ物語』の前日譚、描いて欲しいよー
来世子●高口里純！ 幸運男子！＾＾
黒井●高口里純だとやっぱり、私は『ロンタイBABY』が笑えて好きかも 。でも伯爵シリーズもカッコよかったんだよおおお（白泉社）
わに●高口は伯爵シリーズかなあ。あと赤鼻のアズナブル
黒井●でもねえ、山岸 涼子も捨てがたいの。一番怖いホラー漫画『汐の声』描いてるから。
わに●ああ、山岸涼子！ 白泉社だよ
来世子●『日出処の天子』な 。
イクラ●『日出処の天子』は就職してからほしくなって全集買ったよ
わに●Twitterでさ、『日出処の天子』読んでる女性がボロッボロ泣いてたっていうの、あれわかるー電車で読んじゃだめーって思ったわあw
来世子●最初に女装して出てきて蝦夷を惑わすべ、あれで私も惑わされたんだよなーｗ・__・

黒井●ほんとにブレないな！　来世子さん！！
来世子●いやー、それほどでもｗ
イクラ●来世子さんの嗜好がはっきりと表れた対談となってまいりました＾＾

■影響を受けた漫画・２　樹なつみ

来世子●今にして思えば、『八雲立つ』も同じシチュエーションだった・＿・ ＞鍛冶場から女装姿で出て来た
黒井●そうですね！ｗｗ　樹なつみも捨てがたいよ！！
わに●樹なつみを忘れてた
イクラ●男が女装してきれい、っていうね…
わに●鉄板ですね！　＞女装でめろめろ
来世子●うん、しかも、そこでやられると後々まで引きずるのよねｗ(*´艸｀)
わに●マルチェロシリーズも……
イクラ●マルチェロよかったねー
黒井●樹なつみは話の作り方うまいんだよねえ
わに●樹なつみはマルチェロから入ったんだったなあ
イクラ●わたしもマルチェロから。
来世子●絵も、こう言っては失礼かもですが、あの頃が絶好調だった気がします 。
わに●そして美形の扱いがうまい
黒井●設定だけ抜き書きすると、ねーわｗｗなんだけど、リアリティとか置いといて、エンタメとしての見せ方うまいんだよねえ。
わに●えーと、樹なつみのレズビアンの探偵が主人公の話、あれなんてタイトルだったっけ。あれも好き
来世子●えー、それ知らないかも・＿・
黒井●知ってるんだけど、思い出せない。
わに●マルチェロに出てきた女性のスーパーモデルが第一話に登場してましたよ
イクラ●でも『花咲ける…』を最後に読まなくなっちゃいました…。八雲は完全にわたしの守備範囲から外れていた…
黒井●意外というか、納得というか＜八雲
来世子●花咲ける～は女の子が主人公だったっけ？
黒井●婿選びの話ですよね
イクラ●そうそう、おんにゃのこ。
わに●乙女ゲーでしたねえ
来世子●あー、だから読まなかったのかも・＿・←ひどい
黒井●私も普通だったら読まないんですけど、そこを読ませてしまうのが樹なつみのすごいと

ころ。
わに●『八雲立つ』は、今もやってるんですよね。連載
黒井●その後の話みたいですよ
来世子●たまに流れてきますよねー＾＾＞Twitter
わに●『一の食卓』は１巻だけ読んだ。電子で無料だったので
来世子●さて、５人にしぼるんでしたっけ？ｗ
わに●(　˘　˘　)みなさま長考に入りました

■影響を受けた漫画・３　一倉弓乃の黒歴史

来世子●あ、確認だけど、影響を受けた作家・作品だっけ？　それとも好きな？・__・
イクラ●好きなだとどこまでも広がってしまうので、影響を受けた、にしましょう。
来世子●こうやって考えるといっぱいいるよねー＾＾＞好きな作家
わに●白泉社で活躍した作家さんに限定ですね
イクラ●きりがないですからね(^▽^;)
来世子●那州雪絵の『ここはグリーン・ウッド』とか＾＾
黒井●限定なの？！∑(￣ロ￣lll)ｶﾞｰﾝ
イクラ●うおっ、グリーンウッドなんか変な声出た。
わに●変な声w
イクラ●池田先輩と忍先輩がっ!!
来世子●光流って名前見るだけで萌えるわ～ｗｗ
黒井●それよかあからさまにデキてたカップルいましたよね。
来世子●あー、ボーイ・ミーツ・ボーイですね＾＾
イクラ●ぐりとぐらがやいたケーキのような笑顔、ですね。
来世子●やったぜワッショイハラショーでしたねｗｗあの作品は寮生ものの最高峰と言っても過言ではｗｗ
イクラ●あ、あとみなさん本橋馨子さんとかは読んでなかったの? あれは外すべきでないような…
来世子●絵のべらぼうに綺麗な人かな？？・__・
イクラ●そう。おじ様が愛する従弟の忘れ形見を養育している話。
来世子●うーん、なぜか食指は動かなかった気が……なぜだろう。
イクラ●あのあたりから花とゆめは完全にほも雑誌になった。
わに●あからさまにほもってましたよねーw
イクラ●みんな明らかにほもってるのより、そこはかとなく香が漂っているのがすきなのね…＾＾

黒井●あと、明智抄は大体そろってるはず。始末人シリーズと、『サンプル・キティ』とかあのあたりの一連。
わに●おーなつかしい
来世子●うちも揃ってるかもーｗ
わに●初期の頃はよく読んだなあ
イクラ●明智抄…おいらの黒歴史。ファンクラブに入ってたよ。
わに●なんと！
来世子●なんとｗｗ
黒井●なんで黒歴史なんですかｗ
イクラ●黒歴史だよ(-_-;)
黒井●なんで？？？
イクラ●鬼才だとはおもうが。なんか、こういう人を高く買っていれば、みんなが「すごいねー」っていってくれるんじゃないかなーみたいに思って入ってたから。
黒井●ああ、それは黒歴史ｗｗｗ　『女の十字架』とか、えぐいよねー
来世子●ｗｗｗ
わに●私も最初の頃はおもしろく読んでたんだけど、途中でなんとなく……うーん？
イクラ●でもおかげで道原かつみのクサビのカレンダーとか買えた。ってか北海道のイベントで明智抄ファンクラブ+道原かつみファンクラブの売り子したんだけどねーっ(ヤケ)
わに●道原かつみーーー！
来世子●道原かつみの売り子したの？？(゜Д゜;)
黒井●すげー
来世子●道原かつみ、好きだったわーーー
イクラ●あとわたしが悪い影響受けたのは、山田ミネコ。
黒井●私も好きだった。『リュウ』読んでた。山田ミネコも『リュウ』で……
イクラ●山田ミネコ　スゲー大好きで、おかげで恋愛に変な夢を持ってしまった。あれはほんとうに、悪い影響受けた。
来世子●山田ミネコは怖くて吐き気したトラウマがが＞＜
わに●悪い影響w
黒井●恋愛に変な夢？
イクラ●「じがけいのあんこくめぐるぎんがのうお」とか当時としてはものすごい画期的なタイトルだったけど、すごい怖い話だった。
黒井●それ、読んでないです。
イクラ●白泉社ですぉ。多分ＬａＬａだったと思う。今はもう古書でも手に入らないかもしれない。だれかコレクターが亡くなって一斉放出とかあればな。別だが。
わに●山田ミネコは私の基本はリュウから入って、そこでしか読んでなかったんだけど、いまいろいろ読んでみたい作家だなあ。電子化を希望。
黒井●電子化されてますよ

イクラ●秋田書店がハルマゲドンシリーズを一度きちんと出そうとしたんだけど、作家にかなり無理を強いたせいもありーの、あまり期待ほど売れなかったのもありーので尻切れトンボになっててだな…
わに●あー最終戦争シリーズが電書化されてる！
黒井●「自我系の暗黒めぐる銀河の魚」
イクラ●ほとんど手放したがパトロールシリーズだけはドクターレイクが大好きでとってある。
黒井●ドクターレイク！　あの、複雑な彼ｗｗ
イクラ●複雑かな。別に普通の人だと思うけど…。
わに●山田ミネコの最終戦争シリーズをはじめて読んだのはたぶん中学生のときで、私には難しすぎた。今ならけっこうちゃんと読める気がするんです
黒井●読んだとき、めんどくせーって思ったのよ
イクラ●「ドクターレイクの休診日」っていうかわいいタイトルであの内容っていうのがな。よいのですよ。……これも黒歴史だがしばらく山田ミネコにファンレター出し続けた時期がある。一か月にいっぺんくらい。
わに●それは黒くない！　すごくすばらしいこと！
来世子●うん、作家さんからしたら凄く嬉しいことだよね＾＾

■影響を受けた漫画・４　怖い話

来世子●あー、羅川真里茂もいた 。
黒井●羅川真里茂もすごかったねえ。
来世子●うん、凄かった・＿・
わに●羅川真里茂はニューヨーク・ニューヨークかな
来世子●うん、それね＾＾　赤僕はまあ、かわいくはあるんだけど＾＾
黒井●ニューヨーク・ニューヨークはラストが思い出せない。読んだのかなあ？
わに●年取って死んだ
来世子●わにさんｗｗ
黒井●私は、赤僕、衝撃だったなあ。子供が主人公でこれやるかっていう。
来世子●ラストは年取って揺り椅子の上で息を引き取る時に迎えに来てくれるんだよね 。
黒井●読んでないわそのラスト。
来世子●確かそんなラストだったような気がするｗ違ってたらごめんｗ
わに●や、そんなラストでした
来世子●たぶんその辺にあるｗ
わに●受けのほうが先に死んじゃったんだっけか
来世子●いや、逆だったような？？
わに●逆でしたか

来世子●しまった、あとで確認しないとｗ＾＾；
わに●んー……私もたぶん最終巻だけはまだあったかもしれない ちょうど大阪から東京への引っ越しにかかってたから、前半部分は処分しちゃってんだよね
来世子●なぜそんな中途半端なことをｗ
わに●大阪から持ってきたマンガは、エロイカとおんなのこ物語と、少年は荒野を目指す、ジュリエットの卵だけですので。あとは処分したんですよ。スラムダンクもベルセルクも買い直したんだよー。
来世子●おお、どれも読んでないかも＞エロイカの連載以外は
イクラ●うわあ、わにさんのその選択センスすきかもしれない。
来世子●スラムダンクはアニメしか知らないんだけど、あれもいろいろ萌えたよねえｗ
イクラ●ジュリエットの卵はよんでないですけれども…
わに●白泉社と限定されてなければ、真っ先に出てくるのが森脇真末味と吉野朔実なんだけどねえ　えへへ。ジュリエットの卵もいいですよー
イクラ●今度よんでみます。
わに●双子のふたりだけで、世界が閉じてるの
イクラ●こわい…(^▽^;)
黒井●そういう話が多いけどねえ、吉野朔実は
わに●そこをうっとりするくらい美しく描くのが吉野朔実ですよね
来世子●あ、さっきの『聖子のメタモルフォーゼ』は 倉嶋圭らしい　・__・
黒井●ちゃんと解放される話もあるけど、完全に輪が閉じたところで終わるのがジュリエットの卵だったですね
わに●でもあれ、閉じられた世界をふりほどく可能性があったんで、そこがまたね ……っと、また話がそれたーw
黒井●いやしかし、いちくらさんにジュリエットの卵すすめていいの？！
イクラ●ダメ…?
来世子●え、どんな話なんですか？？・__・
イクラ●あぶない?めんへらだから自殺しちゃう?
黒井●うん。ちょっと、暗い話だからさ……病んでるし。
イクラ●そうなのか…。じゃあ比較的薬がよくきいてる時期に読むよ。
わに●あ……そういう心配があったか
来世子●や、山岸凉子より暗い？？・__・；
わに●系統がちがう？
わに●かな
わに●山岸凉子のほうがある意味、健全かなあ
来世子●子どもを穴に捨てる話は怖かった(ノД`)・゜・。
わに●あれこわかったねー
イクラ●山岸 凉子こわいよねえ。『妖精王』は好きだった。

来世子●あと、バレリーナの話も怖かった(ノД`)・゜・。
わに●え、あれこわいの？
来世子●あ、そうねー、『妖精王』は好きだったなー＾＾
黒井●『鬼』でしたっけ。子供を穴に捨てる話。
来世子●タイトルは忘れました(>_<)怖すぎて
黒井●確かに山岸 凉子のほうが、健全ですよねー。読者がぐらぐらする必要のない視点だから。
わに●なんつーか、ひどいことはひどい、おぞましいことはおぞましいという、作者の視点はわりとまともなんですよね。そのうえで、仕方がなかった、本当にそうなのかよ、みたいな問いかけがある
わに●吉野朔実はそういう意味ではかなりのモラル・ブレイカーなところがあって、いけないことっていわれてるけど、本当にそうなの？　という
わに●負の感情をわりと肯定的に受けとめてるんですよね
わに●山岸凉子のほうは因習なんかの、もっと大きなところを扱ってるのもあるんでしょうけど
わに●だから読んだとき、個人的な実感に置き換えやすいのは吉野朔実かなと思う
黒井●だから、吉野朔実のほうがある意味、山岸 凉子よりやばい。
わに●そうね。たぶん
来世子●そっかー。
黒井●読者がいろいろ考えちゃうんですよ。
来世子●でも、更に読みたくなるよねえｗ＾＾
黒井●そこが文学的ともいわれる所以でしょうね
わに●むかしばなしと純文学みたいな感じ
来世子●さてｗ
わに●まとまらねーなー（おまえが言うな）
黒井●一時期、双子、疑似双子ネタが多くて、少年は荒野をめざすからエキセントリクスまでを私は「吉野朔実の呪われた双子の時代」と呼んでおります。
来世子●これをまとめるのは一苦労だと思いますぞ、各々方ｗ
黒井●まとめる気？　あるの？？　いっつもカオスじゃーんｗｗ
来世子●ｗｗｗ
わに●呪われた双子時代ｗ　でもばっちりだｗ
来世子●じゃ、こんな感じで読者様にも昔を思い出していただきますかｗ＾＾
わに●いいのかしら
イクラ●もうまとめなくてもいいっか♡
来世子●「あー、あれもあったよね、なんだっけあの作品＾＾」とか思っていただければ大成功ってことで＾＾　イクラちゃん、ごめん(ノД`)・゜・。←笑

■影響を受けた漫画・５　成田美名子を忘れていませんか

わに●これは言っておきたいというのがあれば
イクラ●うーんとね、みんな成田美名子は語らなくていいの?
わに●ああっ！
来世子●エイリアン・ストリートｗｗ
黒井●あれはねえ、黒歴史に近いというか、もう今はこっぱずかしくて読めない、かなあｗｗ
わに●青春ストーリーだったもんねえ
イクラ●みき&ユーティは?
黒井●読んでますよ……
イクラ●サイファとかさー
黒井●サイファくらいまでだったかな、読んでるの
わに●そのあとのアレキサンドライトまで読んでた。アレキサンドライトはサイファより好きだったかなあ
来世子●サイファは途中で脱落したかも。
黒井●アレキサンドライトは途中まで読んでるような
イクラ●スパダリぎらいの黒井さんのルーツはここかｗｗｗきらいじゃないんだ、はずかしいんだ?
黒井●屈折とかダークさが足りないのよ！！！成田美名子は！
イクラ●ダークだよけっこう
黒井●健全すぎる、すぎるすぎるすぎるのよ！！！
わに●そういう作風じゃないしなあw
黒井●全然ダークじゃないよー
わに●若者の苦悩は描かれてますけどね
イクラ●えーでも双子のかたわれ突然殺すような人だよ?
黒井●そうだったっけ？
来世子●え？？(゜Д゜;)
わに●死んじゃうんですよ、ほんとにいきなり
黒井●なんで死んだんだっけ？
わに●共演者といい感じになっちゃって、でも双子がときどき入れ替わってるの黙ってて、彼女には本当のことを話す、そして告白する！　っつって死んじゃうんだよね
わに●事故？
イクラ●確か事故。
黒井●それ、ダークなの？ 片割れが殺したならダークだけどさあ
イクラ●あんまよくおぼえてないの。おいら成田美名子は通り過ぎただけのスパダリだから。
黒井●通り過ぎただけのスパダリｗｗｗ
イクラ●セレムは好きだった♡
来世子●あー、影が通った。

わに●入れ替わってたことを彼女に話すっての、もう片方が反対してて、そのまま死なれたもんだから罪悪感がー……という
黒井●ふつーじゃないですかね。ドラマツルギーとして。
わに●でも別にダークな話を目指してはいなかったからね、成田美名子は。ちょっとハードな若者の苦悩を描いてたんだと思うよ
イクラ●片割れがいきなり死んだとき、中学校の女子テニス部は阿鼻叫喚でしたよ?
黒井●タッチみたいだね☆彡
わに●あ、それね。対象年齢がそのあたりなんだと思います。主人公達も十代だったし
黒井●前例あるしー。全然ダークじゃないなーい。
わに●だからダーク目指してないってw
わに●アメリカーンなドラマを、うつくしー絵柄でドラマチックに描くのが成田美名子の持ち味だと思うな 。基本ハッピーエンド？イギリスのドラマじゃないんだよ
イクラ●当時まだアメリカ的なものに夢があったよね。わたしたちの若かったころって。ラジオの基礎英語をきいたときの「いつかわたしもアメリカン」みたいな夢があった。
わに●あったあったw 樹なつみの『パッション・パレード』も、ほとんどアメリカでの話だけど、もうちょっとアメリカの暗部に触れてたかねえ。てか、アメリカへの憧れはカリフォルニア物語だったなあ。あれでどこらへんに憧れたのか、今となっては謎だけど
黒井●今の若い子の夢ってどこにあるんだろねえ。ＶＲ？
イクラ●ドバイとかじゃね?　スパダリはやっぱり金持ちじゃねーと。
わに●ドバイwww
わに●金ぴかの夢ねーw
イクラ●叶姉妹とか。おっぱいバーン!　みたいな。
黒井●ドバイいいねえ。エキゾチック☆彡
わに●実際ハーレクインには、アラブの王子ジャンルがあるしなあ
イクラ●そうなの?!
黒井●あっ、スパダリは好きじゃないです（きっぱり）
わに●いまは時代的に、大衆が共通に持つあこがれの対象ってなくなりつつあるんですよね
イクラ●そうなんでしょうね。
わに●そのかわり、古い新しいの概念がかなりゆるくなってきてるみたい

■スパダリとダメ男

わに●スパダリはバカバカしいくらいがちょうどいいね
イクラ●ばかばかしいというと、あの、オークションの最後にでてきて「２億」みたいな?
わに●２億より顎！ですねw　アラブの王子にプロポーズされて、羊300頭贈られたとか

イクラ●羊300! wwwwwww
来世子●引田天功が島とか油田もらってたよねｗｗ
わに●それそれwそういうスパダリはわりと好きよ
黒井●それ書くのは勘弁ですけどねー
わに●自分では書きませんよーw
来世子●実は私もスパダリはイマイチなんだよね～＾＾
イクラ●スパダリより手の届くダリですかね。
黒井●私はどっちかというとダメ男のほうが好きなんで。
来世子●ｗｗｗ 私はそこらにいそうな頑張ってる男が好きですｗ＾＾
黒井●（女装の）
来世子●ｗｗｗさすがに攻めの女装はｗｗ
イクラ●わたしちなみにスパダリ嫌いじゃないですよｗ 自分でも書いてるし。
わに●いや、いるけどさ。自作の中に
黒井●いるねー。私最初から嫌いだったけどねーあのキャラ
わに●スパダリ臭がしてたんですね
黒井●あのキャラ嫌いっていうの私くらいよきっと
わに●どうでしょうね。自作のキャラの誰に人気があるのかわからん。でもクサイくらいの格好良さを目指して書いてますよ。彼は
来世子●え、わにさんの自作キャラの誰が臭いの？？・__・
わに●ラハイア
来世子●あー、スパダリねｗ＾＾
来世子●ちなみに、黒井さんのダメ男ってどんな男ですか？＾＾
イクラ●へたれ男は味わい深いよねｗ
来世子●うんうんｗ
黒井●ダメ男…私、ダメ男しか基本書かない。ダメじゃない男がいますか？！
来世子●いないねｗ
イクラ●それは鋭いツッコミです。
来世子●でもほら、ダメな方向があるじゃない？＾＾
わに●ダメな方向w
イクラ●あるね、自殺癖があるとかね。
わに●そうそうw
来世子●自殺癖ｗｗｗｗそれはちょっとダメンズと言うよりはｗｗ
イクラ●なんとなく誰とでも寝ちゃうとかね。
来世子●あー、それはいそう・__・
わに●ものすごくダメな方向が真っ先に上がったなw　＞自殺癖
イクラ●愛してるって言われてもどうしても信じられなくて、ウソは結構ですとかいったりとかね。

黒井●いちくらさん、ダメ男書くの向いてると思う！
来世子●ｗｗｗ
イクラ●借金してないと不安とかね。
わに●うまいと思う
来世子●それはｗｗｗｗｗｗ
黒井●なんで不安なの？
イクラ●借金依存症っていうのがあるのですよ。
黒井●へー
来世子●あー、でもローンで車買わされた男はいたな・＿・＞自作
イクラ●借金して、ばりばり働いて返している自分が素敵、みたいな。
来世子●そうか、あれがスパダリかも・＿・＞妾腹だけど
イクラ●借金してないとなんか自分がダメになる、みたいな。
来世子●ダメの種類の多様性が素晴らしいよ、弓乃さんｗ
わに●社会的な信用がある、だから借金をする、そして滞りなく返済をする、信用を積んでいる、という思考パターン
イクラ●ダメ男は味わい深いから、いろいろストックありますよ。
来世子●ｗｗｗ
わに●本人の中では理路整然としてるんだけど、端から見たらダメ野郎
イクラ●今の時代でいうと、ヘビースモーカーってダメ男ですよね。 むかしはかっこよかったけど
わに●ですよねーアル中と基本は同じ
来世子●そうなのか・＿・
わに●アル中みたいに暴れたり平気で嘘ついたりしないけどね
イクラ●でも「たばこは体にいい、思考力が高まる、りらっくすできる」とかすごい主張はじめますからね、人に受動喫煙させといてまー図々しい。
わに●身体にいいとか、すげーなそれ。　シャーロック・ホームズって、あの時代ではかっこいい男だったんでしょ？　でも現代的視点で見れば、どーしよーもないダメ男だよね
イクラ●ワトソンに食わせてもらってんじゃねーの、とか子供心におもいましたね。＞ホームズ
来世子●煙草、酒、ヘロインだっけ？

■黒井のグッとくるダメ男

わに●それで黒井さんがグッとくるダメ方向は？創作において。創作物において？　創作において？　ん、どっちかな
来世子●書きたいものと読みたいものでも違いますよね＾＾

黒井●違いますねー。　私がぐっとくるダメ方向は、読めばわかるはず。私の最愛のキャラを知っていればわかるはず。
来世子●黒井さんの最愛のキャラって『緑の～』の？？
わに●ユージンですよね
イクラ●ユージンて別にダメ男じゃないやん。どっちかっていうとスパダリ系やん。
来世子●だねえ 。
黒井●いや、ダメ男ですよ！好きな女に刺されーの、その後好きな女には好きの一言もいえないーの。どんだけへたれやねん
イクラ●でも宇宙船運転できるし女の子にめっさ優しいやん。
黒井●女の子にやさしいんじゃないの。被保護者にやさしいだけなのあれは。

■オッサン受とガチムチ受

来世子●そういえば、ここにはオッサン受け書く人はいませんねえ・＿・
黒井●読むほうでは割となんでもありですが
来世子●みんな若者～ｗ
わに●おっさん受けは……潜在的にいるけど書く気力はないかなあ。とくに好きじゃないし
イクラ●おっさん受け言うても若い子にとっては30代とかでオッサンですよね?わしらにとっては30代ってまだ若造だけど…。(^▽^;)
黒井●おっさんは４０からですよ
来世子●格言『おっさんは４０から』いただきましたーｗ・＿・
わに●(゜д゜)ﾊｯ!　そうか、ならばうちの潜在的おっさん受けは、おっさん受けではなくガチムチ受けだ
イクラ●ガチムチ受け?!　遠いうわさにしか知らない世界だと思ってた…。こんな近くにあったなんて…
来世子●ｗｗｗ
わに●まだ書いたことはないんですよ。設定としてそういうキャラというだけでwそして書くことはないだろうという
イクラ●ちなみにラウールは46っていう設定なんですけどね。オッサン受けですよね。
わに●おっさん受けですね！
イクラ●そしてスパダリですよね。
わに●スパダリでしょうとも！
イクラ●そしてヘタレですよね!!!
わに●パーフェクトじゃん、ラウール様
黒井●パーフェクトですなｗ
来世子●実はヴァルドは1度だけ受けたことがあるとか言ったら笑える素敵w

イクラ●ヴァルドも若い頃はきっと受けたよ!!(無責任発言)
来世子●ｗｗｗｗｗ
わに●ヴァルドは経験としてはないけど、もしソアに童貞喪失の経験が必要だと思えばやるかもね
来世子●あー、わかる、うんうんｗ
イクラ●ヴァルド!!　漢だねえ!!
わに●単にソアが他の誰かと寝るのがイヤなだけなんだけどね
来世子●それが独占欲というものよｗ
イクラ●素敵ｗ
黒井●愛だなあ。
わに●でもソアの童貞喪失の相手はばーさん（の予定）。どこぞの手練れのばーさん
イクラ●ヴァルド、ショーック!!
来世子●マジか、私もショーーーックｗｗ　ちなみに、ばーさんっていくつから？ｗ　私くらいかなｗｗ
イクラ●すげ、笑い過ぎて汗でてきた。
来世子●ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ
わに●そんなに？w
来世子●汁かと思ったｗｗｗ
イクラ●ばーさんは80以上って教会の人がいってたｗｗｗ
来世子●ｗｗｗｗ　みんな自分より上を言うからねｗｗｗ
イクラ●70はまだまだだって。
わに●世界観の時代設定からいうと、50代はばーさんだなあ
来世子●私だｗ(*´艸｀)
イクラ●みんな早死になんだね。
黒井●50代なのか…40代だとばかり
わに●でも現代的な見た目で言えば、たぶん60代後半くらいの人になります
黒井●あ、ソアの初体験の相手ね
わに●但し、歯は半分くらいないから、もっと老けて見えるかな。ぶっちゃけはっきりした年齢設定してないんだけど、誰が見てもばーさんって感じだと思ってもらえれば
来世子●(゜Д゜;) ソアレーン、勃つのか？？ｗ(*´艸｀)
わに●相手が手練れなので。そして暗闇だったので。ソアレーン、見かけにこだわらんし。
黒井●大丈夫だよ若いもん。相手がパンダでも穴があれば立つ年齢さ。
わに●パンダwww
イクラ●パンダｗｗｗｗｗ
来世子●あと、閉経すると濡れなくなるから難しいぞよｗ
わに●パンダで勃つのも問題かもw

■レンコン

来世子●そういえば先日回って来た「レンコン」の話って本当なのかなあ？・__・ 相手に気付かれないようにって難しいと思うんだけど・__・
わに●レンコン？
イクラ●なんすかそれ
黒井●私も知らぬ。
来世子●受けが体の負担を減らすために、手筒にローション垂らして、後ろから股に合わせて、っていう技術？ あ、ちょっと違うな、ゲイが男だとばれないようにって話だったかも・__・ ごめん、あとで見つかったら回すねｗ＾＾；＞Twitter
イクラ●あい、お待ちしています。
わに●はーい
黒井●【レンコン】「カミングアウトしてないから、バレないようにしてね」という意味の古いゲイバー用語。事前に電話をかけて「今から会社の同僚連れて行くけど、レンコンでお願いね。」という風に使う。
って、記述がありましたが。
わに●ほほう
来世子●この技術を伝承しているのは最後の人かもとか、そんな記事だったような…あったあった、流した
黒井●あの一映画の「Mバタフライ」でさ、なぜバレなかったのかって一話がありまして
イクラ●よみました。ほほう、そういうことですか。男って女相手に入ってても入ってなくても気づかなかったりするからね。ホントだと思う。
来世子●正常位でかなり体を密着させてないと気付くと思うのですが・__・
わに●読んだ。でもこのツイート、参考文献に上げてる三件のうち二件が自著なのはどーかと思う
来世子●それは私も思ったｗｗ
黒井●腕長くないとできないね。
来世子●男だから手が長いのかなーとかｗ もういないと思ってたら、まだ伝承者がいたとか、そんな記事でしたよね。
黒井●今ならそんなめんどくさいもん使わなくてもオナホに誘導すれば名器扱いじゃね？
わに●Mバタフライって、あれ実話が元なんですよね。短期間とはいえ、実際に男と気づかずに夫婦として過ごしてた
黒井●Mバタフライは、睾丸を体の内側に収めて、穴っぽくして使用したとかゆー話で
イクラ●男と気づかずずっとスパイと寝ていた外交官、というはなしもあったよね。スマタまでやってたのに気づかなかったと…
来世子●睾丸を……痛そう(゜Д゜;)

イクラ●だんだん夜っぽくなってきましたね笑
わに●ですね……ふふっ
黒井●痛そうですけど、そうまじまじと見なければわかんないかもですねえ。
わに●宗教的だか文化的にだかで、着衣のまま致すって強弁したそうな
来世子●それは凄い・＿・
わに●全裸にならなけりゃ、東洋人の華奢な男性など白人男性からしたら女性と変わらんのだろうな
来世子●毛深くもありませんしねえｗ
黒井●中国の男性って、すね毛ないんだってさ！
来世子●ほー(゜o゜)剃っちゃうとかじゃなくて？(゜o゜)
黒井●もともとつるつるってきいたです。ほんとかしらん。
来世子●それは凄いｗ
わに●間際の男なんて、一定の年齢に達するまでは、とにかく突っ込んで腰振って気持ちよくなりゃいいと思ってるから、だまそうと思えばだませるとか何とか
来世子●私、体操男子の腋毛はいらんと思うのですが・＿・
わに●日本人男性のすね毛は、世界的にも濃いほうだそうで
黒井●間際の男ってなに？
来世子●発射間際ｗｗ
わに●まあそんな感じでｗ
来世子●お、かなり脱線したね？ｗ(*´艸｀)
わに●もうぜんぜん違う話ですねｗ
来世子●どこからこんなにズレたんだろｗｗ
来世子●成田美名子だったはずｗｗ
わに●成田美名子からかなり遠い話になったなー
来世子●ｗｗｗ
黒井●遠いねーレンコン……
イクラ●このへんどう編集すればいいのだろう(≧▽≦)
わに●ずっぱり切りましょう
来世子●ここはカットでｗｗ
黒井●そのままでいい気もする。カットかーｗ
わに●いいのかｗ
イクラ●そのままいこう!!
来世子●ｗｗｗ
黒井●だって、読みたいほうはこういうとこ読みたいんじゃないの？
イクラ●18禁だから!!
黒井●このぐだぐだのずるずるの脱線模様を！
わに●はっはっは

来世子●さすがに長過ぎるだろうｗ＞ぐだぐだ
わに●どこかで切る必要はあるでしょうが、まああとで考えましょう
イクラ●てきとうに3つくらいに分けますよ
来世子●あとは弓乃さんの腕の見せ所ですねｗ
イクラ●じゃあ、ログコピーしますね。
わに●お願いします

かくて夜はふけて、９月１６日のお茶会グダグダのまま終了ｗ

いつのまにか腐ってた　【第２号】

http://p.booklog.jp/book/124274

著者 : いつのまにか腐ってた
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/fukomyu/profile

感想はこちらのコメント、
http://p.booklog.jp/book/117731
またはツイッター（ハッシュタグ #いつのまにか腐ってた）でお願いします。

なお、各作品に登場する個人名、団体名等は架空のものですのでご了承ください。
各作品・エッセイの著作権および全ての権利は各作者のものですので無断転載等はご遠慮ください。
＊禁無断転載＊

No reproduction or republication without written permission.
本站内图文请勿随意转载 / 本站內圖文請勿隨意轉載
게시물 무단 전재 복사 배포 등을 금지합니다
Gebrauchen die Bilder ohne Genehmigung verboten.

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト